

幸運の女神様と共に (リメイク版)

圈外

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

不慮の事故で命を落とした佐藤和真。

後に『鬼畜のカズマ』と呼ばれる少年が死後の世界で出会ったのは、知力が低い水の
チンピラ女神では無かつた。

この小説は以前連載していた『幸福の女神様とともに』のリメイク版となります。根
幹の設定はだいたい同じですが、細かいところは変更して、前作とは少し違つたストー
リーでお送りしていきます。

第一話	目
第二話	
第三話	
第四話	
第五話	
第六話	
第七話	
第八話	
第九話	
第十話	
第十一話	
第十二話	

第十三話

1000

197 177

第一話

「ようこそ死後の世界へ。私は、あなたに新たな道を案内する女神。佐藤和真さん、あなたは本日午後14時21分に亡くなりました。辛いでしょうが、あなたの人生は終わつたのです」

——豪華な椅子に座る、この世のものとは思えないほどの美貌を持つ女性が、慈悲と憂いの感情を思わせる声で俺に語りかける。

例え初見だとしても、この女性の事を女神だと思わない奴は居ないだろう。そう思わせる程の神聖さを、女神（仮）は身に纏っている。

目が覚めると、そこは真っ黒な空間だつた。

何処まで続いているのかわからない深い闇の中だが、不思議と不安な気持ちは湧いてこない。

何故なら俺は、ついさつき死んだからだ。普通はこういう場面だと、まず思い出す

ところから始まるものなのだろうが、俺はハツキリと自分が死んだ瞬間を記憶していった。

無防備に携帯をいじりながら歩く女子高生。

女子高生に迫る大型トラック。

咄嗟に体が動いて、俺は女子高生を突き飛ばす。

そして、俺は——

「佐藤和真さん、貴方には幾つかの選択肢が有ります。このまま元の世界に赤ん坊として生まれるか、死後の世界に向かわれるか、それとも、」

「あの、一つだけ聞いても良いですか？」

目の前の女神は頷く。

「どうぞ？」

「あの娘は……俺が助けた女の子は、助かつたんですか？」

とても大事な事だつた。結果として俺の命を絶つた直接的な原因とはいえ——
——学校にもいかず引きこもり生活をしている俺の、人生最初で最後の見せ場だつただ。

女神は一瞬だけ気まずそうな顔をするが、すぐにさつきまでの優しげな表情に戻つて、

「ええ、彼女は無事ですよ。今も生きてます」

良かつた……

俺の死は、無駄じやなかつたんだ……

心の底から、そう思えた。そんな俺の安堵の表情を見てか、女神も心底ホツとした表情をしたが、すぐに真剣な顔に戻つて俺に語りかける。

「さて、先程も言つたように貴方には幾つかの選択肢が有ります。元の世界に記憶をなくして転生するか、死後の世界に向かうか。それと後一つ、この姿のまま異世界に行つて、魔王を倒す任について貰うかです」

「魔王を、倒す？俺が？」

「ええ、実は数多くの世界の中の一つが、少々面倒な事態になつていまして。私たち神に敵対する魔王の勢力が現地の人々を蹂躪し、人口が急激に減つてしまつてているのです」

女神は哀愁を漂わせるような顔と声で説明をする。聞いているだけで泣き出してしまいそうだ。

「それに、魔王軍やそれに生み出されたモンスターによつて殺されてしまつた人々が転生を怖がるようになり、魂の絶対量のバランスが崩れてしまつてこのままではその世界は滅んでしまいます。

事態を重く見た我々は、他の世界の若くして亡くなつてしまつた勇気ある方々にそ

の世界に出向いてもらい、魔王を討伐、または魔王軍やモンスターから住民を守つて貰うという事にしたのです」

「ふむふむなるほど。つまりは『魔王が恐いから生まれ変わりを拒否られて人がいなくなる。だから魔王を倒して!』って事か。

世界を運営するというのも大変なんだな。

「無論、平和な世界から送られる方々では魔王どころか低級モンスターだつて倒せません。ですので、何か一つだけ好きなものを持って行ける権利をあげているのです。

それはとんでもない才能だつたり、強力な固有スキルだつたり。神器級の装備、というのもあります。それらを手に、世界を救つて欲しいのです」

「おお! つまりチートを付けてくれると言うのか! これなら俺みたいな元引きこもりでも安心して冒険が出来そうだ。」

そして俺は妄想する。パーティメンバーに囲まれ、時に苦労し、時に笑い合い、そして英雄と崇められる未来を。

「わかりました女神様。この佐藤和真、必ずや魔王を打ち倒し世界に平和をもたらして差し上げましょう」

「俺はキメ顔でそう言つた。……女神様は小慣れた様子だつたが。

「勇気ある行動に感謝します、佐藤和真さん。魔王を討伐した暁には一つだけ願いを叶

えてさしあげましょう。

それではこの書類の中からお選びください」
その言葉とともに、今まで何もなかつた床に大量のカードが現れる。どうやらこのカードに記された能力や武器などを持つて行けるという事らしい。

「オススメは持つているだけでステータスアップの効果が得られ、更にこの上ない威力を発揮する神器級の武器です。特殊能力系の特典も人気ですが、使いこなすには相応の期間が必要となる場合が多く……」

……魔剣や神槍、凄い魔力がこもつた杖や指輪などの装備を見ていくが、いまいちパツとしたものがない。どれもこれも持つてているだけで勇者になれる程の装備なのだろうが、大体同じレベルの性能ばかりだ。これでは今まで送られた奴の二の舞……

そこまで考えて、ふと気付く。

今まで送られた奴にもオススメを教えたならば、つまりは失敗した例という事ではないか。俺はお世辞にも特別な人間とは言えないだろうし、今までの転生者と同じ事をしていくは簡単に返り討ちに遭うだろう。

つまり、何か今までの転生者とは違う事をしなければ、魔王を倒すなんて夢のまた夢なのだ。

そこでこの佐藤和真は考える。どんな能力を持つていれば魔王を倒す事ができる

だろうか？

能力を漁ると、敵を惑わす不可避の幻術、仲間の力を最大限に引き出す能力、あらゆる魔法操る、攻防一体の格闘術操る肉体などがある。

確かに強力なものばかりだが、ありきたりすぎる。出来ればハメ技に近い初見殺し能力……しかし魔王軍が情報戦に長けていれば、直ぐに対策されてしまう危険性もある。

ああでもないこうでも無いと考えを巡らせていると、女神様が困った表情をこちらに向けていた。

「……あの、早く決めてくれると助かります。確かに迷うところでしが、他の死者の案内もしなければならないので……」

「う、ごめんなさい！すぐ決めますから！」

女神様が申し訳なさそうだ。悪いことをしてしまつたな。

ああ、そうだよな。女神様だもん、まだ沢山やる事が……ん？女神様…………

後になつて彼はこの思いつきを、何て事をしでかしたんだこのバカズマが！と死ぬ程反省する事になるのだが、この時の彼は自分の事をまるで天才のように思う程舞い上がりてしまつていた。

「女神様！持つて行くものが決まりました！」

「漸く決まりましたか！それは良かつたです！さあ、佐藤和真さん。一体何を持つて行くんですか？」

「ふふふ……それはですね……

女神様、貴女です！」

女神様は、『は？』という文字が頭の上に浮いていそうなほど驚いた表情。

フフフ、やはり今までこの発想に至つた俺のような天才はいなかつたと言う事だな！

「より正確に言うならば貴女の能力が欲しい！女神様が使える全ての能力をください！」

「……面白い事を考える人ですね。そんな事を言われたのは初めてです。貴方の発想力には驚かますが、それは不可能です。

我々神が持つ能力は権能と呼ばれ、力が強すぎて人間には扱う事ができません。そもそも我々神は「承りました」

今度こそ本当に「は？」と口に出して唖然とした女神様の前に莊厳な魔法陣が出現した。そこから羽を生やした天使のような女神が現れ、言い放つ。

「佐藤和真さん。貴方の願いは受理されました。これより新たな世界に向かっていただ

きます」

直後、青い魔法陣が俺と女神様の足元に現れた。この流れから察するに……異世界に飛ばす用の魔法陣だろうか。

「は!?え、ええ!?ちょっと、ちょっと!…どういう事!?!?」

「いやほら、さつき其の方が仰つてたではありますか。『女神様、貴女です』と『そんな屁理屈みたいな……!』

ねえ嘘でしょ? 嘘だと言つてよ! 私女神なんですがど!! 下積みからコツコツやつてきて漸くこの立場まで……ちょっとノエル!? 何で何も言わないのよ!』

女神様はそれはもうこれ以上無いくらい焦つていた。魔法陣の壁（どうやら外に出られないご様子）をばんばん叩いて顔面蒼白になり、新たに降りてきた女神に喚き散らしている。

「申し訳ありませんエリス先輩。ですがこの男性に私たちが差し上げたのは何でも一つだけ異世界に持ち込める権利。

つまりあのカタログに無くとも、世界を滅ぼしたり破壊したり出来る危険な物以外なら特に指定は無く、何でも持つて行く事ができるのです。本当にこの男性の発想力には驚かされますね」

「そうじやなくてえ!!!

だ、だつて私神なのよ!? 確かに世界を滅ぼすとか、そんな物騒な力持つてないけども!!

それにこの役職に就くためにどれだけ努力したか、ノエルも知つてゐるでしょう!? 可愛がつてあげてるじゃない!た、助けてくれても……!

!?

「フフツ……恩を仇で返すようでもんなんさい、先輩。ですが……」

そこまで言つた所で、俺たちの体が浮き上がり、上空に光が現れる。いよいよ異世界に旅立つ事が出来るらしい。

これからどんな冒険が待つてゐるのだろうか。強力なモンスターを倒し、周りから評価を一気に上げ、時には自然の脅威に打ちのめされたりしながら、……ら、ラブロマンスも……!?

隣の魔法陣で慌てふためく銀髪の女神を連れて、俺はワクワクドキドキが待ち構える冒険の世界へと旅立つのだ。

「今の先輩の立場を得るためなら何でもする神なんて、いくらでも居るんですよ」「は、謀つたなー!! ちよ、まつ」

「それでは行つてらっしゃいませ、佐藤和真様、先輩。このお仕事は今後私が責任を持つて受け継がせていただきますね」

そうして、俺たちは光の中へ飲み込まれた。

第二話

「あ、ああ……あああ……あ……」

眩しい日差しに照らされる中世ヨーロッパ風の街に、俺達は降り立つた。

「ああああ……あ……ああ……」

辺りを見渡すと、遠くの方に高い壁が見えた。有名な巨人マンガを思わせる巨大な壁に囲まれた巨大な街である。

当然、敵に攻め込まれることを想定した防御壁なのだろう。日本に生まれた俺の常識とはかけ離れたその光景は、本当に魔王の軍勢と戦っているという現実をまざまざと見せ付けてくる。

「…………ああ…………嘘…………でしょ…………」

「うお、アレもしかしながら本物のエルフか!? あっちのケモミミはワーウルフ!! スゲエ！ 俺本当に異世界に来たんだ！ 生きててよかつた！ いや死んだけども！」

多種多様な姿をした人々がそこら中を闊歩している。どうやらこの世界には人間種以外にも様々な種族が生活しているらしい。

「と言うことは人間以外は魔物として扱われるみたいなダークファンタジー的な世界観

は無いのか。となるとやつぱパーティにはエルフの弓使いとか憧れるよな！

そういうえば冒険者ギルド的な組合つてどこに……あつ」

「……………」

いつね、忘れてた。

俺が異世界の光景に感動してはしやいでいる横では、転生特典として連れて来た銀髪の女神様が、茫然自失とした表情をして座り込んでいた。

「…………ふふ…………懐かしいなあ…………この世界…………確か2回目の担当だつたつけ…………それから幾つも担当が変わつてさあ…………何百年も頑張つて…………ようやく地球世界担当にまでなつたのに…………これで…………これで終わり…………ふふ、全部終わり…………」

この世の終わりみたいな顔をしながらぶつぶつと呪詛を呟いている。

「えっと、女神様？ まあ確かに可哀想だとは思わなくはないんですけど、どうやら転生特典は貴女みたいなので…………とりあえず冒険者ギルド的な所に案内して貰えると助かるんですけど」

普通なら慰めたり、それが出来なくともそつとしておく所だろう。だが、そこはカズマ。一応敬語は使つているものの、自分が連れて來た女神に対し最低な発言である。だがエリスの耳には、そんな鬼畜発言も届いていないようだ。

「……ノエル……良い子だつたのに……う……とつても……ひぐつ……頭も良くて……先輩想いで……ぐすつ……それなのに……わたし、尊敬されてなかつたのかなあ……そ……うだよね……えぐつ……」

「あの子には、私なんかより、役職が……うあ……だいじで……わたしなんか……ああ……先輩だから……それだけ……」

「……うええ……あやまるからあ……せんぱいらしくできなかつたことも……あんまり……えぐつ……ひぐつ……かまつて……あげられなかつた……うあ……こともお……だから……かえしでえ……」

「……てんかいに……かえしてよお……かえりたいよお……うえええん……ああああ……だれかあ……たすけてえ……うああああ……」

「……おつと?」

これはこれは。

急に不安になつていくカズマ。そもそもそのはず、仮にカズマがやつた事を某有名マンガに例えると、願いを叶えてくれる緑のによろによろに『神の力が欲しい』と言つた事と同じなのだ。

……まあ目も覚めるような美人……美女神?であるエリスと共に冒険が出来るのなら最高だし、そこはもう割り切つている。むしろ役得だし。

それはさておき、カズマはこの際エリスに全てを任せる気でいた訳だ。そのエリスが帰りたいと言つて泣いている……不安になるのも無理はないだろう。

更に言えば、彼は童貞。デートはおろか、そもそも女の子を何かに誘つた事すらない。そんな男が、泣いている女性を慰めるなんて高度なテクニックを持ち合わせているはずもなく……さすがのカズマも、決して少くない罪悪感を感じ始めていた。

トドメに、ここは大通りのど真ん中。そんな所で妙齢（に見える）女性が泣いているのだ。

そりやあたいそう注目を集めることだろう。

「うえええん……やだよお……かえりたいよお……ひぐつ……ぐすつ……ええええん

……」

「ちょっと、何アレ？ 痴話喧嘩？」

「あんな可愛い子を泣かせるなんて……いつたい何をしたのかしら？」

「女の方はシスターみたいな格好してるな……美人のシスターを誑かした上に泣かせるなんて許せん、俺と代われ」

「何という鬼畜……いつたい彼女はどんなプレイをされたと言うのだ……？」

「おい、これ憲兵を呼んだ方が良いんじゃ……？」

「うおおおおい!? ちょ、ちょっと向こうに行きましょうか！話しあおう！いや、悪かつた！俺が悪かったからお願いたします泣き止んでください女神様あ!?」

――――――――――――――――――――

「ほんとすみませんでした！調子こいて変な事口走つてマジすみませんでした！」

取り敢えず人が居ない所へ行つたカズマは流れるような動きで土下座をかました。漸く自分がしでかした行為がどれほど理不尽なものか気づいたようだ。

「ちょ、ちょっと……土下座なんてしないでくださいカズマさん。取り乱しちやつたのは私が……」

「やめて！これ以上聖人みたいな言葉を言わないで！罪悪感で死にそうになるから！」
「聖人と言うか、女神なのですが……」

慌てふためくカズマの様子を見てか、ここにきてエリスは多少の余裕を取り戻した。

彼女は非常に真面目な女神である。品行方正を体現したかの様な性格をしているエリスは、自らの置かれてる立場を静かに反芻し……覚悟を決め、笑顔でカズマの謝罪を受け入れた。

「さつきは情けない姿を見せてしまつてごめんなさい。えつと、まずは自己紹介をした方がいいですね。私の名前は……えつと、クリス、と呼んでください」

「クリス？でもさつきの天使はエリス先輩つて……」

「あ、いえその、実は私、この世界で国教として信仰されているものでして。ですのでエリスという名前はさすがに……」

なるほど、一理ある。国教で信仰されている女神と同じ名前で、同じ容姿。それは流石にまずい。

地球で言えば、それっぽいコスプレをした人が「私の名前はイエス・キリストです」と言つてくるようなものだ。本物ならなおさらだ。

「それと、そんなにかしこまらなくても良いですよ？今となつては、カズマさんも私も立場は同じようなものですし……」

「うつ……」

エリスからしたらそんなつもりはなかつたのだが、エリスを下界に引きずり込んだ張本人であるカズマからしたら全力の皮肉にしか聞こえなかつた。

「そ、そうですね……はい……」

「？ですから碎けた口調でも……」

「わかった！わかったから…………えつと……じゃ、じゃあさ。クリスはどんな事が出来

るんだ？」

「え？」

「何かあるだろ？」を司る女神ーとか。あとは特別な能力とかさ」

「……いえ、特に無いんですけど」

「えつ」

一瞬でカズマの表情が硬くなる。

「い、いや、さすがに何も無いってことは無いだろ？下界を見通す神の目とか、女神の加護で超強くなれたり……ほら、さつきだって権能がどうのって……」

「うーん……地上に降りるに当たつて神格も削られてるようですし、権能を振ることはできないようですね」

「え、ええ……」

「天界に居るのならまだしも、下界に降りてきているので把握とかは難しいですね……加護と言われましても、魔法が使えるわけでも無いですし……あ、私が魔力を込めたものだつたらアンデッドや悪魔など限定で効力を発揮したりしますよ」

「……」

「え、えつと……そ、そうだ！私幸運を司る属性を持つて居ますので、連れているだけで運気が多少上昇する効果がある……と思いますよ？ちょっとした護符くらいの効果は

あると思います、多分

マズイ。

ひよつとして俺はとんでもなく勿体無いことをした挙句、こんなに美しい女神様を下界に引きずり込んで……

「……めんなさい、カズマさん」

「はい？」

申し訳なさげに謝罪をするエリス。

実際には自己嫌悪で今にも崩れ落ちそうになつてているだけなのだが、そんな絶望的な表情をしたカズマをみて、自分が使えない女神だということを嘆いている、と受け取つてしまつた。

「私の力では、カズマさんのご期待に添えないようですが、私は貴方に選ばれて連れてこられた身です。神器や特殊能力の代わりとまでは行かなくとも、出来る限り冒険のサポートをします。

私、これでも女神ですから！」

「ほんとすみませんでした！俺みたいなカスが調子こいて転生なんてしてマジすみませんでした！」

「な、何もそこまで……私からしても魔王を打ち倒さないといけませんし……自ら出向

いたと考えればそれほど悪くも無い……ですか」

「ま・ままずは！冒険者ギルド的なところへ行きましょう！身分証明書と寝床を探しに！さあ！」

「え、ちょっとカズマさん？」

「良いですから！俺働きます！エリス様の為なら身を粉にして働きますから！」

——早くこの場を離れたいッ！もうどこでも良いからとにかく走り出したい！

死ぬほど気まずい！

エリスの手を取り早歩きで元の大通りに戻ろうとするカズマ。流石のカズマも相当堪えたらしく、かなり嫌な汗をかいている。

エリスは「クリスと呼んでって言つたのに……それに敬語……」と呟いているが、案外騒がしいのも嫌いじやないのか、意外にも楽しそうに笑顔を浮かべている。

普段は品行方正を絵に描いたような立ち振る舞いをしているエリスだったが、本来は結構活発な女神だつた。それこそ、別の世界線では自ら下界に自分の分身を降ろして、冒険者生活を楽しんでいた程に。

更に言えば、彼女が就いていたのは女神らしい僧侶職ではなく盗賊職。心の奥にはやんちゃな一面もあるのだろう。

送られた当初こそ余りの理不尽さに取り乱したが……実のところ、なんだかんだでこの世界も悪くないものだと思つてゐるのだ。

自分を連れてきた男カズマに対しても若干の不安はあるものの、この世界を担当していた頃は冒險者たちを観察し、この素晴らしい世界を気ままに生きる彼らの生き様を楽しんでいたこともある。

自分も自由な冒險者生活を楽しんでみたい。地球に住む少年と同じ気持ちを、エリスは少なからず持つていた。

「カズマさん」

「ツ……は、はい……なんでしゃうか……」

情けないカズマを見て、本当に大丈夫かと思いながら、まさに女神の微笑を浮かべるエリス。その顔を見たカズマは顔を赤くする。

「私、前にこの世界を担当していったことがあつたんですよ。この駆け出しの街アクセルは、よく覗いていたんです。冒險者ギルドの場所は分かりますから、案内しますよ?」「え……あ、はい。す、すみません……先走つちやつて……」

「ですから、もつと碎けた口調で。

「あ、そ、そうです……そうだな、ごめん」

女性に耐性がないのだろうか、カズマは未だに目を合わせてくれない。一抹の不安を感じたが、からの冒険生活で慣れていけば良いだろうと、エリスは迷いを振り払うように宣言した。

「ええ、この世界に来た以上、私たちは女神と人間ではなく、仲間です。私が天界に帰るためにも、さつさと魔王を倒して世界に平和をもたらしましよう！」

太陽のような笑顔を見せるエリスに、カズマはいともたやすく心を奪われる。この世の全てを恋に落としてしまいそうな笑顔に、童貞のカズマが逆らえるはずがなかつた。

「あ、ああ！ が、頑張ろうな！」

「はい、その意気です！」

鈴が鳴るような声を聞き、カズマはますます張り切つてしまふ。「やつぱり、エリス様を連れてきて良かった……！」と、エリスの後に着いて歩きながら感涙している。

勿論そんなカズマには、エリスが発した呟きなんてとてもじやないが届かなかつた。「カズマさんには私を連れてきた分頑張つてもらうとして、早く天界に帰つてノエルにキツイお仕置きをしなきやいけないしね……」

幸運の女神と幸運しか取り柄のないヒキニートの明日はどうちだ。

第三話

「着きました、ここが冒険者ギルドですね」

「おお！それっぽい！それっぽいぞ！」

「何ですかその反応……」

エリス様……もといクリスの案内で、俺は冒険者ギルドまでやつてきた。夢にまで見た光景に、ほんと反射的にギルドの中へ駆け出す。

扉をくぐると、まず酒の匂いが襲ってきた。未成年の俺には少々刺激の強い匂いに困惑し辺りを見渡すと、ギルド設営の酒場で多くの冒険者たちが酒盛りをしている。

世紀末を絵に描いたようなムキムキのモヒカン肩パッドも居れば、どう見ても冒険者には見えない華奢な身体の女の子も居る。

腰に剣を刺したフルプレートの剣士に、杖とマントを携えた魔法使いに、シスターのような格好をした僧侶職と思われる女性。その他様々な格好をした色物集団がみんな分け隔てなく、同じ場所で酒を飲んでいた。

真昼間から呑み明かす冒険者など、この世界の人々から見たら唯の口クデナシなのだが。

俺はそんな荒くれ者たちを見て少なくない感動を味わっていた。

（これが冒険者！何者にも縛られない、まさに自由を謳歌する職業って感じだ！）

以前は部屋に引きこもつてゲームばっかりしていただけあり、期待通りの『ザ・冒険者！』と言った雰囲気が気に入つた。多分俺は今日をキラキラと輝かせていることだろう。

酒場を通つて奥に行くと冒険者用の窓口があつた。取り敢えず一番可愛い人が受付をしているところへ行く。

「はい、どうぞー。今日はどうされましたか？」

ウェーブのかかつた栗色の髪の美人がにこやかに対応してくれる。うん、愛想笑いが実に堂に入っている素晴らしい受付だ。

「えっと、冒険者になりたいんですが、田舎から來たばかりで何も分からなくて……」

「そうですか。では登録手数料が掛かりますが大丈夫ですか？」

「えつ」

登録手数料？

思わずクリスの方を見ると、クリスはポケットの辺りを指差した。確認すると、俺のポケットには幾つかの金貨が入っている。

後から聞いた話だが、これはクリスが転生者を送る仕事をしている際に『異世界に送られたはいいが、寝床はおろか飯を食う金もない』と嘆く転生者を見て、送るときに最低限の小遣いを持たせる事にしたそうだ。送る用の魔法陣に細工をして、ポケットに一万エリスの金貨を入れる設定にしたらしい。

そんな転生者に親身になつた制度改革が認められ、クリスはスピード出世を果たしたそうだ。天界も下界も結局社畜になるしかるのは変わらない事がわかつて、ちよつと夢が壊れたが。

「はい、ありがとうございます。九千エリスのお返しになります。それではこちらの機器に触れてください。冒険者カードが発行されます」

冒険者カード。

冒険者ギルドに冒険者登録をすると発行してもらえるカードで、このカードには所有者のレベル、職業、ステータス、習得スキル、過去に討伐したモンスターの種族・数などの項目が表示される。

余談だがこのカードは、年齢や職業が正確に記されるという特性上、身分確認にとても便利なので日本における免許証のような役割を果たしている。そのため一般にも広く普及しており、街にいる大人ならば基本的に所持しているのだが、名前は冒険者カー

ドである。

閑話休題。

（おお！ここで俺の凄まじい潜在能力が露わになつてちょっとした騒ぎになるんだな！）

そうして俺は期待を持つて登録用の機器に触れた。すると機器に淡い光が灯り、冒険者カードに文字が記入される。

「はい、結構です。サトウ カズマさん……ですね。えっと……潜在能力値は知力が高いくらいで他は普通ですね……おや？ 幸運がとても高いですね。まあ幸運は冒険者稼業にはあまり関係がない数値なんですがね」

「あつ……そうですか……」

「……差し出がましいかとかもしませんが、本当に冒険者になられるんですか？ これだと基本職である冒険者にしかなることが出来ませんよ？ 一応レベルアップして能力値が上昇すればクラスチエンジも出来なくはないんですけど……」

これだけの幸運をお持ちでしたら、正直冒険者になるより商売人とかの方が向いていると思うのですが……」

「……」

「やめろお！そんな引きつった笑みで俺の冒険者カードを見ないでくれ！」

「え、えっと……大丈夫ですよカズマさん！その、冒険者は一応全てのクラスのスキルを習得できますし……それに、幸運が高いって言われたじやないですか！」

「職業補正も無いから本職の方のスキルには遠く及ばない威力しか出ず、さらに習得コストも割高ですけどね……さつきも言つた様に幸運は冒険者稼業では殆ど使いませんし……」

スキルの成功判定にボーナスが付きますが、失敗することが多いようなスキルを多用する冒険者さんはあんまり信用されない傾向にありますので、幸運値はないものと考えて行動することをお勧めしますよ」

「うう……幸運に関する現地人の反応が冷たい……！」

クリスがなんとか慰めようとしてくれたのに受付嬢が容赦なく否定してくる。こいつ本当に受付嬢なのか？冒険者の心のケアとかしてくれないのかよ！

受付嬢を睨むが笑顔で受け流され……仕方なく渡された冒険者カードを見る。

どうやら、俺は最弱職になつたらしい。

転職を勧められるほどの能力値でお先真っ暗とはいえ、これまで何度も俺が妄想し夢

見た冒険者になつたわけだ。ちよつと感慨深い。

……そう言えば、スキルの習得ってどうすればいいのだろうか。さつきの受付嬢はなんとなく抵抗があるから他の窓口で「えええええっ!?な、なんですかこれ！」

クリスの冒険者カードを見た受付嬢の叫びで周りの冒険者たちも騒めき出す。

「どうなってるんですかこの能力値！攻撃力、耐久力、知力も魔力も体力値も全ステータスがぶつ飛んでますよ！唯一幸運が人並みなくらいで、特に魔力と対魔力が尋常じやないです！貴女いつたい何者なんですか!?」

「え、えっと……どうもありがとうございます。」

え？ 幸運は人並みなんですか？」

「はい、幸運は人並みです。でも幸運なんてぶつちやけ盗賊以外では死にステータスなんで気にしなくとも結構ですよ！」

「うぐつ……あの……あんまり幸運の事を軽く見られるとちょっと私的にはダメージが大きいかな、なんて……」

「？よくわかりませんが、このステータスならクルセイダーにローンナイト、アーケプリーストにエレメンタルマスター。あとはアーケウイザードという手も……数多の冒険者たちの憧れである上級職にすぐになれますよ!!それで、クラスは何になされますか!?」

「うーん……それでしたら、アーケプリーストでお願いできますか？」

「アークプリーストですね！回復魔法はおろか蘇生魔法まで扱え、前衛に出ても問題ない強さを誇る万能職です！」

冒険者ギルドへようこそクリス様！今後の活躍を期待していますっ！」
さすがは女神と言ったところか、とんでも無い能力値を叩き出したらしいクリス。だがその笑みは引きつっている。

「……私、幸福を司る女神のはずなのに……いや確かに運が良いいって感じた事はあんまり無いけど……人並み……え？本当に人並み？」

「……？どうされました？」

「え、な、なんでもありません……ありがとうございます……」

「すげーじやねえかシスターの嬢ちゃん！いきなりアークプリーストなんてよ！」

「貴女凄いわね！こんなに可愛いのに能力も高いなんて……嫉妬しちゃうわ！まさにエリス様は二物を与えられたのね！」

「案外、あんたみたいのが魔王を倒しちまうのかもな！」

いつの間にか窓口の周りに集まってきた冒険者たちから熱烈な歓迎を受けるクリス。さつきまで幸運がどうとかで微妙だつたその表情も、今は少し恥ずかしそうに笑つている。

「……皆様、盛大な歓迎ありがとうございます！まだ駆け出して未熟なものでして、迷惑を掛ける事もあると思いますが、これから同じ冒険者としてよろしくお願ひしますつ！」

「「うおおおおー!!?・?・?」」

男性冒険者の雄叫びと、それを冷ややかな目で見る女性冒険者。何はともあれクリスの冒険者デビューはとても順調なものになつたらしい。

「あれ、俺の冒険者デビューイベントは……？」

《一ヶ月後》

「どうあああああっ！助けてくれ！お願ひします助けてくださいエリスさまあああ！」
「かつ、カズマさん！」

一ヶ月前に冒険者デビューを果たした俺らは、まず最初の壁にぶち当たつた。そう、他の転生者ならチートアイテムやチート能力を元から持っているので全く必要のないであろう最低限の装備を買う金がないのだ。

あの後武器屋に行つて駆け出し冒険者用の基本的な装備を探したが、とてもじやないが俺とクリスが元から持つていた二万エリスでは、一人分の武器さえ買う事ができなかつた。

それを稼ぐ為に、俺たちは働いた。幸い魔王軍と戦つているこのご時世、城壁の補強を目的とした工事の日雇いバイトは尽きる事がないので、この一ヶ月間はずつとその工事のバイトをやつて金を集めた。

もちろんそんなバイトで貯金を増やすのは厳しいのだが、ギルドに申請すれば無料で貸し出してくれる馬小屋に泊まり、同じように馬小屋で泊まる他の冒険者たちに飯や酒をおごつてもらつたりしながらコツコツ貯金し、漸く2人分の装備をそろえる事ができたのだ。

俺はショートソードとダガーを、クリスはメイスを購入した。自分で働いた金で物を買うということがこんなに嬉しいことだと知つたのは今は昔……やつと冒険者らしくクエストを受けることができるの俺はウキウキしていたんだが……

チュートリアルでありがちなゴブリンやコボルドなんかの弱いモンスターは、とつくの昔に駆除されて街の近くには住んでいないらしい。

当たり前といえば当たり前なんだが、こんな現実的な生態系は知りたくなかつた……「大丈夫ですよカズマさん！ 今のカズマさんは支援魔法で攻撃力も耐久力も俊敏性も上

がっていますし、どうにかなりますつて！」

「無理無理無理無理無理！死ぬ！異世界で土木工事だけやつてカエルに食われて死ぬ

！」

ジャイアントトード5匹の討伐。コレが俺たちが受けた初クエストだ。

ただのでかいカエルと言えば弱そうに聞こえるが、5メートルはあろうかという巨大なカエルが飛び跳ねながら向かってくるのはトラウマレベルの脅威だ。繁殖期になると人里まで下りてきて、家畜や農家の人々を襲うらしい。

この街のベテラン冒険者たちはこそつてこのカエルを狩るというが……
【筋力強化】！【防御強化】！【敏捷強化】！カズマさん！支援魔法を重ね掛けしましたよ！

「力が湧いてくるけど、怖いものは怖いんだよ！……ええい、喰らえクソガエうぐばつ！」

「ああっ、カズマさん！？」

カエルの懷に潜り込んでショートソードで攻撃するも、カエルの手で難に弾き飛ばされてしまふ。クリスが掛けてくれた支援魔法のおかげでなんとか無事だが、こんな奴駆け出しの俺に倒せる気がしない。

「カズマさん！？ちよ、カエルがこっちに向かってきてるんですけど！？た、助けて！私

美味しくない！」

「ウ、オラこのクソガエルがああああ！クリスに手エ出してんじやねええええ！」
前言撤回、刺し違えてでもこいつを殺す！

「た、倒した……」

俺たちの横に転がる頭蓋を割られて死んだジャイアントトード。クリスに狙いを定めている所を狙つて少しずつダメージを与えていき、1時間ほどかけてやつと一体討伐したのだ。

「やりましたねカズマさん！どうにかこうにか討伐できましたよ！」

「ああ、やつとだな……クリスのメイスがノーダメで弾かれた時はどうなる事かと……」「うつ……ごめんなさい……神聖属性の攻撃魔法つて打撃系ばかりな上に通常の生物に効果が薄くて……カズマさんばかり危険な目に合わせてしましたね……」

「何言つてんだ？今回のMVPはどう考えてもクリスだろ。支援魔法掛けてくれ無かつたら絶対俺死んでたからな？」

「ふふつ、その通りですね」

「ふ、こいつ……！」

ともあれ、俺たちはジャイアントトードの討伐に成功した。苦戦はしたが、俺たちで
もどうにかなる相手だと思うと気が楽になってきた。

「よし、あと4匹、このままやつてやろうぜ！俺たちなら行けるさ！」

「ええ、頑張りましようカズマさん！」

そう言つて俺ら2人がすがすがしい顔で振り返ると、遠くの方で三体のジャイアント
トードがこつちを見つめていた。さつきの俺たちのセリフがバツチリ聞こえていたよ
うである。

「…………」

三体が一斉にびよこびよこ跳ねながらこちらに向かってくる。

「た、退避ー!!?」

さつき倒した力エルをクリスが引きずりながら、俺たちは走り出した。
本日の成果。

ジャイアントトード一頭の討伐。

買い取り金額五千エリス。

……ちなみに日雇いバイトの日給は一人一万エリス。日雇い時代と比較すると、合計
一万五千エリスのマイナスである。

第四話

この世界におけるスキルとは、冒険者カードによつて習得可能な特殊技能のことを言う。

スキルは使用すれば使用するほどにスキルレベルが上がつていき、そのレベルに応じて効力や成功率などが上昇していく仕組みになつてゐる。魔法なら威力が高くなる、支援魔法なら上昇値が上がるといった具合だ。

スキルを習得するのは簡単だ。冒険者カードに記されているスキルを『習得しよう！』と意志を持つて指でなぞるだけだ。所謂御都合主義である。

ただし、魔力の流れやそのスキルの仕組みなどの知識を持ち、意識して魔力のコントロールを行うと魔法は効力が上がつたり、きちんと修行をして剣術を修めた者の剣士スキルの威力は普通より高くなつたりと、修行や研究は普通に効果を發揮する。何もレベルを上げてスキルを習得するだけで成長できるわけではないのだ。

スキルを覚えるためには『スキルポイント』が必要だ。強力なスキルほど習得コストが高く、逆に初級魔法のような簡単なものはコストがとても低い。

スキルポイントを得る方法は二つ。一つはレベルアップにより手に入れる方法で、もう一つはクラスを決める際に割り振られる初期ポイントだ。潜在能力値というか、才能がある者はレベルを上げる前から初期ポイントが人より高い。

例えば冒険者にしかならないほど潜在能力値が低いカズマの初期ポイントは100。それに比べて、女神であり最初から全ての上級職になれるほどの能力を秘めたクリスの初期ポイントは1000を超えていた。

例が極端すぎるので言つておくと、標準的な初期ポイントは20～30であり、最初から上級職になれる者であれば70～80の初期ポイントを持つていたという記録もある。初期ポイントが50を超えていれば文句無しで天才認定されるであろう。

カズマはその初期ポイントで、取り敢えず腐らなそうな片手剣スキル、盗賊スキルである隠密行動、敵感知を取得した。

このスキル群は酒場で酔っ払った先輩冒険者に教えてもらつたものだ。受付嬢が言つていた『幸運は盗賊職以外死にステータス』という言葉を聞いていたカズマは、唯一高い幸運を活かすためには盗賊職のスキルを極めよう、と思つた訳である。

が、幸運頼りの冒険者は『肝心な時に役に立たない』『ミスが多い』という理由で敬遠される傾向にある。至極当然な思考だ。

この辺の事情から、幸運値を活かすという路線は一先ず保留にしてカズマは野伏の役

レンジャー

割を目指すことに決めた。

クリスは取り敢えず全てのプリースト系スキルと修道僧^{モンク}系の攻撃スキルを取得したようだが、まだ多くのスキルポイントが余っているそうだ。

長々と話をしたが、結論から言うと……

「アレだ。このパーティには火力が足りない」

あのあとカエルたちから命からがら逃げかえり、今は自分たちが持つてきたカエルの唐揚げを食べている。淡白だが、鶏胸肉のような味がして結構美味しい。

「確かに、それは私も実感しています」

「だろ？ 酒場で教えてもらつた俺の片手剣スキルだけじゃジャイアントトード5匹なんて無理ゲーだ」

クリスは一応近接攻撃スキルである修道僧^{モンク}のスキルを覚えているが、その全てが打撃系でカエルには効果が薄い上、この世界の修道僧^{モンク}スキルというのは基本的にアンデットや悪魔などといった宗教に不浄なものに対抗するための物。普通の動物などに対しては殆ど効果が無いのである。

「じゃあ、仲間を募集しましょうか？ それなら募集用の掲示板に……」

「いや！ その必要はない。既に日星は付けてあるんだ」

「……？」

冒険者が仲間を募集する際に使用する掲示板、仲間を探している冒険者はそこに張り紙を貼るのが一般的なのだが、カズマはある可能性を危惧し、これを避ける。

(クリスは俺のメインヒロインだー他の野郎なんざパーティに入れる訳ねーだろー)

そう、自分より有能なパーテイメンバーの男がいれば、クリスがそつちに靡く可能性がある。それを阻止しようと言うのだ。

それに、候補がいると言うのは本當だ。

「ほれ、あそこにある女の子を見てみろ」

カズマは酒場の端の方に座る少女を指差した。クリスもそちらを見る。

そこには端正な顔立ちのお下げの女の子が居る。赤い服にマントを羽織り、杖を持っているその姿はまさに魔法使いといった感じだ。

「……ほら、あそこに魔法使いの女の子がいるだろ？ 実はあの子、この一ヶ月でギルドに登録したんだが、まだパーティを組んでなくてずっとソロで活動しているんだよ。しかも何故か掲示板に募集をかけてないんだ」

「……なるほど、確かに私たちのパーテイメンバーにぴったりな人のようですが……」

「どうした？」

「カズマさん、なんでそこまであの子の事を知っているんですか？ ギルドに登録した時

期まで……

あの、なんで目を合わせないんです？ ちょ……ま、待つてください……」

「……」「……」

クリスの提案で、まずはあの少女を観察してみることに。クリスは俺があの子を自分の好みだけで決めたのだと疑っているようだ。

それでは、彼女の1日を観察してみよう。

馬小屋で目を覚まして身支度を済ませると、冒険者ギルドへ向かう。もしかしたら挨拶をしてくれるかもしれないと考えながら、すれ違う冒険者たちをチラチラと見つつ受付のカウンターまで歩き、今日も誰一人声をかけてくれなかつたな……とこつそり肩を落としながら1人でクエストを受ける。

彼女が今日受けるのは冬牛夏草とうぎゅうかそうの討伐だ。群れで行動することも多いモンスターなので前衛職がいないのは少し厳しいな……と思いつながら、今から討伐クエストに赴く他の冒険者パーティをチラツと見て寂しそうな顔をした後、1人で街の外まで向かう。

クエストから帰ってきた彼女の服は汚れていた。攻撃を受けた訳ではないが、攻撃を避けた時などに転んだらしい。冬牛夏草は持ち帰ると買い取りでお金が貰えるのだが、魔法使い職で筋力ステータスが低い彼女は持ち帰ることができなかつた。外を見ると、朝に彼女がチラ見していた他のパーティがカエルの買い取りをして貰つてゐる。服を着替えて酒場に向かい、注文を聞きに来た店員に夕飯を注文する。1人で4人掛けのテーブルに座りながら夕食を食べ、偶に近くの席に座つてゐる冒険者たちの話に耳を傾け、別に話に入つてゐる訳でもないのに、彼らが笑うと彼女も釣られて軽く笑つたり、同意を求めるネタに頷いたりしてゐた。

酒を頼もうと思つたが、自分から話しかける勇気が無いので店員が近くに来るのを待つ。その間に、話をしていた彼らは席を立つてしまつた。それを少し寂しそうに見た後、食器を片付けに来た店員が運よく彼女に話しかけてくれたのでクリムゾンビアーワークスを一杯注文する。

それを1人で煽り、軽く酔つてきても変わらずそこに佇んでいる。もうBGMとなるような話をしている冒険者も居ないので、只々無表情で少しずつジョッキのクリムゾンビアーワークスを……

「暴れんなクリス！今行つたら俺らがストーキングしてたのがバレる！」

「離してくださいカズマさん！もう……もう……早く彼女をパーティに加えてあげましょうよ！なんで今まで放つておいたんですかこの鬼畜！」

「俺だってここまでとは思つてなかつたよ！よく1人でクエスト受けてるなーってだけで！」

見て いるだけで涙が出そうになる彼女の1日を観察したクリスは、必死の形相で涙を流すというおかしな状態だ。かく言う俺も何か変な汁が滲み出そうなのを必死で抑えているのだが。

「明日！絶対に彼女をパーティに加えましょう！わかりましたかカズマさん！」
「だから俺がそう言つただろ!!?」

「1日を無駄に過ごした俺たちは、明日彼女をパーティに誘う事を固く決心したのだとた。

第五話

その日の夜、カズマは一人考えに耽っていた。

(そもそもこの世界、なぜか可愛い子はかなり多いけど普通に考えてあのレベルの子がいたらナンパくらいあつてもいいと思うんだけどなあ……)

姿端麗、豊満な胸にすらつとした肢体、加えて中級魔法をバンバン使える恵まれた魔力値を持つた魔法使い職など他のパーティが放つておくはずがない。

だが、あの女の子はひとりぼっちだ。まごうことなきひとりぼっち。どこに出しても恥ずかしい真性のひとりぼっちである。

(……何か問題がある、って考えたほうがいいんだろうなあ……だけど……)

ストーキング事前調査してた時にはただのひとりぼっちな女の子という風にしか見えなかつた。魔法のコントロールが悪いわけでもなさそうで、おそらく連携も問題なくこなすだろう。

(となると、他人と関わること自体に何か欠陥があるタイプか、それとも…………いや、やめとこ)

そこまで考えて、カズマは考えることをやめた。どうせやる気になつてた女神様を止

める事なんて出来ないのだ、仮に性格に難があつても、クリスなら心ごと浄化しそうである。

その後、ひとりぼっちの彼女のことを色々と考えていたカズマが眠りに就いたのは30分ほどたつてからの事だつた。

翌朝。

「起きてくださいカズマさん！」

「ねむい」

「カズマさん!?」

クリスが起きた時間が早すぎるというのもあるが、昨日夜中まで運動していた俺は目覚めが悪かつた。

「そもそも今何時だと思つてんだよ……こんな早い時間にいるわけないだろ、まだ受付も空いてないような時間だぞ……」

「善は急げです！早く行きましょうよ！大丈夫、ああいう優等生タイプのひとりぼっちは時間や健康に厳しい事が多いで多分もう朝食を食べに来ているはずですよ！」
（…………ん？何気に酷いことと言つてるような……）

カズマが知る由もないことだが、女神時代のクリスは下界の人間を眺めるのが趣味

だつた。真っ直ぐな心を持つ人に救いを差し伸べる事を目的とした実益を兼ねた趣味であるがその過程で人間の心の機微に敏感になつたのである。

「いや、まあ一理あるけど……」

「とにかく、先に準備して待つてるので早く顔洗つて来てください」

「…………わかつたよ」

身支度をしてギルドの酒場に向かうと、クリスの言う通り、彼女は1人で朝食を食べていた。

「ほ、本当にいた……」

「ほら言つたでしよう？憶測ですけど、毎日1番早くギルドに来てるんじゃないですか？」

「あり得るな……」

「むむ、キヤベツ朝食セット……やはりキヤベツがいいと言うのは本当なのでしょうか

…………眉唾物だと思つてましたが……」

神妙な目つきで朝食を分析しているクリスには悪いが、何を食べているかなんてどうでもいい。

「ほら、行つてこいクリス」

「え、え!? なんで私が……」

「女の子同士の方が話しかけやすいだろ? さつきの憶測とかを見るにぼつちに対する対応も期待できそうだし」

秘技、丸投げ。悪質なシステム外スキルだ。

ぶつちやけ女の子に話しかける勇気などないことを大義名分にクリスに丸投げする気満々だったのである。

「ほれ、行つた行つた。あ、穩便にな? あんまり強引だとぼつちは萎縮するから」

「い、行きますから! 押さないで……ちょっと! どこ触つてるんですか!?!」

「お隣、よろしいですか?」

「えつ…………あ、あわわわ…………どうぞ」

「ありがとうございます」

ニッコリと笑顔で話しかけるクリス。ちょっと間が空いたが、見た感じ彼女もまんざらではなさそうだ。感触は良好か? と言った具合である。

だが、観察していた時よりも明らかに表情が堅い。恐らくは人付き合いが苦手なタイ

「…………今更確認することでもないが。

(よし、良いぞ。次はそれとなく切り出してみよう、世間話で打ち解けるのは苦手なタイプと見た)

潜伏スキルを使い、彼女のすぐ後ろからハンドサインを出す。クリスは小さく頷き、聖母の笑顔で語りかける。

「私の名前はクリスです。貴女、いつもソロでクエストを受けられていますよね？もし宜しければ、今日は私たちと一緒にクエストを受けませんか？」

「…………あつえつ！？あつ…………ほ、本当に…………？ついに…………ついに…………！」ああでも私なんかがこんな素敵な人に話しかけられるなんて何かの間違いかも…………いえ、ずっと待っていたチャンスじやない！村を出て苦節約一年、冒険者デビューを失敗してからここまで何度も村へ帰ろうと…………いやえつと、そんなことはどうでもいいわ！練習通り…………練習通り…………」

「…………あ、あの…………？」

おいおい、なんかうつむきながらブツブツ呟いてるんだけど。なんか今変なこと言つたか…………？

そんなことを考えてると、彼女は急に立ち上がり、無表情で、淡々と…………何故か名乗りを上げた。

「わ、我が名はゆんゆん。紅魔族族長の娘にして、中級魔法を操る者」

「…………」

「え、えつと…………」

な、なんだコイツ…………

「ゆ、ゆんゆんさんと仰るのでですね！それであの、クエストの方は…………う」

「…………う？」

(あ、これ逃げるやつだ)

俺は察した。急に名乗ったかと思えば顔を赤くして震え出した……つまりは、名乗りが恥ずかしいと感じてるんだろう。じやああんな厨二じみた名乗りあげるなよ！

「うわあああああん！！」

「ゆ、ゆんゆんさん！？」

「くそつたりやあ！」

「へぶつ!?」

名乗りを上げた途端逃げ出そうとするゆんゆんに、俺は渾身の足ひっかけを喰らわせてやつた。潜伏スキルからの足ひっかけなんて避けられる奴はそうそういないだろう。

多分。

「い、痛い！めぐみんの足ひつかけより痛い！」

「めんどくせえ！なんなんださつきから！」

「びいつ!?だ、誰?!」

「か、カズマさん!?何やつてるんですか!! 穏便に行こうつて……」

「もういいわまどろっこしい！」というかこのコミュ障に付き合つてたら日が暮れるわ

！」

「ひ、ひどい！」

潜伏スキルを解き、さつきとは打つて変わつて表情が豊かになつたゆんゆんに畳み掛け。

「お前アレだろ！この街で初めての冒険者とのコミュニケーションに失敗してそれからずつと萎縮してるやつだろ！」

「うぐつ……そ、それは……」

「そして『私なんかが……』『迷惑なんじや……』みたいなことばっかり考えて話しかけることもできず、他の冒険者に話しかけられたらそれはそれでパニクつて鉄仮面になるタイプだろ！大体わかつたわ！」

「で、でも……そんな……うう……」

「そもそも名乗るタイミングでもなかつたろ！あそこはクエストに行くかどうかだけ
言つて自己紹介は後からでも良かつたし、そもそも何だよあの変な……何だよクリス
！」

「ちよ、ちよつと！カズマさんこつちこつち！作戦タイム！
ゆ、ゆんゆんさん！ちよつと待つてくださいね～！」

「ええ……」

急に出てきて言うだけ言つてクリスに引つ張られていく俺。それを見て、ゆんゆんは
ただ呆然と立ち尽くしていた。

「え？冒険者……なんですか？職業の方ではなく？」

「ああそだよなんか文句あんのかコラ」

「ひい……」

「カズマさん！」

その後なんやかんやでクエストに行く約束を取り付け、今は情報交換の為に一緒に朝
飯を食っている。さつき俺とクリスの冒険者カードをゆんゆんに見せたところだ。

日常会話もまともに出来なさそうなキングオブばつち加減にしびれを切らした俺はゆんゆんに怒鳴ってしまい、クリスに怒られた。怒っていてもクリスは可愛がつたが、恐らく好感度が下がつたので俺は今若干機嫌が悪い。

そのせいもあってか、ゆんゆんには恐れられているようだ。が、そんなこと知るか。こんな面倒くさいやつとのフラグなんて立てなくとも俺にはクリスがいるし。

「いえ……アークプリーストのクリスさんと交さ……パーティを組んでいるのが冒険者の方って言うのが意外だつたので……」

「カズマさんも結構頼りになるんですよ？ 私が襲われそうになつたら助けてくれますし。今はちょっと怖いですけど……」

「ああ……」

何故か納得した様子のゆんゆん。

そんな話は良いんだよ。それよりゆんゆんのステータスだ。

「もう良いだろ俺の事は。それよりゆんゆんは何が出来るんだ？」

「あ、えつと、一応アーケウイザードやつてるんで、一通りの中級魔法と上級魔法を幾つか……」

「へえ……マジで？！」

「ひつ！……は、はい……」

驚くべきことに、ゆんゆんは上級職のアークウイザードだつたらしい。

「カズマさん、さつき彼女の名乗りで紅魔族つて言つてたじやないですか？」

「紅魔族と言うのは生まれつき高い魔力を持つてゐる一族で、優秀な魔法使いが多いんです」

「ほー、つまりはサイヤ人のエリート戦士つて事ね。羨ましいもんだ」

「……そんないものじゃないですよ紅魔族は……」

「ゆんゆんは小さく咳いた。エリートはエリートなりに何か悩みがあつたりするのだろうか？」

「ケツ、それでもパンピーの俺からしたら嫌味にしか聞こえんけどな」

「カズマさん！もう……ごめんなさいゆんゆんさん。普段はもっと優しい人なんですけど……」

「そりや女神様に対して暴言なんか吐けるわけないだろう。女神と知らないならまだしも、そんなことできる奴がいたらこの眼で見てみたいね。もし居たらぶん殴つてる。る。

「取り敢えずクエストに行こうぜ。ゆんゆんがパーティに加わるかどうかはそこで決めて良いから」「バ、パーティに!?でも私なんかが……」

「もういいわその謙遜は！」

嬉しそうな顔をしたかと思えば、急にわたわたしだすゆんゆん。

さつきのビビリ具合から察するに、怖がりかつ内弁慶の口下手で鉄仮面な良いとこ出のエリート。これは確かに友達などでき出来なさそうだ。むしろ孤高の戦士が似合う設定である……可愛らしい顔には似合わない称号だが。

カズマがこんなことを考へている最中、ゆんゆんはぼつち特有の深読みを存分に發揮していた。

「うう……こんな怖そうな人……しかも男女の2人パーティーなんて絶対付き合つてるよ……リア充だよ……カツブルの中に入つてやつていける訳が……でもせつかくのお誘いだしそもそもこのチャンスを逃したら一生パーティなんて組めない気がするし……意外とちゃんと話せそうだし大丈夫かな……？」

そして俺たちがやつてきたのは前回行つた草原。『3日以内にジャイアントトード5匹討伐』のクエストを受けている俺たちはまだ1匹しか倒していないにもかかわらず、昨日1日をゆんゆんの観察に使つてしまつたので時間が無いのだ。

そこで力エルがいる草原に来た。前回は1時間もかけて倒した1匹しか倒せなかつた力エルを4匹も倒さなきやいけないので、苦戦を覚悟していたのだが……

「アースバインド」

地面が波打ち、埋まっていた力エルが頭だけ地面に出現し、そのまま地面が固まつて力エルを拘束した。そして俺が頭をかち割り、とどめを刺す。

すかさず【敵感知】エネミーセンサーを発動させ、力エルが1匹だけの地点を探す。奴らは地面に潜つて寝っていて、音や衝撃で一斉に目を覚ますので、派手に魔法で倒すと囮まれてしまう。よつてゆんゆんには拘束だけをお願いして、俺が力エルを倒すやり方を取つてている。経験値泥棒とか言つてはいけない。

「ゆんゆん、次は向こうの丘だ。俺から25メートルの地点に1匹潜つてる」

「分かりました。【アースバインド】」

「【筋力強化】。ゆんゆんさん、魔力は大丈夫ですか？ 魔法を連発されますが」

「この位はなんとか……クリスさんこそ、凄い支援魔法ですね。この上昇値は聞いたことがないですよ。流石話題のアーヴプリーストですね」

「あはは……別に大したこと無いですって……」

「お前ら怖い会話してんじゃねーよ。俺の肩身が狭いじやねえか……よつと。これで5匹か……前回苦戦したのが嘘みたいに簡単に終わつたな。アーケウイザード様々だ」

「そんな……カズマさんこそ、前衛と司令塔を両立しているじゃないですか。凄いことですよ」

「ありがとな、ゆんゆん」

褒められるのに慣れていないのか、えへへと顔が綻ぶゆんゆん。

「ゆんゆんさん、どうですか？私たちのパーティに入つてくれますか？」
「えつと……お、お邪魔じやなけば、ぜひお願ひしたいですが……」

そう言つて俺の顔色を伺う。多分俺が怒鳴つたせいでもまだ怖がられているのだろう、クリスの目線が痛いぜちくしよう。

「……怒鳴つたのは悪かつたから、もう許してくれ……邪魔なわけないだろ？これからも宜しくな、ゆんゆん」

「は、はい！」

ぱああと笑顔になり、嬉しそうだ。

どうやら、一度友達になると一気に仲良くなれるタイプらしい。なんか簡単に騙されたので心配になつてきただな……

クリスもとても嬉しそうだ。仲間が出来たからつてよりは、俺とゆんゆんが仲直りしたのが気に入った様子。やっぱりクリスマジ天使。女神だけど。

「討伐数もクリアしましたし、帰りましょうか。ジャイアントトードの状態も良いです

し、報酬にも期待できそうです」

「そうだな。頭を一突きだし、ちゃんと絞まつてから色つけてもらえるかも知れないな」

「? なんでジャイアントトードの状態を気にするんですか?」

ゆんゆんが不思議そうに聞いてきた。

「なんでつて……買い取りして貰えば報酬に加算されるだろ? 傷んでなければ良い価格で買つてくれるし」

「買い取り……ああ、そういうシステムもあるんでしたね。すっかり忘れてました」

クリスはその言葉を聞いて、同情の涙を流した。

俺はクリスが何故泣いたのか少し考えた後、ゆんゆんの言葉の意味に気付いて、泣いた。

そうだった、この子買取システム使つたことないんだつたな……

「はい、ジャイアントトードの買い取りと今回の報酬を合わせて、計12万エリスとなります。ご確認ください」

パーティを代表して俺が報酬を受け取る。

1人4万ずつに分けたので、初日と合わせれば一人頭約4万2千エリスの儲け。それなりに待遇は良いように見える。

が、今回のような簡単なクエストはそう無いし、安定して稼いでいくにはもつと難しいクエストも受けなければいけないだろう。遠くからの依頼だと移動費もこつち持ちだ。

このパーティで一番危険な役割を持つているのは間違いない俺だ。陽動と壁役は下手すりや即お陀仏って事になりかねない。唯一の男だからしようがないと言えばそれまでだが……

「えええええ!?」

この先の生活のことを色々考えてると、聞き慣れた叫び声が聞こえてきた。

「じゅつ、13歳!? このプロポーションで!?」

「ええつ!? そうですけど……ど、どうしたんですか……?」

「いやいやいやいや！ 何食べたらこんなに……身長も私より高いのに……13……嘘でしょ……?」

「あの……クリスさんの年齢は……」

「聞かないでください」

「あつ、はい」

クリスとゆんゆんがおしゃべりしているようだ。今日はパーティ結成祝いと祝勝会。既にカエルの唐揚げとクリムゾンビアードがテーブルに並んでいる。

「発育がいいってレベルじやない……この世界基本的に栄養価も少ないはず……魔力量……？ いや魔力量は負けてないはず……やっぱりキャベツをいっぱい食べるべきなの……？」

うんうん唸つてクリスを尻目に、俺はテーブルに賞金の入った袋を置く。

「ほら、報酬金の1・2万エリスだ。1人4万づつで良いよな？」

「え、いや悪いですよ。私は最後の1日しか居なかつたわけですし……」

ゆんゆんが山分けを渋る。こんな控えめな性格も災いして友達がいないのだろう。

「どうせ初日に1匹倒しただけですし、気にしなくても良いですよ？ 今日は間違いなくゆんゆんさんがMVPですから！」

「そうそう、仲間なんだから遠慮は無しだ」

「つ……仲間……」

何か堪えていたものが溢れ出したように、ゆんゆんは泣き出してしまった。どうしたかとクリスが慰めようとするも、ゆんゆんは止まらない。

「わた、私つ……今まで、友達とか、殆どいなくて……だから……わたし……ううつ……」「……ゆんゆん……」

このぼつち、相当哀しい人生を過ごしてきたらしい。まだ13歳らしいが、随分寂しい青春だったのだろう。

「大丈夫、私がいるから大丈夫ですよ。だから泣かないで。もう友達でしよう？私たち」「つ……はい……！　はい……！」

クリスにしがみついてわんわん泣くゆんゆんと、聖母のような優しい笑みでそれを包み込むクリス。

……美少女が抱き合つてゐるのを見ると、心が浄化されていくような感じだ。

なんか、たまにはこう言うのも、良いものですよね……

「さ、いつまでもしんみりしてゐるのもアレだし、さつさと食おうぜ。今日は新しい仲間の歓迎会だからな！」

「！　はいっ！」

そうして新しい仲間を加えた俺たちのパーティ。順風満帆な冒険者生活だと思うが、順調すぎて逆に不安になるのは俺だけでしょうか。

「カズマさん、食べないならこの軟骨は私が貰いますね」

「あ！　それは俺が取つてた奴だぞ！」

「なんかあつちも騒がしいですね。宴会でもやつてるんでしようか？」

「なんだ、あつちに混じつてくるか？　ゆんゆん」

「え、宴会に混じるなんてそんな！宴会に参加すると言うのはちゃんと前もつて連絡を入れないとご迷惑に……！私が宴会に混じつても何も出来ませんしそれに……ま、このパーティなら心配するだけ無駄だろう。……無駄だよね？」

第六話

「クリエイトウォーター」

俺が唱えると、掌から水が湧き出す。

チヨロチヨロと情けない音を立てながら、コップをいっぱいにした所で止まつた。
前回のクエストでジャイアントトードを5匹討伐する時、その全てのトドメを刺した
俺はレベルが6まで上がつていた。

この世界では、モンスターを倒すと経験値が貰えて、経験値が溜まつたらレベルが上
がるというゲームのような世界観になつてゐる。

クリス曰く、経験値とは生物の魂の欠片で、俺たちは倒したモンスターの魂を吸収し
てゐるらしい。それは俺たちの魂の養分となり、魂そのものが強くなるので肉体が変わ
らなくても強くなれるのだそうだ。

因みに肉体労働でも、肉体に運動した魂が強くなるとか何とかで経験値は貰える。実
際に一ヶ月の労働でレベルは上がつた……たつたの1だが。

「……ふはあ。良い感じに冷たくてうまいのな。自分で出した水つてのがちょっとアレ
だけど……」

レベルが上がつたことでスキルポイントが溜まつた俺は、前々から取ろうと思つていた^{スティール}窃盗と初級魔法スキルを取得した。^{スティール}窃盗は相手からランダムで物が盗めるスキルで、幸運度が成功率に直結する。俺の幸運度を活かすにはうつてつけのスキルだ。

初級魔法は全属性の初級魔法を一気に覚えられるスキル。これだけで見ると初心者にうつてつけの便利スキルのように見えるが、基本的に初級魔法に殺傷能力は欠片も無い。一応それ相応の魔力を込めれば攻撃手段として使えなくは無いが、あまりにも効率が悪すぎる。

故に攻撃魔法とは呼べず、専ら生活用の魔法のような扱いだ。主婦の知恵レベルである。その為、世の魔法使い達は初級魔法は取らず、いきなり中級魔法から取るのが一般的だという。

【ティンダー】

指先からマッチのような火がボツ、と小さな音を出して灯る。モンスター相手に、とはお世辞にも言えないが……非常時の灯りとしては使えそうだ。初級魔法も結構使いどころがありそうなもんだけどなあ……

「初級魔法で……」

「何だよ、なんか文句あんのか？」

「こいつはダスト、街のチンピラだ。剣士2射手1魔法使い1という模範的なパーティの剣士で、まあよくあるモブである。因みに俺に剣術スキルを教えてくれた張本人だ。かなりノリの良い奴で、剣術スキルを教えてくれた事もあり仲良くしている。今は街の隠れたスポットを案内してくれるというので、男2人哀しく散歩しているところだ。「初級魔法取るくらいなら盗賊スキルをもつと取れば良いのによお。つーかカズマお前、盗賊にクラスチェンジする気じやなかつたのか？」

「良いんだよコレで。色々なスキル覚えてオールマイティにこなせるようになつた方が、全てのスキルを覚えられる冒険者の唯一の利点を活かせるつてもんだろ？」

「ほー、知力ステータスが高いやつの考えることはよーわからん」

「お前な……冒険者という職の強みを活かした戦法を考えないと、あの2人について行く意味すら無くなるし。これでも色々考えたんだぜ？」

……本音は俺も魔法を使つてみたかつただけなんだけどね。

「それだよカズマ！お前あのアークワイザードをどうやつて仲間に引き込んだんだよ！あの有名な孤高のアークワイザード、紅魔族の美女！」

「いやいや、ただのコミュ障だぞあいつ。それからゆんゆんは美女つて歳でもねえ、まだ

「13歳だ」

「13歳だろ!?」

「いやそれよりコミュニティって……仲間も募集せず掲示板には見向きもしなかつたのにか
？」

「話しかけると避けられるから、何処もこぞつて掲示板の募集でアピールしてたのに一
読すらしなかつたって聞くぞ？」

「……受付の説明ですら、数週間ぶりの会話だったから緊張してて聞いてなかつたんだ
と。」

だから募集掲示板を今まで名指しの依頼をするための掲示板だつて勘違いしてたら
しい」

「……うわあ」

ガチじやん……と悲しい表情をこちらに向けるダスト。そうだよな……空気読まず
に話しかければ1発だつたのに珍しく周りに合わせたらコレってのは結構キツいだろ
う。

「じゃあ、クリス様は？お前はあのクリス様を一体どこでゲットしたんだ答えろカズ
マア！」

ダストは必死の形相で俺の胸元を掴む。マジで必死だ。しかもクリス様て……

「ちよ、掴みかかるな暑苦しい！てかクリス様って何だよ！」

「お前知らねえのか？クリス様はなあ、俺らみたいな回復役がいないパーティが傷を負つて帰ってきたときは無償でヒールかけてくれるんだよ！クリス様に治してもらいたくてわざと擦り傷付けて帰つてくるバカもいるくらいだ！もうクリス様って言やあ『アクセル一の女神様』で通つてんだぜ！」

さ、早速バレてる……。

「ま、マジでか……まあクリスは女神だからな。お前の言いたいこともわかる」

「チツ！！これ見よがしにクリス様のこと呼び捨てにしやがつて……お前いつかモテない冒険者に殺されないように気を付けろよ。お前を羨む奴は山ほど居るんだからな」

怖えよ！気持ちはめっちゃわかるけど！

と言うか、名前を変えてもやっぱり女神つて扱われてんだな……唯のあだ名といえ、

流石は主神エリス様。

「ははは……肝に銘じとくよ……」

「つたく……あ、女神と言えばさ、今日酒場に行けば「おい、其処の2人。聞きたいことがある」ん？」

声をした方を向くと、ピシッとした白スーツを着込んだ女がいた。

歳は二十代前半と言つたところか……？胸はゆんゆんより小さいが、背が高く手脚がスラツとしたモデル体型の美人だ。いやそれよりも……

「……おめえ、見ない顔だが、その剣。王都の冒険者か？何の用だ」
俺やダストが持つている剣とは格が違う、鞘に金細工があしらわれた高そうな、それでいて何かしらのオーラさえ感じる剣。

まさに名刀つて感じだ。一体いくらするのだろうか。

「別に貴様らに用があるわけじやない。人を探してゐるんだ。それだけ聞ければいい」

「……それにしても偉そだなこの白スース。同じことをダストも感じてゐるらしく、イラついてるのが目に見てわかる。

この白スース、信用とか心象と言うのを何もわかつていない。交渉するにももつといいやり方があるだろうに。

「……んで？お前みたいなヤツが誰を探してゐるつて？」

「……女神と呼ばれているアークプリーストの少女だ。聞き憶えはないか？」

……なに？

「はあ？ なにを「悪いけど聞いたこと無いな。他をあたつてくれ」

ダストの言葉を俺が遮る。

「……そうか、すまなかつたな」

そう言つて白スースは去つていつた。

「……おい、カズマ」

「はつ、大方クリスの評判を聞いて来たんだろうが、あんな奴にウチの敏腕アーケプリーストを渡してたまるか。あんな奴と一緒にいたら、クリスの女神性が穢れちまう」

あんないけ好かない白スースにクリスは渡さん。と言うか、俺が転生特典として連れてきたんだ。つまりクリスは俺のもんだ。

「でもよお、アイツが他の冒険者に話を聞くかも知れねえだろ？ どうすんだよ」

「あんな態度の奴にクリスを売る男が居るとは思えんし、モデル体型の美人が嫌な奴だつたら女ウケも悪いだろ。誰も話さねえよ」

「……確かに、それもそうだな」

そう言つて悪い笑みを浮かべるダスト。人に嫌われて交渉ができると思うなよ
白スース。

「……だけど直接会われると厄介だ。確かクリスは今ゆんゆんと買い物に行つてるか

ら、今から探しに「ほう、クリスと言うのか。いい事を聞いた」ツ!?

振り返るとそこには、さつきの白スースがいた。

「あんな不自然な態度で私を欺けると思うなよ。私は何もそのクリスと言う少女に危害を加えようということじゃない。さつさと居場所を教える」

「……てめえ、なんでそこにいる。さつきあつちの方に行つた筈だろ」

驚きつつも、睨みながら問うダストに対し、白スースは自慢げに革靴で地面を叩く。硬そうな外面とは裏腹に、革靴特有の硬い音は一切聞こえてこない。

「フツ、教えてやろう。この靴だよ。この靴は足音を消してくれるんだ。モンスターの背後に回ることもできるし、お前らみたいな奴を騙すこともできる。良いだろう?」

この野郎……!

「ま、どうせ正攻法じや教えてくれんだろうしな。お前も冒険者の端くれなら、剣に全てを委ねようじゃないか」

……………ほお、面白い。

「私と勝負をしよう。私が勝てば少女の居場所を教えて貰う。もし君が勝つたら……そうだな、私の有り金全額でどうだ? ココに300万は有るが?」

「乗つた」

「おいカズマ! 何も相手にする事は!」

「だけどここじや都合が悪い。場所を変えるぞ。ダスト、お前は審判を頼む」「カズマ!!」

「ほう、まあ良いだろう。ちょうど良いハンデだ」
……見てろ傲慢クソ白スース。大恥かかせてやる！

『アクセルの街・路地裏』

(おいおい、マジでやるのかよ!? 勝ち目なんて無いぞ!?)

(まあ見てなつて)

(アクセル最弱レベルのお前が誰に勝てるつてんだよ！自分が上級職二人組の金魚のフンつて事を忘れたのか!?)

(お前後で覚えてろよ……)

ここはギルドの近くにある裏道。道幅はだいたい5メートル程度で路地裏にしては結構広いが、暗く日が射さないのが特徴だ。

「ここだ。文句は無いだろ?」

「ああ、文句は無いさ。それにもしても、君たちみたいなチンピラに相応しい場所だな」「この野郎……！バカにしやがつて！」

「よせダスト。挑発に乗るな」

憤るダストを俺が諫めると、白スースは感心したように息を漏らす。

「……ほう、見た目よりは頭が回るようだな」

……チツ、いちいちムカつく白スースだ。

こいつが挑発している理由は単純、真っ向勝負に持ち込むためだ。

あの剣といい挑発といい、コイツは戦士職。それも上級職だろう。そうでなければここまで自信は無い。そんな白スースは真っ向勝負に持ち込めば絶対に勝てると思つてゐる事だろう。

だが、コイツはアホだ。いくら剣を持っているからといって、俺の言う通りにノコノコこんな路地裏まで付いてくるのはアホとしか言いようがないし、真っ向勝負なんてやるわけが無い。

(例えどこで数十人の仲間を連れて來るとか考へないのか?)

と言ふか、着てる高そうな白スースやの大剣……金持のボンボンの可能性もありうる。

「……ルールを決めよう。一撃を喰らうか、武器を失つた方が負け。勿論逃げたりしても負けだ、いいよな?」

「問題無い。さあ、始めようか……!」

そう言つて剣を抜こうとする白スースに、俺は待つたをかける。

「待て」

「……何だ？ まだ何かあるのか？」

コレは決闘であつて、殺し合いじや無い。それにコイツは俺にクリスの居場所を聞く
という目的があり、俺に致命傷を与えることもできない。

いくら強いと言つても、手加減するしか無い状況にあるのだ。それは白スースも良く
分かっているはず、つまり奴は手加減前提で俺と戦うという事。まあ要するに……

「済まんが、お前のクラスとレベルを教えて欲しい。殺したりしたら不味いからな……
お前が教えてくれれば、俺のも教えてやるよ」

「チツ、舐めた口を……まあ良いだろう」

俺に超有利なことでも、ちよつと挑発してやればこいつは余裕で喋る。

つまりはめちやくちや舐めてかかっているのだ。最早コレを勝負と思つてすらいな
い。ここを上手く突いて立ち回る事で有利に動けるはず……

「私のクラスはクルセイダー、レベルは31だ」

「なつ……!?」

ハア!? 高っ！ 普通こういうイベントつてレベル15くらいの敵じやねーのか!? 物語
序盤で出てきて良いレベルじやねーぞ！

「そ、 そうなのか……ふうん……」

「フツ、 恐気付いたか？ 今すぐ居場所を喋るんなら見逃してやつても良いぞ？」

「お、 恐気付いてねーし。俺のクラ【ステイール】ツツ!!」

突き出した手から閃光が逆り、 辺りを包み込む。 良し、 ひとまず成功の様だ。
奇襲、 成功。 白スーツもダストもポカンとしてるし、 コレでコイツの剣を奪つて俺の
勝ちでもよし、 財布を盗んで逃げるもよしだ。

さて俺が盗んだのは……？

「な、 貴様ツ！ 騙し討ちなど、 恥を知れ……？ つ！」

怒つて剣を抜くかと思いきや、 顔を赤くして股間を押さえる白スーツ。 そう、 俺が盗
んだのは……

「なんだよ、 白スーツ着てるくせに黒か。 旅なんてしてる奴が黒下着なんて着るなよ恥
を知れ……ぶつ」

「き、 貴様アアアアア!!!」

「おつと待ちな【クリエイト・ウォータ】 ア!!!」

「何ツ!? 魔法だと!?」

白スーツは反射的に飛び退く。 俺の魔力の4分の1ほどを込め、 大音量で唱えた【ク
リエイト・ウォーター】は、 俺と白スーツの間の地面をビヨビヨに濡らした。

「そしてすかさず【フリーズ】ツ!!」

矢継ぎ早に初級の凍結魔法【フリーズ】を全力で地面に放つ。これで俺の魔力はほぼ空同然だが、これで充分。ステイールの消費魔力は軽いので10発以上は打てるはずだ。

「また初級魔法、何故盗賊のお前が……まさかお前！ 基本職の冒険者なのか!?」

「ククク、ようやく気付いたか……そうさ、俺は冒険者だ。そしてお前は！ もう既に『詰んだ』んだよ！」

「何だと!?」

「な、何言つてんだカズマ？」

しようがない、アホのダストにもわかるように説明してやろう。

まず今の状況はこうだ。俺は白スーツの黒下着を盗み、地面に水を撒いてそれを凍らせた。地面には氷が張っていて、彼女は革靴を履いている。あの革靴はどう見ても足音消しの特殊能力特化みたいで走りにくそうだし、それはそれは良く滑る事だろう……クク。

「これでお前がこつちに来るより早く俺はステイールを唱える事ができる……初めに言つて置くと、俺は幸運が半端じやなく高い。ステイールを失敗する事などまず無いと思つて貰おう」

「……? 何だ、ステイールごときで何を言つてゐるんだ! と言うかぱんつ返せ!!」

「まだ分からぬのかポンコツ白スース」

「誰がポンコツだ!」

「こういう事だよ! おおーい!!!! お前らあー!!! 僕はここだぞー!!!」

「はあつ!?

そしてその声をトリガーに、今まで誰も居なかつた路地裏が急にガヤガヤとざわめき出した。

「お、何だここか」

「おいカズマ、街中での魔法は禁止だぞ。何やつてんだこんなところで」

「ケンカか? 相手のスースのねーちゃんは誰だよ、見ねえ面だが」

「また女ふつかけたのか? くたばれクソ野郎」

先ほど大音量で初級魔法を唱えたこともあり、ギルドの近くであるこの路地裏に、今まで酒場でグダグダしてた冒険者たちが集まつてくる。

今の時点ではノーパンである白スースは顔を赤くしモジモジしている。とんでもなく恥ずかしそうだ。まあ当たり前だろう、こんな往来で体のラインが出るスースを着てノーパンなんて明らかに痴女だ。

「お、お前、一体何を……」

「俺は、男女平等の精神の元に行動し、女だろうがドロップキックを喰らわせられる男……」

もしここで俺がステイールを発動し、『幸運にも』お前のズボンを盗めたとしたら
どおーなる事かなあ!?」

「はあ!? ふ、ふざけるのも良い加減にしろ! そ、そんな事をしたら、どうなるか分かつて
るのか!?!」

「なーに言つてんだあ? この決闘をふつかけてきたのはお前だろ? 俺は高レベル上級職
の奴に『剣を見せつけられ』て『仕方なく』決闘を受け、『身の危険を感じて』反撃を試
みた。 そعدつたよなあダストオ! 審判のお前なら勿論『公正公平に』判断してくれる
よなあ!?!」

「な、何だと……?」

急に顔を青くする白スース。俺の考えが伝わったのか、ダストは悪い笑顔を浮かべて
堂々と答える。

「確かにそうだぜカズマ! お前の言葉に一切の嘘は無い!」

「ほれ、審判もこう言つてる事だし、実際間違いは無いだろ?」

いや、クルセイダー怖いわ。 とつても怖いから、不本意ながら、誠に不本意なが

ら反撃するしかねえよなあ！「ステイール」ツ!!

閃光。チツ、今回盗んだのはネクタイだつた。次々つと。

「き、貴様ア！卑怯なマネを」

「ステイール」ツ!!お、当たりだ

「!?ま、まで！お前ふざけるのも……ぶはつ!?

錯乱し、俺を捉えようとこちらに走つてくるは良いが、地面に張つた氷に足を滑らせて転んでしまう。計画通りだ。

今回盗んだのはヤツが大層ご自慢なさつていた革靴だつた。いかに高レベルのクルセイダー様といえど、靴下で凍つた地面の上を走るなんて愚行を犯したら転ぶしかない。

そしてようやく状況を理解したのか、冒険者たちが騒ぎ出した。「良いぞカズマ」だの「まさに外道」だの「そこに痺れる憧れるウ~」だのと言つた下衆な笑い声がそこらじゆうから聞こえてくる。それを聞いた白スースは顔面蒼白で大層慌てている様子。俺の策に翻弄され、地に伏して慌てる高レベルクルセイダーの女……

やつべ、楽しくなってきた。止まんねえなコレ。

「わ、分かつた！私の負けで良い！降参だ！金はやるから、早く私の衣服を返し」

「ンツン~？なあにい~？聞こえんなあ~？『申し訳ございませんカズマ様。二度と

逆らいませんので卑しい私めに衣服を惠んで下さい』だろうが！【ステイール】！

あら、大当たり。ベルトだ。

白スースは小さな悲鳴を上げ、ぴつちりとしたズボンを抑える。恐らく下手に動くと
ずり落ちてしまうのだろう。笑える。

「おいふざけるな！お前がやつてる事をよく考えてみろ！普通に犯罪だぞ！」

「だからふつかけてきたのはお前だろ？『高レベルのクルセイダー』が『低レベルの冒険者』に『決闘をしろ』と迫つたんだろ？誰が悪いって？もう一度よく考えてみろや」「ぐつ……」、この野郎……！うぐぐ……

「な、なあカズマ。もうその辺で……」

「ヒヤーツハツハツハア！【ステイール】！」

「これはこれは！今回の商品、サイフか！金欠の俺にはありがたい！

「おつとつと？これで降参を受け入れる意味もなくなつたなあ白スースちゃん？いやで

も、誠心誠意謝罪してくれればもしかしたら改心するかもよ？どうする？ん？」
「ヒツ……た、助けてくれ！こいつ頭がイかれてる！」

「あつれれく？おつかしいぞく？この人、さつきぼくがいつたこともうわすれてるなあ

？【ステイール】ツ!!

チツ、耳飾りか。ハズレだな。

「ぐぐぐ……も、申し訳ございませんカズマ様……一度と逆らいませんので、その、卑しい私めの」

「おつと時間切れ。【ステイール】!!」

お、ジャケットか。上を剥くのも現実味を帶びてきたな。

「申し訳ございませんカズマ様ア！一度と逆らいませんので卑しい私めに衣服を恵んで下さいイイイ！」

「えつ？なんだつて？」

「おいカズマ、もう止めようぜ。流石に不憫になつてきただだが……」

「何言つてんだダスト！ここからが本番じやねえか！見てみろ、もうじき上か下が剥け

るんだぜ？それでも男かよ！【ステイール】!!」

チイツ！靴下かよ！靴下は履いたままの方が工口いつてのに！

「も、もう許して……うぐ、私が悪かつたから……もうクリスさんには関わらないから……ひぐつ……お願いしますう……」

「フハハハハ！今更泣いたつてもう遅いわ！さて盛り上がりつてきたところでそろそろ本命行つてやるぜ野郎共お！おい何黙つてんだア!?しょーがねえな！俺が大歓声を巻き起こしてやるよ！【ステイー

「カ・ズ・マ・さ・ん？」

る？

「何を……やつて いるのですか……？」

正気に戻ると、さつきまで歎声とヤジに支配されていたこの場に声を上げているものは居なくなっていた。嫌な予感がして後ろを振り返ると……そこには能面のような笑みを貼り付けたクリスが立っている。

ゆんゆんは居ないな、さすがに置いてきたのかな？とか現実逃避をしていると、クリスが俺の肩を万力の様な力で掴み、こう言つた。

「事情は後でじっくりと聞きますから、まずはその衣類を持ち主に返して下さいね？」死刑宣告に等しいクリスの言葉と共に、騒ぎを見に来ていた女性冒険者が呼んだであろう憲兵の声が聞こえる。

……拝啓、異世界のお母様。

あなたの息子は、二度めの人生を終えた様です。
めんぐ。

第七話

今、酒場にいる全ての人が俺たちの動向を見守っていた。

そこには正座をしている俺と、笑顔だが目が笑っていないクリス。聖女とも女神とも呼ばれる彼女は鋼鉄のメイスを構えて、何というか黒いオーラを纏っている。

「で、何か申し開きは？」

「決闘を挑まれたので頑張つて勝ちました。褒めてよクリス様」

「カズマさんは既に一度死んでるので、天界規定によりリザレクションでも蘇ることができんがよろしいですか？」

「ごめんなさい調子乗りました」

笑顔でメイスを構えるクリスに対し、俺はレベルアップした事で上がった俊敏をフル活用した高速の土下座を繰り出す。おお、と乾いた声がそこら中から聞こえた。

それをクリスが冷たい目線で一瞥すると、一気に酒場が静かになる。『アクセル一の女神様』と言う渾名が『アクセル一の魔王様』に変わる日も近いのではなかろうか。
「い、いや、悪気は無いんだって、本当に！流石に正攻法で高レベルのクルセイダーに勝てる訳ないし、唯一誇れる幸運を上手く使つた作戦を立ててさ！」

「それで？」

「……転げて慌てる大人の女を見てたら途中から楽しくなつちゃつて……」

「なるほど、自ら命を絶つとは潔いですね」

「命を!?」

ヤバい、冗談に聞こえない!!今のクリスの目にはやると言つたらやる凄みがあるツ!
「……た、助けてダスト!お前は見てたろ!?悪いのは俺じゃない!あの白スーツの自業
自得だつての!」

「いやー……流石にアレは擁護できないというか何というか……すまん死ぬなら1人で
死んでくれ」

「この裏切りもんがあだだだだだだ!!!ごめんなさいもうしませんだから離していたい痛
い痛いちぎれる千切れる腕取れる!!」

クリスが無言で肩の関節をねじりあげる。クリスは筋力ステータスも桁外れなので
死ぬほど痛い。マジでちぎれそうだ。

「ダストさんにも後で話がありますからね?」

「いやいや!?俺は止めたつての!」

ダストにもそれほど理不尽では無い怒りが飛ぶ。

「分かつてますか?今まで憲兵さんから取り調べを受けたんですよ?その時したくもな

いのにカズマさんを擁護しなければならない私の気持ちがわかりますか？ん？どうなんですかカズマさん？」

「いやだつて！だつてしようがなくね！相手は上級職のクルセイダーだぞ！俺は冒険者で！しかもレベル差なんて5倍以上あんだぜ！？そりや卑怯な手も使わなきや勝てねえだろ！」

「アレは卑怯な手ではなく卑猥な手と言うんですよ。もうしませんか？もうしませんよねカズマさん聞いてんですか？反省の色が見えないですよこの性犯罪者が」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいだから離して 痛い 助けてぎやああああああああ！！！」

「叫びたいのはこっちも同じなんですよもおおおおおおおおおおおおおおおお！！！」

クリスは渾身の怒号を解き放った後、ようやく腕を離してくれた。

「痛え……婦女暴行とかよりこっちの方が問題じやね？本気で千切れるかと思つたぞ……」

「私は胃が痛いですよ！ああもうどうすれば……！それもこれも全部カズマさんのせいですからね！」

「いやだから悪かつたつて！」

頭を抱えているクリス。周りの冒険者を見ると、何だかんだ全員こっちの方をチラチ

ラ見ていた。チラ見するくらいなら黙つてんじゃねえよ……

すると、割と近い席に座つているゆんゆんを見つけた。その横には……

「ヒイツ！」

「ちょ、怯えないで！大丈夫ですよ！その……えつと……わ、わた、わたたた……」「怯えてなんかない！怯えてなんかないぞ！この私が怯えるわけがあるか！」

……俺を怯えた目で見ている白スースがゆんゆんにしがみ付きながら喚いていた。「いやその状態で言われても説得力が無いぞ。ゆんゆんにしがみついて腰が抜けてるじやねーか」

「ひいつ！こつちに来るな！」

「ほらあ！彼女トラウマになつてるじゃないですか！」

「いやだつてこいつがふつかけてきたから……」

「そ、その……私にはクレアって名前が……」

「わ、私が、その、わたたたた……」

「ゆんゆんはいつまでやつてんだよ！」

「ひいつ！ごめんなさい！」

「ああもう！クレアさんとゆんゆんさんが怯えるからカズマさんは喋らないで下さい

！」

クリスはそう言うと、白スーツのケアに向かう。すると今までしがみつかれていたゆんゆんが残念そうな顔をした。

「あ……私の場所が……」

「大丈夫ですよ、クレアさん。怯えないで。貴女は強い、そうでしょう？安心して。私が居ますからね」

「あ……それ、私のセリフ……」

当然ながら真性ぽつちのゆんゆんに怯える人を宥め導くスキルなどありはしない。

一瞬で居場所を奪われたゆんゆんは酷くしょんぼりしていた。

「お前がいつまでも吃つてるからだろ……ゆんゆんは俺の味方だよな？あっちから挑んできたんだから自業自得だと思うよな？俺たち友達だよな？友達は助け合うものだからな？」

「ええっ！……そ、そうですよね！友達ですもんね！」

「な？だよな？俺たち親友だからさ、上手いことクリスに取り入つて仲介役を……」

「カズマさん本当ブレませんね!?」

チツ……チヨロいゆんゆんを取り込んで優位に立とうとしたのに……

「うう……ありがとうございますシスターさん……貴女はまるで世を照らす聖女様のようだ……」

「私はクリスと言います。カズマさんに何かされたらいつでも私に言つてくださいね。ガツンと言つてやりますから!」

「…………えつ」

急にクリスに抱かれて安心していた白スーツ、もといクレアが呆然とした顔に変わ
る。

「で、では女神と呼ばれているクリスさんと言うのは……」

「え、私ですけど……ちょっと恥ずかしいですけどね、あはは……」

クリスがそう言うと、クレアは残念そうに俯いた。

「……あの、私を助けてくれたあの人ではないのですか……」

「は? お前はクリスを探していたんじや……」

「ちょっとー! ビーいう事よ! 今日はこの私が来る日だつてのに何で誰も迎えに来ない
の!?

急に、ギルドの入り口の方から大声で叫ぶ女性の声が聞こえた。思わず振り返ると、
青い色の長髪とヒラヒラとした弁天様の衣のようなものを付けた女性がこつちに向
かってくる。

「どうもおかしいと思つたら、騒ぎを起してんのはあんた達ね? 見たことない顔だけ
ど……顔……えつ」

すると、青髪の女はクリスを見て固まる。クリスはその女性を見て呆然とし、クレアもその女性を見て固まった。

そして3人が同時に驚きの声を上げた……またややこしそうな奴が……
クレアと青髪の女はともかく、この世界に来てからまだ一ヶ月ちよいのクリスがそれ
ほど驚くつて一体誰なんだよ……

「はああつ！？この世界の女神様ア！？」

「そうよ！私は女神アクア！アクシズ教団が崇める女神アクアその人なの！みんな聞いたわよね！？私は女神なのよ！？」

「何でよーーー!!?」

ばんばんとテーブルを叩く女神アクアは非常にみつともなく、どう間違つても女神な

どという高尚なものには見えない。まるで大きな子供のようだ。

「何であんた達はいつもそういうなの?!いいかげん信じなさいよ!私の宴会芸を見て女神女神つて囁き立てるのは嘘だつたの!?!」

「嘘っていうか……なあ？」

「俺に振るなよ……うん、『私は女神!』って言う奴に宴会芸見せられても……ほら、な？」

「要は酒の勢いだよ」

「酷くない!?私の扱いが雑すぎるんですけど!私は本物の女神なんですけど!」

いやどんなに宴会芸が凄くても水の神とはならんだろうよ……百歩譲つて芸人の神が関の山だつて。

「なあクリス。アレつて本当に女神なのか?」

「……はい、私の先輩のアクアさんです……」

そう言うクリスはアクアとやらから目を逸らし続けている。確かにアレは見るに堪えないが……

「て言うか!どーしてエリスがここにいんのよ!あんたもうこの世界の担当じや……」「わー!わー!な、何を言つてるんですか先輩!?!地元ならまだしもこんな歳になつてしまでまだそんなことを言つてるんですか?!?」

……ちよ、ちょっと向こうの方でお話が……」

(あ、そう言つてごまかすんだ)
ちなみにその間、クレアは女神アクアの振る舞いに終始茫然としていた。昔助けても
らつたつて言う女神がこんなんだと知つたら、ショックなんだろうなあ。

「言わなくとも良いわ上げ底エリス！あんたが何をしようが、この世界はもう私のもの
よ！いくら国教で信仰されてたり、挙句ちよーしこいてお金の通貨になつたりしてると
らつて私の世界は渡さないわよ！」

「ほんとに！本当にやめてください！良いから付いてきてください！」

「ちよ、離しなさい！」

「あと皆さんには聞かれたくない話なので！盗み聞きとかはやめてくださいね！それか
らカズマさん達はこつちに！クレアさんも！」

「ええ……」

「わ、わかりました……」

「ぶつ！あはははは！ちよ、ちょーウケるんですけど！後輩に裏切られて？転生特典で

連れてこられた?……ブーケスクス! いつつつともぶりつ子してゐからそうなるのよ
! ザマア無いわね! あー一つはつはつは!」

クリスから話を聞き、女神アクアは爆笑した。腹を抱えて下品に後輩をこき下ろすそ
れは、もうお手本のような煽り方で……どう間違つても女神のすることでは無い。

「それはもう良いんですよ! それなりに楽しくやつてますし! と言うか先輩は何でその
姿で当たり前のように降臨してゐるんですか!!? 普通変装したりしません!!?」

「はあ? 何言つてんのあんた? この私の美しい姿を見せなきや、アクシズ教団の子達が
残念がるじや無いの。それに、新しく信徒を増やさないといけないしね。忌々しくも、
まだ最大派閥はあんたのエリス教なんだし?」

「あ、あの……ちょっとよろしいですか?」

クリス達が女神トーグを繰り広げる中、クレアが女神アクアに話しかける。

「はあ? 誰よあんた。悪いけどこつちは忙しいの。もうすぐ決着をつけるから、あつち
の方で待つてくれる?」

「……私の事を覚えていないのは仕方ありません。もう1年も前の話になりますし……
ですが、これだけは言わせてください」

その真剣な雰囲気に、クリスもゆんゆんもクレアの言葉に耳を傾ける。

「……助けていただいて、ありがとうございました。おかげで当時ナイトだつた私もク

ルセイダーにもなり、無事に冒険者生活を送っています。この一言を言うために、親の反対を押し切つてずっと旅を続けてきたんです」

「……1年前……ああ！ 分かつたわ！ つまり貴女はあの頃私が助けた子つて訳ね！」
女神アクアも思い出したようで、納得がいつたとばかりに頷く。そして、クレアに手を差し伸べてこう言つた。すつごいドヤ顔かまして。

「どう？ 私の神聖さと美しさは感じてもらえたかしら？ その様子だと大丈夫そうね。

汝、私を崇めるアクシズ教団に入つてくれますか？」

「え、えつと……流石にアクシズ教団に入ると、その、世間の目とかもありますので……」「何でよーーーっ！ 今完全に私を信仰する流れだつたじゃない！ 助けた命返しなさいよ！」

「え、ええ……」

……どうやら女神アクアはその昔、下心満載でクレアを助けたらしい。何でこんなのが女神やつてるんだ……？ クリスト教で培われた俺の女神への憧れを返せよ……

「なあゆんゆん、何でクレアはアクシズ教団とやらに入るのを拒むんだ？ 形だけなら別に宗教くらい変えてやつても良いじゃないか？」

「……え、その……アクシズ教徒は頭のおかしい人が多く、関わり合いにならないのが身の為だというのが一般的で……かくいう私もアクシズ教徒だけには関わるなど教え

られて育てられましたし

「……ものすごく理不尽なことを言つてる気がするが、目の前のこの駄女神を信仰してるとなると納得してしまう俺がいる……」

ま、まあ……一応人助けをしているわけだからそこまで悪いわけじゃないんだろうが……それでも女神のすることではない気がする。

「アクア先輩！大丈夫ですよ！その立派な行いを続けていればいつか入ってくれる人がいますって！」

「ぐつ……そうよ！こうして私に感謝している人がいるわけだし、あの子の言つてた事に間違いは無いわ！」

……あの子？

「……あの子とは？」

「そう、これは私が下界に降りて自ら布教活動を行い始めてから大体3ヶ月ちょいの頃の話なんだけど……」

『ぐつ……中々信者が集まらないわね……』

あの頃の私は、この辺りで布教活動に勤しんでいたのだけど、この私自らが話しかけているにも拘らず中々信徒になつてくれる人はいなかつたわ。

『挙句、私が女神アクアだつて言つたら頭のおかしい人扱いされるし……どうなつてんのよこの街は……いつそ私の力で水の都に変えて……』

『……あの、すみません……どうか、どうかご飯を……』

『え?』

そしたらね、ショートカットの黒髪で赤い眼をした女の子、つまりは紅魔族の女の子ね? その子が話しかけて来たのよ。

『もう3日も何も食べていないので……何か困ったことがあれば手伝いますから、どうかご飯を……』

『ふむふむ……分かつたわ! すみませーん!』

そうしてその子にご飯を恵んであげたのよ。勿論、美味しそうに食べて私に感謝していたわ。信徒になるかつて聞いたら、『あ、信徒ですね。なりますなります。ハイなりました! これで良いですか?』つてな具合で敬虔なアクシズ教徒になつてくれたわ。

その後話してたら仲良くなつてね。その子にアクシズ教徒を増やすにはどうしたら良いかつて聞いたのよ。

『え、アクシズ教……ま、マジですか……』

いや、良いでしよう！ご飯を恵んでもらつた恩がありますし、私が良い案を考えて差し上げましよう！これでも私は紅魔族随一のアーケュイザード、知力には自信があります！』

『何と紅魔族で1番のアーケュイザードっていうじゃない!!？これに乗らない手はないわ、私は喜んで彼女に作戦を考えてもらつたのよ。

『んー……あ！思い付きました！アクアはアーケュリーストなのだつたら、街の周辺に出没するアンデッドを退治して回つてはどうでしょう？それならみんなから尊敬され、信徒大量獲得間違いなし！』

『あんた最高よ！完璧な作戦ね！』

『ふつふつふ、そうでしようそうでしよう！』

『そこから彼女は有り余る知力を振るい、作戦を練つてくれたの。

『でもそんなに都合よくアンデッドが暴れてくれるわけでもありませんし……そうです！アクア自ら墓場からアンデッドを追い出し、襲われた人を助ける！

いやでもこれは流石に倫理的に……』

『なるほど！襲われてる人を助けた方が評価もうなぎのぼりつて訳ね！そうしましよう！』

『えつ……………ま、まあ隠れてたらバレませんよね……』

『なら助けるのもギリギリがいいわね！殺される寸前で私がアンデッドをやつつけて、更に回復魔法をかけてあげるの！どう？ナイスアイデアじやない？』

『うわあ…………えっと、良いと思いますよ？』

『ふふつ、これで完璧よ！貴女も流石はアークウイザードね！その名に違わぬ知力と発想力！ありがとう、貴女に女神アクアの祝福のあらんことを！』

『…………流石アークウイザード…………その名に違わぬ…………ふふふ…………

いや！このままではダメです！もつともつとこの最強のアークウイザードたる私が知恵を授けて差し上げましょう！』

『やつたあ！』

「…………とまあこんな事があつて、それから名前を名乗らず去つた方がクールでかつこいいとか、それじやあ名前がわかんないから彼女に『流石女神アクア様です！最高！アクシズの星！』って横で言つてもらつてアピールするとかやつてたのよ、1ヶ月ちよい。多分その時に……」

「わああああ———っ！！！」

駄女神アクアの口から衝撃の事実を聞き、クレアは走り去つてしまつた。踏んだり蹴つたりすぎるだろ……流石に不憫になつてきただぞ。

「紅魔族随一のアーヴィングードって……もしかして……」

「ん？ そういうえばゆんゆんもなんちやら族だつたな。知り合いか？ ゆんゆん」

「なんちやら族？」

えつと、多分……私の1番の友達兼ライバルのめぐみんだと思ひます……確かにめぐみんならそのくらいやりかねないですし」

「……お、おう。それは……アレだな、良い友達だな」

そのくらいつて……相当頭のおかしい作戦だと思うんだが。いくら思いついても本当に実行するか？ 普通。女神アクアも大概だが、その友達つてのも絶対に関わり合いになりたくない。

「アレ？ 何であの子走つてつたの？ トイレでも我慢してたのかしら」

「……先輩、それを本気で言つてるのでしたら、流石の私も擁護できないです……」「何で！ ただ昔話をしてあげただけなんですけど！ 尊い神話も同然なんですけど！」

「駄女神や……駄女神がおる……」

本当、何でこんなのが女神やつてるんだ……

「……そんで？ どうなつたんだよ」

次の日、酒場でダストが呑氣に聞いてくる。お前仮にも当事者だろうに……
「そのままアクアとやらが『エリス！ 近日中にアクシズ教が国教になるわ！ そうなつたら
ら覚えてなさい！』って捨てゼリフを吐いて宴会の中に消えていったよ。あいつ何もん
なんだ？」

「俺が聞きてえよ……と言うか、あのクリス様の先輩で、アークプリーストだつたんだな
あの人……いつも月初めになると酒場で宴会芸をやつてるから芸人だと思つてた……」
「そうなのか……女神つてのは？」

「いっつも、自分は女神アクアだー、って言つてるから、みんな温かく見守つてるよ」
「……」

どうやら誰も信用してはいないらしい……本当に何であんなんが女神なんだよ……

因みに、本物の女神だというわけにもいかないので、ダストには『アクアはクリスの
地元の先輩の、自分を女神アクアだと言い張るアクシズ教徒のシスターで、昔からエリ
ス教徒のシスターであるクリスを女神エリス役にして突つかつていた』と説明してあ
る。この説明で納得されるあたり、あいつの駄女神感が窺える。

「それにしても災難だつたな、カズマ」

「そりだよ！ テメエクリスに俺を売りやがつて……」

「いや、だつて俺は止めたのにお前が……」

「クリスさん！ 私、漸く分かりました！ 私は貴女を求めて旅をしてきたのです！」

「……え？」

声がした方を見ると、クリスとゆんゆんがクレアに詰め寄られている。一体何があつたんだ……？

「ですから、どうか私をパーティに入れてください！ これでも高レベルのクルセイダーです！ 絶対にお役に立つてみせます！」

「で、ですか私たちのパーティにはカズマさんが……」

「承知の上です！ ええ承知の上ですとも!! ?」

「……どうやらクレアは、アクアに幻滅してクリスに目を付けたらしい……てか、え？」

「マジでお前俺らのパーティに入んの？」

「ヒイイツ！ サ、サトウカズマ……」

俺が声をかけるとクレアは驚きのあまりコケそうになつた。そんなに俺がトラウマか……いや気持ちは分かるけどさ……

「ほら、だからやめた方が……私ならいつでも相談に乗りますから……」

「……い、いえ！これは私の為でもあるんです！サトウカズマ！私はお前なんかに負け
てないからな！今に見てろ！」

「あ、？」

「ひいつ！ごめんなさい！……じゃなくて！私はお前を克服する！覚えておけ！」

そんな小物の代表みたいな捨てゼリフを吐いてクレアは走り去つていった。さつき
も若干震えてたし、俺が怖かつたのだろう……

アレ、何だろこの気持ち……なんか心がふわっとなるような……

「……ハハツ」

「うわあ……うわあ……」

「おい、文句があるなら直接言えや」

「いくら巷で噂のクズマさんでもそれは……もはやチンピラどころじやねえって……」

「……カズマさん、もしクレアさんに何かするようであれば……」

「もうセクハラはしないって！」

……多分な！

第八話

「しつかしまあ、なるようになるもんだな」

ソファーアに寝つ転がりながら生意気なことをつぶやく昼下がり。至福の時。

少し前までは蒸し暑かつた風も乾燥した秋風に変わり、カエルもすっかり大人しくなった今日この頃。俺の気分はかなり緩みきつっていた。

俺たちのパーティはクレアという新メンバーを加え、前衛2人と後衛2人のスタンダードな構成に落ち着いた。前衛はクレアだけで事足りるので俺は索敵と後衛に隠密をかける役目をしている。

が、正直この街のレベルだとそこまで神経質になるような依頼も、クレアが討ち漏らす事もない。ぶつちやけほぼヒモだ。ダストからも笑われたし。

生活はカツカツだがある程度安定した稼ぎが約束されているも同然で、しかも俺は働く必要がないと来た。

ついでに、そろそろ冬が来るということでクレアが小さな借家を借り、今はそこに住んでいる。

自由に使えるお金は無いが、衣食住には困らない。

そりや俺じやなくとも緩むつてもんだろう。

「さて、ちよつとギルドに顔出すかあ……」

暇になつたらギルドに行つて依頼を冷やかしに行く。もしかしたら盗賊職がいないパーティから声がかかるかもしれない。

そして俺は顔でも洗おうと洗面所に赴き……

「……ハア……ハア……」

……なんか変な声を聞いた。

変な汗が流れる。何だ？ 空き巣か下着ドロでも入つたか？

ちよつとビビりながらも短剣を手にし、【サインカバ隠密】を発動する。

そして洗面所を覗きにいくと……

「うへへ……クリス様のおぱんつ……すーはーすーはー……尊い香り、たまらんな本当

……

……クレアが、洗濯物を顔に押し付けて転げ回っていた。

「こんな素晴らしい香りを洗剤で上書きしてもいいものだろうか、いやいけない。そんなことをしたらエリス様の名の下に天罰が下るだろう……しようがないから私が厳重に保管しておこう。おつとこれはゆんゆんの……ふふ、ここが天国か。これも頂いて……偶然にも手に入れた全く同じ製品の新しいぱんつに交換しておこう。ふひひ……

ああ素晴らしい人生。それにしてもクリス様はどうしてあんなにも美しいのだろうか……あの柔らかな微笑み、クリクリとしたおめめ、すらりと伸びた白魚のような腕、可愛らしいおてて……おつと鼻から忠誠心が……ゆんゆんも可愛いよなあ、15にも届いていない年若い乙女だというのにあのプロポーション……そして童顔と守つてあげたくなる小動物のような性格……はあ、どうしてうら若き少女というのはこんなにも私の心を淫靡に揺らすのだ？それにひきかえお父様が用意する婚姻相手の何と醜悪なことか。一生彼女たちの側で暮らしたいものだ……!?これはクリス様のブラ！？おつほ、控えめなお胸を守っているスポーツタイプのブラ！？だが同じものは今私の手にはないから忸怩たる思いでそのまま洗つておこう……だが形は覚えた、おそらく大通りのあの店で買つたものだな……ふひ、同じものを入手しておこう……ああっ、しかしこの匂いを堪能しないで何が人類か！クンクンスーはーすーはーもぐもぐ……誰だ！？

クレアが何かの気配を感じて振り返ると……

「……何だ、ヤモリか。全くこの神聖な場所にトカゲ畜生が入り込むなど……全く。さて、続きを読むとしようか……！」うへへ……」

「……見なかつたことにしよう」

聖騎士クルセイダーつて何だつたんだ……などと考えながら、当初の予定通りギルドへと向かう。

……俺たちは相当頭のおかしい奴を仲間にてしまつたかもしれない……

それから数日が経つたある日。突如として街の鐘の音と共に聞き慣れた受付嬢の声が町中に鳴り響いた。

『緊急クエスト！ 緊急クエスト！ 街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギルドに集まつてください！ 繰り返します。街の中にいる冒険者の各員は、至急冒険者ギル

ドに集まつてください!』

緊急クエスト。

その名に違わず随分急だが、つまりはアレか。この街に危険が迫っているから俺たちでなんとかしろ、と。そういう事なのか。

某ハンティングゲームのオンラインをやり込んでいた俺からしたら燃えるイベントではあるが、マジでラオ〇ヤンロンとかシエンガ〇レンとかレベルのモンスターが街に攻めてきたりしたらさっさと逃げないと死ぬので内心焦りまくっている。

あいつらって、何であんな小さい剣でペチペチやられただけで死ぬんだろうね。撃〇槍喰らつても即死しないくせに。

しかしちよつとワクワクもした。これまでの冒険者稼業は生活のためという面が大きく、子供の頃に夢見た冒険というものを体験するチャンスである。

急いで身支度をしてギルドへ向かうと、既にパーティのメンバーはギルドに集合していた。

「カズマさん!…こつちこつち!」

手を振るゆんゆんの元に向かう。

「なあゆんゆん、緊急クエストつてなんだ? モンスターの群れでも攻めて来たのか? それとも戦略級の大型モンスターが……」

「あ、そういう類のクエストではなく、多分季節的にキャベツの収穫だと思いますよ」「……は？」

「キャベツ？ キャベツって言うと……キャベツか。

「なあ、キャベツって言うと、あの緑色でシャキシャキした千切りとかにするアレか？」
「アレですけど、それがどうしたんですか？」

ゆんゆんは『何言つてんだこいつ？』って感じの目でこちらを見ている。クレアも同様だ。

「何だ、サトウカズマは知らんのか？ こんなに稼ぎのいい仕事はないぞ。

……これで大量のキャベツを収穫すればクリスさんに褒めてもらえるかも……ふふふ……」

「いやキャベツ如きでそんな……つーかいくら稼ぎが良いからってキャベツの収穫なんざ冒険者の仕事じゃ……」

「カズマさん、カズマさん」

するとクリスが俺に耳打ちをする。

「あー……カズマさんは知らないのでしようが、この世界のキャベツはですね……

いえ、実際に見てもらつた方が早いですね、そろそろ説明が始まると思います
？ それはどういう……という疑問を遮るように、受付嬢が登場した瞬間、ギルド内の

熱気が一気に上昇した。

「皆さん、突然のお呼び出しあいません！もうすでに気付いている方もいるとは思いますが、キヤベツです！今年もキヤベツの収穫時期がやつてまいりました！」

受付嬢が声を張る。その声は明るく、嬉しそうにしているのが良く分かる。周りを見ると、集まってきた冒険者たちもかなりテンションが上がっているようだ。

「キヤベツ一玉の収穫につき1万エリスです！すでに街中の住民は家に避難して頂いております。では皆さん、できるだけ多くのキヤベツを捕まえ、ここに収めてください！くれぐれもキヤベツに逆襲されて怪我をしない様お願い致します！」

……キヤベツに、逆襲される、だと？

「な、何じやあこりやああああああああ!?」

街の正門を出た俺たちの前には、もはや緑の壁としか言いようがないほどの大量の空

飛ぶキャベツの群れが迫つて来ていた。よく見るとそのキャベツには羽が生えており、更には目まで付いている。

「この世界のキャベツは空を飛ぶんです。その羽で世界を渡り、大量の経験値をその身上に蓄え味が濃縮したキャベツはどこかの秘境で息を引き取ると言われていますが、偶然にも食べ頃になるとこの街を通るんですよ。経験値が詰まっている食べ物は高価ですから、あんなにいっぱいいるキャベツでも一玉1万エリス以上で取引されるんです」

「んなアホな……」

「おい、来たぞ！」

大量的のキャベツが街に襲来する。アホみたいな光景だが、一玉1万エリスと言うのは破格の値段だ。確かに、キャベツの収穫で大金が手に入るのならこんなに楽な仕事は……

「ぐはあ！」

「ダ、ダストー!!？」

「姿勢を低くしろ！ キャベツが顔に当たつて即死しても知らんぞ！」

全然楽しさなかつた。

「確かに、あのスピードで2、3キロはある大玉のキャベツが突進してきたら、打ち所によつては死ぬよな……」

「[回復]^{ヒール}！大丈夫ですかダストさん！」

「よつしやあ！クリス様が居れば怪我なんて怖くないぜ！」

腹にキヤベツが激突し、肋骨が折れたともどり打つっていたダストが一瞬で回復し、前線へ飛んでいく。

クリスは既に後方支援を決め込んでいるようだ。街のプリーストと共にキヤベツ狩りに行く冒険者に俊敏と耐久を上げる支援魔法をかけたり、傷ついた冒険者に回復魔法をかけたりしている。

「クリス様！支援魔法が追いつきません！ど、どうすれば……」

「慌てないで！順番に対処して、あまりに遅れるようだつたら私の方に回して！」

「は、はい！」

「範囲敏捷強化」！^{ワイド・スピーダー}

「範囲防御強化」！^{ワイド・ディフェンダー}

「はい、次の方どうぞ！」

「クリス様！負傷者が……」

「軽い傷の人はお任せします！骨折以上的人はこちらへ集まつてください！[範囲回復]^{ワイド・ヒール}！」

……クリスが冒険者登録したのはつい最近だつてことは街のみんな知つてゐるはずなんだが、完全にプリーストたちのリーダーをやつてゐる。これも女神のなせる技か……「あの、カズマさん。私たちも行きましょう！早くしないとキヤベツ無くなっちゃいま

すよ！」

「いや、でもなあ……」

「もうクレアさんは前線に出ているんですよ！私たちも早く行かないと！」
ゆんゆんが指差す先には、クレアが丘の上に立っていた。その姿は威風堂々と、まさに人民を守る騎士と言つた風貌だ。実際は欲望丸出しでキヤベツを収穫しているだけだが。

「〔デコイ〕」

デコイ。囮という意味を持つこのスキルは、ゲームでいうところのヘイトを集めるスキルだ。発動した途端、大量のキヤベツがクレアに向かつて突撃していく。
そこからは芸術的だった。

突撃を避けて、羽の部分だけを斬る。たつたそれだけの動作がまるで流麗な舞いのような美しさを感じさせた。

「おお……！一瞬で何十体も……」

「よし！拾いに行くぞ！」

他の冒険者たちも俄に騒ぎ立ち、クレアが狩つたキヤベツを回収しに向かう。それを確認してから、また新しい獲物を探しに行くクレア。まだまだ稼ぐ気満々のようだ。

「すっげえな……あれ一回で何十万稼いだんだ……？」

「同じ上級職といえども、流石にレベルの差を感じますね。あの剣だつて相当の筋力要求値があるでしょに、あんなに軽々と……」

キヤベツ相手とはいえ、これが高レベル上級職の本気か。相応に高いステータスと、強力なスキル。それを上手く使いこなして敵を殲滅する様はまるで英雄譚の主人公のように輝いて見える。

「……もし、あいつが恨みを晴らさんと俺に襲いかかってきたら……」

「……大丈夫ですか？ カズマさん、びっくりするほど顔色悪いんですけど」

「い、いや？ ビビってねーし。あんな白スースーちつとも怖くねーし……怖くねーし……」

「……」

ゆんゆんの失望の目線が痛い。でもしようがないじやん……

「ほら、私たちも収穫に向かいましょう。私の魔法で倒そうとすると傷がついてしまうので、上手く拘束しますからその隙に羽を切り落としてください」

「お、おう。任せろ」

「あ！ 今のすぐくパーティっぽくなかったですか！ ちゃんと役割分担して、背中を任せ合ふみたいな！」

「いやパーティっぽかつたというかそのものなんだが……」

そもそもキヤベツの収穫でそんな背中を任せ合うような大立ち回りはしたくない。

さて、クリスに支援魔法かけてもらいに行かないとな……

第九話

「このつ！このつ！」

「痛い痛い！やめろ！いややめてくださいお願ひします！」と言うかちよつと待て！俺がいなきや、湧き出るゾンビを倒して墓地の平穏を保つ奴も居なくなる！それでも良いのか？！」

「それは私が引き継ぎますので問題ありません。良かつたですねえ、貴方が生きた証は私がいる限り残るんですよ？あ、ごめんなさい。アンデッドなのでもう死んでるんでしたね。【ターン・アンデッド】！」

「ぎやああああ！焼けるうううううう！た、助けてくれえええ！」

「…………」

どうもカズマです。突然ですが、女神様が墮天しました。駄女神ならぬ墮女神です。俺は、どうしたら良いのでしょうか。

『数時間前』

『ゾンビメーカーの討伐』……ねえ』

「はい、私の立場上ちょっと見過ぎせなくて。このクエストを受けたいんですけど」
キヤベツの収穫クエストから1日、クリスがあるクエストを持ってきた。

『ゾンビメーカーの討伐』。町外れにある共同墓地にゾンビメーカーなるモンスターが出現し、死体がゾンビとなつて動き始めているのでそれを退治してくれとのこと。報酬
5万エリス。

「駆け出し冒険者向けの依頼ですし、アンデッドモンスターには私の回復魔法や浄化魔法がとても有効なので危険は少ないですよ?」

「それは良いんだよ。でもなあ……今受ける必要もないしなあ。金は足りてるし」

「ちよっ!?

昼飯のハンバーグセットに付いてきたキヤベツ入りの日替わりスープを啜りながら呟く。

昨日受けたキャベツの収穫で、俺はかなりの大金を手に入れた。クレアの活躍もあり、報酬を山分けしても1人100万を優に超える金を手にしている。

人間、急に大金が入つてきたら働きたくなるものである。実際にこの街の冒険者たちも、多くの臨時収入が入つたことでクエストを受けない者が多い。例の如く昼間から飲んだくれている。

しかもこのキャベツ、経験値が詰まつていて、食べると経験値が入るという超便利食材だ。結局あのキャベツ収穫クエストはクレアが言う通り報酬が良く、味も美味しく、さらに楽して経験値まで手に入るという3倍美味しいクエストだつたわけだ。

経験値はさておき、1人頭100万エリス以上の手持ち金。ゆんゆんは杖を新調し、クレアは武器と防具のメンテナンスを行つたらしいが、俺は無駄使いせず、この先3、4ヶ月は楽して生活する心算だ。ぶつちやけ面倒くさいクエストなんて受ける気はない。

「ダメですよカズマさん！普段からお金が入つたら働かない生活なんてしていたら、本当にお金に困つた時に頑張れなくなりますよ！それに貯金もしなくちゃいけないですし、王都に進出するための資金も……」

「母親がお前は」

クリスは性格は最高なんだが、どうにも眞面目すぎて口うるさい……

すると、クレアが口を挟んできた。

「おい、サトウカズマ。クリスさんの言う通りだぞ。普段からだらしないと、パーテイメンバーの私たちまで低く見られるだろうが。大人しくクリスさんの言うことを……」

「うるせえ！お前は黙つてろ！」

「ど、怒鳴るな！いや別にお前に怒鳴られたところで何の問題もないんだがな!? ほら、周囲の目とかあるだろ！」

「カズマさん！怒鳴るの禁止つて言つたじやないですか！ほら、大丈夫ですよー」

「グスツ……クリスさん……クリス様……うへへ……」

クリスの胸に顔を埋めるクレア。それはとても嬉しそうで……

「……なあクレア、にやけ顔が隠しきれてないぞ」

「?」

「カズマさん！クレアさんがそんな事するはずないでしようー」

「あーサイハイ、もうそれで良いよ」

困惑するクレアは見飽きたし、クリスに睨まれてまでここで言うことでもない。先日

のアレは流石にこつちとしても関わり合いになりたくないでのスルー安定だ。

「そんな事より、良いじゃないですか！行きましょうよー！」

クレアの新しい弱味を握った事は置いといて、クリスは俺を説得しにかかる。女神と

しての使命感に駆られたクリスが……

「アンデッドですよアンデッド！あんな害虫さつさとこの世から驅逐しないと気持ちよく眠れないじゃないですか！」

「!」

俺とクレアは絶句した。あれ？クリスはもつと女神らしい性格で……驅逐とか悪意のこもった話口調はしないはずで……

「ゆんゆんさんもそう思いますよね!?」

「ええっ!? 私!? ど、どうでしようか……確かに不浄なモンスターであるアンデッドは、クリスさんからしてみれば許せないでしようけど……」

「そうですよ！この世の理、ひいては神に背いた不浄な存在なんてこの私自ら全て消し去つてやりますよ！」

「そ、そうですね……素晴らしい心構えだと思います……」

ゆんゆんが押し切られるのはいつものことだから良いとして、クリスがそんな強引な事をするのは見た事がなかつた。それだけに、今更になつて気付く。

「クレアさんも私に賛成なんですよね？」

「え、あ、ああ。勿論だ」

「ほら、まだ渋つてるのはカズマさん一人ですよ！多数決的にも、行く事は決定ですから

ね！」

「わ、分かつたよ……」

このパーティ、クリスに逆らえる奴が1人もいねえ！

そしてゾンビが活動を始める夕方、ゾンビメーカーとやらが出没する墓地に着き、俺が【敵感知】スキルを発動すると予想外に多いゾンビの数。それを不審に思い近付くと、狭い墓地の中心には黒い鎧を着込んだ男が仁王立ちしていた。

それを見たクリスは目を見開き、まだあつちが俺たちに気づいていない事を確認すると、クリスは不意打ちに一撃。

「セイクリッド・ハイネス・ターン・アンデッド」！

……いや不意打ちと言うにはとんでもなく派手だつたが。クリスの足元と墓地全体に巨大な光る魔法陣が出現し、莊厳な神光が墓地全体を焼き尽くす。

「え、ちよまつ……ぎやわああああああああああああああ！」

ボスっぽいアンデッドの叫び声に俺たちがポカンとしていると、クリスがとてもイイ笑顔でこう言う。

「カズマさん、大物です！ デュラハンですよ、デュラハン！」

……そして、今に至る。

「まつ、待つてくれ！ 俺にはやる事があるんだ！ 奴を見つけるまで俺は絶対に死ねないんだ！ これでも俺は善良な人間を殺す事はしないし、自分に立ち向かつてくる奴以外と戦うこともない！ だから」

「あ、やめて下さい。アンデッドの言葉なんて聞いたら私の耳が腐るじゃないですか。【ターン・アンデッド】

「ぎやあああ！ 待つて！ お願ひします！ 何でもするから、お願ひだから話を……」
〔黙つてろ腐れナメクジが。貴方みたいなゴミクズがこの私に命乞いなんて片腹痛いんですよ。さつさと消え去りなさい〕

「「「…………」」

「こ、怖え……クリスが女神じやない……心なしかクリスの周りに何かドロツとしたオーラが見える……」

「な、なあクリス……その人、えーと、デュラハンだつたか？そんなに言つてるんだし、少しくらい話を聞いてあげても……」

俺の言葉を受けてこちらを振り返つたクリスの顔に、全員がビクッと身体を震わせた。

「ハア？ 何を言つてるんですかカズマさん。頭がイカれたんですか？」

「いや怖えよ！ ク里斯お前普段そんな感じじやないだろ！ 幾ら敵がアンデッドだからつて……」

クリスがデュラハンから目線を外した所を見計らい、デュラハンが俺の後ろに回り込んで俺を盾にする。

「た、助けてくれ！ 俺は悪いアンデッドじやないぞ！ この墓地を守護する善良なヤツだ！ とある事情でアンデッドの本能も封印している！ な？ このまま倒すのは後味が悪いだろ？」

必死だ。驚くほど必死。何が何でも助かりたいという必死さと悲壮感に満ちた頼みだ。

「そ、そうだ！お前たち流石にデュラハンの討伐を命じられてるわけじゃないんだろ？どうせ報酬も出ないんだし、見逃してくれてもいいじゃないか！」

「ちょっと待て。え？ デュラハンって見た感じ高位のモンスターなんだろ？ 報酬出ないの？」

「え、そこか!?」

デュラハンの人気が驚く。そんなにおかしたこと言つただろうか……高位のモンスターならそれなりに報酬とか出そうな気もするんだが……

そんなことを考えてると、クレアが口を挟んできた。

「逆に聞くが、依頼も出ていないモンスターを倒して一体誰が報酬を出すんだ？ 同じ高位モンスターのドラゴンとかなら角や鱗などの素材に買い手がつく事が多いが、そもそもアンデッドをクリスさんが倒したら消滅するだろ」

……言われてみれば、確かにそうだ。冒険者が勝手に倒したモンスターに金を出すほどギルドも領主も優しくはない。本当になんでそういうとこシビアなんだこの世界……

「そ、それは置いといてもだ！ えーっと……あ、そうだ！俺の名はベルディア！ 実は100年ほど前、とある国の王に仕えた現役バリバリの騎士だつたんだよ！ ほら、身の上話を聞いたら何となく親近感が湧いてこないか!?」

「せ、せこい……」

こんなに生きるのに必死なアンデッド居るんだな……確かに、なんとなく殺すのは後味が悪いような気も……

「知りませんね、そんなもの。1000年も前に生きた人間なら早く成仏するのが生物としてあるべき姿でしようが」

「え?!いや、待つてくれ!殺されるのは良い、俺だつて自分がアンデッドだと言う自覚はある。

だが、少し待つてほしい。ある事情があり、俺はまだ死ぬわけにはいかないんだ!」

クリスには全く響いていないようだが。

それはさておき、現在土下座してクリスに頼み込むベルディアというデュラハンは何か事情があるようだ。

今まで心優しく慈愛の精神を持つて全てを包み込む完璧な女神だと信じていたクリスが今こんな事になつてしているので、何となくやるせない気持ちになり、ベルディアの話を聞いてあげたくなつた。

「な、なあクリス。話だけでも聞いてやろうぜ。もしかしたらいい奴かも……」

「おお!ありがとう心優しい少年!」

助かるかもしれないと喜ぶベルディアをよそに、クリスはとても嫌そうに顔を顰め

る。

「ハア？ そんなわけ無いでしようが。どうせ時間稼ぎですよ、くだらない。さつさとそこをどいてください。そんな未練もろともこの世から消し去りますので」

「うつ……」

「が、頑張れ少年！」

俺もろともベルデイアを威圧しながら話しかけて来るので、怖くて何も言えなくな。捨てられた子犬のような目をしたベルデイアが助けて欲しそうにこちらを見ているが、俺には何もできないんだ……

「すまんベルデイアさん……諒めてくれ」

「どうしてそこで諒めるんだ！ できるできる絶対できる！ 諒めるなよ少年！」

「さすがカズマさん、聞き分けが良くて助かります。ほら諒めなさいクソーテュラハン」

「ちょ……」

「あ、あの……待つてください……」

「！」

今にもベルデイアが消されようとしている時、か細い声を上げたのは何とゆんゆんだつた。これにはベルデイア以外の、ゆんゆんの性格を知っている全員が驚いた。

「話くらい聞いてあげてもいいんじゃないですか？ その、クリスさんなら何時でも倒せ

そうですし……話を聞いてからでも……私たちにできることもあるかも……」

「……」

「ひつ……そ、その……無理にとは言いませんので……」

クリスはゆんゆんを冷たい目線で見つめ、ベルディアと何度か見比べた後、諦めたようには息を吐いた。

「はあ……いいでしよう、話しなさい。ただし時間稼ぎをしている様であれば……」

「あ、ありがとう！そこの魔法使いの少女、感謝する！」

ベルディアの表情が明るくなる。しかし何故ゆんゆんがそんな事を……

疑問に思い、ゆんゆんに小声で尋ねる。

「なあゆんゆん、何であいつを助けたんだ？こう言うのもなんだが、お前はそんな性格じゃ無かつたと思うんだが」「するとゆんゆんは辛そうな表情をした。何か聞いてはいけない様な理由があつたのだろうか。

「……大した事じやありませんよ。可哀想でしたし、話くらい聞いてあげてもいいんじやないかって思つただけです。それに……」

「……似ていたんですね、あの人が。私の初めての友達が死んじやつた時の姿と重なつ

ゆんゆんの表情が一層重くなる。

ちやつたんですよ……あの、サボテンが枯れていた時の姿と……」

「お、おう……そうか……」

やつぱり聞いちやいけない話だつた。

「本当に、初めての友達で……私がはしゃいじやつて……それで、水をやり過ぎて……根腐れして……ぐすつ」

「わかつた、もういい。運命だつたんだ、ゆんゆんは悪くないさ」

因みに、根腐れしたサボテンはすぐに根っこの周りを切り取つて乾燥させれば次の根っこが出てくるので、根腐れしてもそれだけで死んでしまつたわけではない。砂漠で生きるためなのか生命力が高いので、ほつといて根腐れの原因である菌が全体に回らなければ何度も蘇るのだ。

後でゆんゆんにも教えてあげよう。

そして、遂にベルディアが語り出した。

「実はな、この共同墓地には俺の剣の師匠が眠つていたんだ。優しい人でな……ジジイになるまで、ずっと俺の事を気にかけてくれたよ。

そして、此処には若くして死んでしまつた妻が眠つているといつも言つていて、ちゃんととした墓を建てる金くらい持つてたくせにこの共同墓地に入つたんだ。

俺は止めたが、師匠は譲らなかつた。俺もよくは知らないが、何か思い入れがあつた

「んだろうな」

懐かしそうな顔をして優しい声で語るベルデイアは、どう見てもアンデッドには見えない。黒い鎧に全身を包まれていて、素顔が見えないというのもあるだろうが、それを差し引いてもベルデイアを悪いアンデッドとはとても思えなかつた。

「……だが、此処は共同墓地だ。この街のプリーストは拝金主義で、金の無い人が眠るこの墓地にはゾンビが湧く事がある。まあ師匠はそれなりに金を持ってたから大丈夫なんだが、大事な師匠がいる墓地にゾンビが湧くのも気分が悪い。

だから、あるプリーストにゾンビ封じの結界を張つて貰い、俺がたまに魔力を注いでその結界を維持していたんだ。それは一度死に、デュラハンになつた後も変わらなかつた

「……プリーストじゃ無いベルデイアさんでも結界の維持は出来るもんなのか?」

「出来るような結界を張つてもらつたさ。そりやあえげつないくらい金は奢られたがな

まあ、それは良いんだ。俺はそんなこんなでアクセルの街に住んで偶に墓地の結界に魔力を注いで……」

「はあ!?

此処まで大人しく黙っていたクリスが急に声を上げた。

「アクセルの街に住んでたですってえ!? 貴方みたいなアンデッドがよくもまあぬけぬけと……」

「ああもう! ク里斯はちょっと黙つてくれ! 話が進まない!」

「でもカズマさん! 病気のリスクもありますし、街に腐臭が漂うんですよ!?!」

「ふ、腐臭……だ、大丈夫だよな……気は使つてるし……」

「ま、まあまあ……確かにアクセルの街にアンデッドが住んでいたというのは受け入れ難いですが、何も事件を起こしてない証拠でもありますし……」

怒鳴るクリスをクレアが止める。聖騎士であるはずのクレアも心なしかベルディアさんの側についているようだ。

「ぐぬぬ……それで!?」

「あ、ああ……とにかくそんな生活を送っていたんだが……ある日、結界が破壊されていたんだ」

とても悔しそうな顔でベルディアさんは語る。

「結界が破壊され、更にどうやったのかは不明だが神聖属性の気が墓地内に入らないようになれていてな……ゾンビが湧き出し、墓地にゾンビが蔓延つていた」

「……」

「……」

……なんとなく、嫌な予感がする。それは4人全員が感じ、ずっと殺気立っていたクリスもなんだか冷や汗をかいているようで……

「ある事情で遠出していた俺は戻ってきた時驚いたよ。ゾンビ化はしていなかつたとはいえ、師匠の墓も破壊されていたからな。そしてやり切れない怒りが俺を支配して……あの時の俺は荒れていたな。ああ、勿論人間には手を出していないさ。本当だ」

拳を握りしめ、声に怒氣を含ませ語るベルデイアさん。それにひきかえ、俺たちの心には嫌なモヤモヤが募つていくばかり。

「……過去の記憶があるのか、それとも力が無いからなのかは知らんが低級のゾンビほど墓場からあまり動かないものだ。

だが、神聖属性の気が断絶されて力を増したゾンビは墓場の外にも悠々と繰り出していた。更に何をトチ狂つたのか、犯人は墓地からゾンビを追い出して人を襲わせていたらしく、近くの森には被害が出ていた。

その時は街のアークプリーストが退治して事無きを得たらしげ、一体誰が墓地にそんな事をしたのかはわからないままだ

うわっ、確定じやん。

どう考へてもあのアクアとかいう駄女神の言つていたあの話の被害者じやん。

そしてベルデイアさんは決意に満ちた目で俺たちの方を向き、こう言い放つた。

「犯人を捕まえて、何でこんな事をしたのか吐かせなければならぬ。罪を償わせなければ気が済まぬ。……犯人は神聖属性の力を持つてゐる事は分かつてゐる……だが、神に仕える身で何でこんな事をしたのか、意味が分からぬ。単に快楽目的なのか、それとも本当に頭がおかしいのか……」

「お願ひだ、犯人を捕まえるまでは俺を見逃してくれ！その最低な奴に罪を償わせなければ、俺は死ねないんだ！頼む！」

両手をついて頬み込むベルデイアをよそに、俺たちのパーティは全員が同じように顔を引きつらせ、冷や汗をかいてゐる。それはクリスも例外では無い。寧ろ1番ヤバイ顔をしている。

「……ん？ど、どうしたんだ君たち……ああいや、別に不満とかそういうわけでは……」

「作戦タイム」

「は？」

手で『T』のマークを作つてベルデイアさんを牽制する。

「なあ、クリス。ちよつと良いか？」

「は、はい……」

ベルデイアを待たせ、その場から離れてクリスに問う。

「なあ、あいつは本当に悪い奴か?」

「えっと、その、でもアンデツドですし……」

「コレはお前の身内が蒔いた種だ。 そ�だろ? 悪いのはベルディアさんか? それともお前の先輩のあの駄女神か?」

「……それは、その……いや確かに先輩に落ち度がありますけど……でも神の法に背いた存在では変わらない事実で……」

「結果として何の被害も出てないじやないか。 お前の仕事は何だ? アンデツドを退治してまたあの駄女神の被害が出たらどうするつもりだ? 結果的にお前が手を下したみたいな状況になりかねないんだが」

「……仰る通りです……」

「ベルディアさんをどうするんだ?」

「うう…………わかりました、誠に遺憾ですが……その、見逃します……」

冷や汗をだらだらと流しながら、クリスは引きつった顔で頷いた。

そして俺は、次の話に移る。

「……でも、これは事件じや無い、事故だ。あの駄女神は別に悪気があつたわけじや無い。 単に頭が足りなかつただけなんだ」

「え? いや、それは……」

「情状酌量の余地はあると俺は判断した。幾ら何でも女神が殺されるのは不味い気もするし、此処は穩便に……な？わかるだろ？」

「え、ええ？でもそれは流石にベルデイアさんが可哀想つていうかその……」

「黙つて頷いとけ」

「……は、はい……」

「よし、戻ろう。クリスは何も喋らなくていい。話し合いは俺が全部済ませる」

クリスに口止めをし、ベルデイアさんの元へ向かう。ベルデイアさんは覚悟を決めた目をしていた。

「……話は終わつたのか」

「ああ。ベルデイアさんが犯人を捕まえるまでは、手を出さない。クリスにも説得をして、納得してもらいました」

「……え？」

「あ、ありがとうございます少年！君は命の恩人だよ！」

もう死んでるけどな！と喜ぶベルデイアさんを尻目に、困惑しながら疑問符を浮かべるクリスを目線で黙らせる。

「気にしないでください。悪いのは全部犯人ですから。あ、ぼくはカズマつて言います」

「本当にありがとうございます、カズマ君！ 実は俺はアクセルの街で魔法具店を営んでいるんだ。

魔法がかかつた武器や装備も取り扱つてゐるし、来てくればサービスするよ！」

「あ、本当ですか？ いやそんな悪いですよ～」

「遠慮するなつて！ 何なら剣の稽古を付けてやろうか？」

「剣の稽古もいいですが、ぼくはデュラハンのスキルが気になるなあ。普通じや覚えられないし、強そうだもんなー。あ、ぼく冒険者職なんで一応覚えられるんですよ～。教えてくれたら助かるんですけどねえ」

「なんと、デュラハンのスキルを？！すげい発想力だ、カズマ君は大物になるよ！ 勿論喜んで教えてあげよう！ 今度ウチの店に来るがいい！」

「えー本当ですかあ？ やつたあ、嬉しいなあ」

スマーズに進む会話の中で、クリスだけではなく、ゆんゆんとクレアも啞然として俺の方を見ている。

そして俺は、あの疑うことを見らなそな3人に振り向いて全力の悪い笑顔を見せ、その後すぐに表情を営業スマイルに戻しベルデイアさんとの会話を続けた。

捨てる神あれば拾う神あり。
寝ているものは親でも使え。
至言である。

第十話

「ほー、ここがベルディアさんの店か……結構立派じゃないか」

大通りから離れたところにこじんまりと佇む店、『ベルディア魔道具店』。魔道具店とは名ばかりで、実際は知る人ぞ知る武具店だ。

店の稼ぎはそれほどでもないものの、推奨レベルの高い装備が棚に並ぶこの店には、質のいい武器防具を求める常連は多いらしい。

間違つても俺みたいな新米が足を運ぶ場所ではないが、先日の一件から、俺はこの店を訪ねて来ていた。

「すみませーん、ベルディアさんいますかー?」

店内を見渡すと、キラキラと光る美しい装備の数々。今のところ客はないが、だからと言つて寂びしい感じはなく、アンデツドが店主とはとても思えないほどの清潔感を感じることができる。

「いらっしゃい……おお! カズマ君じゃないか!」

店の中に入ると、ベルディアさんが快く迎え入れてくれた。

「カズマ君一人か? 他の女の子たちは一緒にやないのか?」

「ええ、クリスを連れてくるわけにもいかないですし、他の2人もね……」

クルセイダー

クリスは正直何をするか分からんし、クレアも曲がりなりにも聖騎士のクラスなので論外。連れて行くとすればゆんゆんだが、クリスが露骨に嫌がるので誘う事もできずに置いてきた。そもそもクリスは俺が店に行くのにもかなり渋っていたが。

「おお……それは……まあ、しようがないよな。あのプリーストの子は敬虔な信者のようだし……」

流石はベルディアさん、察しがいい。酸いも甘いも噛み分けた壯年の頬もしい雰囲気がある。何でこんな人がアンデッドなのだろうか。

まあ、それを聞くのはさすがに失礼だ。ベルディアさんの過去に何があつたかなんて知らないが、幾ら何でもアンデッドになつた事情なんて聞かれて嬉しい人（人ではないが）は誰も居ないだろう。

「ええ、それは良いんですよ。今日来た理由はですね……」

「ふむ、他のパーティメンバー全員が上級職なのに自分一人だけ最弱職なのを気にしていると」

「ええ、それで色々なスキルを覚えられるという利点を活かして、デュラハンのスキルを習得したいんです」

実際ウチのパーティはかなり強い。前衛のクレアに後衛のゆんゆん、そして支援役のクリス。序盤中盤終盤隙がないと思う。……俺を除けば。

現在の俺の役割は敵感知と隠密を活かした司令役だが、前にも言つた通りこの街のクラストのレベルではそもそも司令役が必要ない上に、高レベルで経験も多いクレアの加入で俺の価値は殆ど敵感知のみになってしまった。

クリスがいるので捨てられることは無いと思うが、それでも気まずいし、何より周りの目が痛い。スキルを教えて貰つていた時に冒険者連中とかなり仲良くなつたので何も言われていないうが、普通に考えると美人で上級職のパーティメンバーに寄生している最低男に見える事だろう。

普段の俺なら特に気にする事では無いが、クリスの人気っぷりを見てはいるところのままでいつか寝首を搔かれる恐れがある。クリス曰く一度死んでいる俺はもう蘇生魔法でも生き返る事は出来ないらしいし、何とかしなくてはならない。

「良いだろう。アンデッドスキルとなるとあまり教えられるものは多くないが、俺は

元々とある国に仕えていた騎士でな。普通のスキルもそれなりに持つてゐる。色々見繕つてあげられるだろう」

ふむふむ……だが騎士系のスキルはクレアの下位互換にしかならないし、できればもつと別のがいい。

「ありがとうございます。でも前衛はクレアで事足りてるので、何かオンラインーワンになれるようなスキルは無いですか?」

「そうだな……流石にアンデッド召喚の魔法は教えるも使えないだろうし……それなら、俺もよく使つてゐる【魔眼】スキルなんてどうだ?習得コストも安いし、使い勝手が良い。デュラハンの固有スキルだから他にはないしな。ホレ、【魔眼】!」

ベルデイアさんが提案したのは【魔眼】というスキル。それを使用すると、ベルデイアさんの顔の後ろに一瞬だけ巨大な眼のイメージが出現し、ベルデイアさんの眼に魔力が宿る。

「【魔眼】スキルと言うのは、都合良く言えば敵の動きを見切つたり弱点を見破つたりする事ができる。俺が使うときはこうやつて首を外して……」

「うおお!」

ベルデイアさんは急にガチャリと首を外す。初めて会つた時からずつと首が繫がつていたのですつかり忘れていたが、そういえばこの人は首無し騎士じやねーか……首が

無いのが普通なんだ。

「フフ、懐かしいなこの反応……」

俺が使うときは首を外して上に投げ、俯瞰視点でこのスキルを使うんだ。全方位から襲いかかる敵の急所も太刀筋も、魔力の動きさえすべて見えるから重宝するぞ？

ただ見るだけだから魔力消費も少ないし、使い所も多い。どうだ？」

「すぐ」いつすベルデイアさん！・マジ最強っすね！」

「はつはつは、そだろそだろ！」

煽てられて上機嫌なベルデイアさんを尻目に冒険者カードを見ると、既に習得可能スキル欄に「魔眼」の文字がある。習得コストもそこまで高くなく、さつきの説明からするとかなりお得に見える。

キヤベツの件でレベルが上がったのでポイントには余裕があるし、覚えておいて損はないだろう。俺は即座に「魔眼」を習得した。
「……よし、これで俺も魔眼使える。「魔眼」！」

俺が【魔眼】を発動すると、徐々に魔力が減つていく感覚があつた。分かりやすく言うと軽くランニングをしている感じで、冒険者になつて体力が上がつた俺なら30分ほどは使えるだろう。

そして視界にも変化がある。一瞬だけ視界が黒色に染まり、周りにあるものすべてに

オーラのようなものが見え、ベルデイアさんの動きが遅くなつたように見えた。

「おお、習得したみたいだな」

「はい！凄いつすねコレ。なんかその辺のもの全部に赤いオーラ的な何かが見えますし、すげースローになつたみたいな……」

「後はより意識して対象を見ると、細かい魔力の流れを見る事ができるから行動の先を読む事だつてできる。」

「後はそのスローになつた視界に慣れれば完璧だな。少し練習してみるか！」

「ありがとうございます！行きましょうベルデイアさん！」

『數十分後』

「うひやひやひや！これで俺は最強だぜ！あざつすべルデイアさん！また今度武器とか買いに行きますんで！ひやつほーい！」

やけに高いテンションで店から出て行くカズマ。店の裏には、床に座りこんで首が床

に転がっているベルデイアの姿がある。

元はカズマが習得した【魔眼】スキルに慣れるという目的だったはずだ。その為に店の裏にあるちょっと広いスペースで軽く手合わせしていたのだが……

「……マジか。マジかあいつ」

ベルデイアは後悔した。考え無しに有用なスキルをカズマに教えてしまった事を。

「どうわあああああああ!!!」

「ギチギチギチギチギチ!!」

俺は今、2メートルはあるうかという二足歩行の巨大な虫に追いかけられている。ちよつと離れたところにゆんゆんがいるが、動き回る標的に狙いが定まらず、また俺が標的の近くにいるため魔法を放つことができない。

新しいスキルを覚えた俺は、早速みんなを誘つてクエストを受けた。クリスは俺が自発的に働く意欲を見せたことに大層感激していたが、【魔眼】を使ってみたかつただけな

ので、使い心地を確かめたら金が尽きるまでは働く気はない。

今回の討伐目標は冬牛夏草。とうがいのうかそう 名前から連想される通り他の生物に寄生するタイプで、日本にもいる冬虫夏草とうちゅうかそう はキノコの一種だが、こちらは昆虫のような見た目をしている。他の生物に寄生して栄養を摂取し、成体に成長する夏になると繁殖のため寄生した生物を喰い殺して成長し、他の生物に卵を産み付ける。なかなか危険度の高いモンスターだ。

そして今は晩夏、栄養満点の寄生元の生物を食い、育ちきった成体に、時期は繁殖期の終わり頃。気が立ち成長した個体は一番危険な時期になるだろう。

動きも素早く力も強いが、追い詰め過ぎて仲間を呼ばれたりしない限りは群れることがないのでさほど討伐が難しい訳ではない。平均レベル10以上のパーティなら問題無いとされている程度の危険度だ。

俺はこの前のキヤベツでレベル11になつたし、ゆんゆんもレベル10。クリスは殆ど討伐はしていなかつたが、先日大量のゾンビ（ベルディアさんが召喚していた奴）を浄化したのでレベル7になつた。それにレベル31のクレアがいるので、適性レベルはバツチリクリアしている計算になる。

話に聞くところ、ゆんゆんは主にこのモンスターを討伐して生計を立てていたらしい。なら大丈夫だと思つて討伐クエストを受けたし、受付嬢も問題無いと言つてくれて

いた。

失念していた。俺は能力値が足らずに基本職になることしか出来なかつた冒険者。そんな簡単にパーティで挑むことを推奨されているモンスターを倒せる訳がない。エルみたいに動きが遅く、肉質も柔らかい訳ではないのだ。

「クッソ！【魔眼】！」

魔眼スキルを発動し、俺の視界に映る全ての動きがスローになる。俺に襲いかかる冬牛夏草の動きを読んで攻撃を余裕を持つて躊躇し、脚の節にダガーで突きを食らわせる。「ギツ！」

やけに硬い甲殻に傷が一つ刻まれるが、ダメージは入らない。だが足の節を正確に攻撃したことにより、膝カツクンの要領でバランスは崩れる。

「ゆんゆん！ いまだ！」

「カース・ド・ライトニング」！

俺が冬牛夏草から離れると、ゆんゆんの杖から黒い稻妻が迸り、何かが弾けるような音とともに冬牛夏草は倒れた。

「カース・ド・ライトニング」、雷属性の上級魔法だ。高位のモンスターにも高い効果を望める攻撃力の高い魔法。最近習得したらしい。

「ハア……ハア……ゲホッゲホッ！」

「だ、大丈夫ですか……？」

もう一步も動きたくなくなるような倦怠感の中、俺はさつきの【魔眼】スキルを使用していた時のことを思い出す。いつもより体力の消費が重く、ダツシユの後だったこともありかなりキツかつた。

魔力を消費しながら激しい動きをしていると、体力を多く消費するのだ。魔力が多いベルディアさんならいざ知らず、低レベルの俺にはこのスキルは長く使えるものではない。何もしていない時でさえ30分ほどが限度なスキルを使いながら戦闘をしたりすると、マジで5分が限界なんじゃないかと思うくらい消費が激しい。

(使い方によつては最強クラスのスキルではあるけど、戦闘に使うには俺のレベルが足らないぞ……)

遠くの方ではクレアが数匹を相手に戦っている。

態々一体を軽く痛めつけ、仲間を呼ばせて一網打尽にする作戦らしい。

「やつぱりクレアは強えな……あんな恐ろしい冬牛夏草複数相手に……やつぱりあいつに任せときやそれで良いだろ」「何を言つてるんですか……」

「[ゴッド・ハンド・インパクト] ッ!!?」

冬牛夏草の顔面が俺たちの方に転がつて來た。飛んできた方向を見てみると、クリスがいつの間に買ったのかメリケンサックを装着した拳を握りしめ、首の無い冬牛夏草を踏み付けている。

「あ、カズマさん！どうやらこいつ、打撃が弱点みたいですね！今日は私も前線で頑張りますよっ！」

「…………」

「喰らえ！【ゴッド・ハンド・クラッシャー】！」

振り返りざまに、迫つてきていた冬牛夏草を光る拳で殴り飛ばす。例の如く顔面が千切れ飛んだ。

「…………」

最近、クリスのキャラ崩壊が激しい。

「もうクエストには行かない。絶対に行かないからな」

「カズマさん! 何を言い出すんですか! レベルも上がつて、これからつて時に!」

「いやバツタバツタ羅ぎ倒せるお前らは良いだろけど、俺はあんな奴らに囮まれた日にやマジで死ぬぞ!」

シユワシユワを煽りながら宣言する。

「あんなのを相手に戦うくらいなら、俺は最初に勧められた商人への道を選ぶね。つか、力エルから急に難易度上がりすぎだろ……」

「お前……自分から行こうって誘つてきておいて……」

「まあまあ……繁殖期のモンスターは気が立つていて見境なくこちらを襲つて来ますし、流石に成体の冬牛夏草とうぎゅうかそうはジャイアントードとは訳が違いますから……」

ゆんゆんがやんわりとフォローしてくれるが、全く役に立つていなかつたと言われているようで地味に心にくる。

「そもそも冬になるとこんな楽なクエスト一つもなくなるぞ? 今のうちに稼いでおかないと厳しい冬を乗り越えられんだろう」

「そう言わればそなんですけど……冬のモンスターを倒すことができないのは私も同じですし……」

「そう、冬が来るとモンスターの強さが格段に上昇する。厳しい冬の環境を跳ね除け活

動できる上級モンスター以外は冬眠に入り、楽な依頼がなくなってしまう。

そのため、この時期になると皆こぞつて大量に依頼を受け、お金を貯めて冬に備えるのだ。

「ちくしょう……この虫が楽なモンスターってどうなつてんだこの世界……」

「お前が弱いだけなのでは？」

「……」

ふざけんな嫌いだこんな世界!!

第十一話

「ぐつ……私が、この程度で倒れるわけには……」

「やめてくれ……もう無理だ……勝てるわけがない……」

満身創痍のクリスは、それでも未だに前線へ立ち続ける。後ろでは、すでに戦闘不能に陥ったクレアが制止の声を上げている。

「おい、大丈夫か？ ただがむしやらに突っ込んでいくだけが戦いじゃない。お前だつてわかってるはずだ」

俺が諫めると、より一層辛そうな表情になるが、それでもクリスは止まらない。

「ツ……それでも！ 私は！」

いや、もはや止まれないと言ったほうが正しいだろうか。クリスは更に前へ、前へと進んでいく。その決意に満ちた瞳には、地上に降ろされた時に薄れてしまつたはずの女神としての神性が確かに宿っていた。

『この世に渦巻く我が眷属よ！』

クリスが両手を掲げ、仄かな優しい光がクリスを包み込む。

『幸運の女神、エリスが命ず！』

そして、それはやがて片手の掌に集まり、小さかつた光は神々しい輝きへと転じた。
『均衡の秤たる世界の法を超越し、我が意に従え！』
幸運を宿した右腕を振り下ろす。神の奇跡とも呼べるその一撃は、

「ロイヤル・ストレート・フラッシュ！」

「はいファイブカード」

「あああああああああ！」

俺の幸運値の前に呆気なく弾き返された。

「……何してんですか、全く……魔法まで使つてやることですか？今までウェイトレスさんから変な目で見られましたよ。ようやく仲良くなつてきたところなのに……」

「ついでに聞くけど、ウェイトレスとはどれくらい仲良くなつたんだ？」

「この前、私が座つてたら注文しないのにお水出してくれたんですよ。凄くないですか？」

この世界にもトランプは普及していて、聞くところによると結構昔からあるらしい。やはりと言うか、昔に送られた転生者が地球の知識を使って売り出し、巨万の富を得たのだそうだ。

そんなこんなで俺たちはポーカーをやつていたんだが、どうもクリスは案外熱くなりやすいタイプらしい。負けたら次、負けたら次とどんどん勝負を挑んでくるので、これもしかしたら筆れるんじゃないかと野菜ステイツクを賭け出したところでクリスが変な魔法を使い、ゆんゆんに見つかってお説教を受けている所だ。

これも、俺のステータスで唯一高い幸運のなせる技だろうか。そのうち本当に商売に手を出しても良いかも知れない。

「熱くなるのは良いですけど周りの目とかも考えないと……偶にやんちやしますよね、クリスさん」

「……はい、仰る通りです……」

「カズマさんも、こんなになる前にさっさと止めてやつてくださいよ……」「いや、こいつらがノリノリで……それに、良いカモだつたし……」

「カモ!? ちよつとカズマさん今カモつて言いました!？」

喚くクリスは置いといて、実際俺は悪くない。野菜ステイツク賭けようぜつて言つたのは俺だが、2人ともノリノリだつたし。何故か2対1を強要されたから寧ろ俺が被害者になるレベル。

「流石にその言葉は聞き捨てなりませんよ！ 私はカモじやありません！ 次、次に勝てば今までの負けは……」

「クリスさん、もう止めよう。それ以上口に出したらいけない」

「いえ！ 次は勝てそうなんです！ 身体に運命の力が渦巻くこの感じ……いけます！」

「正直言うまでもないことですけど、さつきみたいに賭け事で魔法を使うのはイカサマ扱いになるのが一般的ですよ」

「……」

クレアに論破されてがっくりどうなだれるクリスを見ると、あのアクアとかいう駄女神の後輩だと言うのも納得できると思えてくる。

『数時間後』

「フルハウス！」

「キングとエースのフルハウス。俺の勝ちだな」

「おいコラ！ おかしいだろ！ 何でそんなに強い手が毎回のように入るんだ！」

「その手の苦情は聞き飽きたよ、さつさと金おいて次に代われ。はい、次の挑戦者の方！ もしも俺に勝てたら10万エリス！ 一回の挑戦につき1万エリスとなつております！」

あの後、トランプゲームを禁止された2人は暇を持て余して討伐クエストに向かった。あの2人なら心配するだけ無駄なので、俺とゆんゆんは賭けはしない条件で2人でトランプで遊んでいた。ポーカーだつたりブラックジャックだつたり、七並べだつたりと本当にトランプは有能だ。

そろそろ季節は秋に差し掛かり、畑の秋刀魚が美味しくなる季節（これは冗談じやない。この世界ではマジで秋刀魚が畑に実る）。この頃になるとちゃんとした会計役がいるパーティは冬に備えるための資金を集め終わっている者も多く、そんな奴らは大抵ギルドに集まつて駄弁つてている。

暇していた冒険者たちは俺たちに触発されたのか所々でトランプをやり始め、俺が悪ノリでこんな催しをしたら予想を遥かに超える大盛況となつた。二重の意味で幸運值様々だなあ。本当に商人の道を目指してみるのも面白いかもしない。

「ほらほら、1万エリスが10万エリスになるかも知れないんだよ!? 仮に10回挑んで1回しか勝てなくとも、お財布にはプラスになるんだよ!? 挑戦してくる勇気のある者はこの街にはいないのかい!?」

「…………」

「……おい、お前行けよ」

「今まで誰も勝つてないとか、絶対なんかあるだろ。お前こそ行けよ」

まあ、幸運の女神が魔法^{チート}使つても超えられない壁を冒険者連中が超えられるはずもなく、俺はこいつら相手に荒稼ぎをしている最中だ。

冒険者は命に関わる仕事を生業としており、そのせいか金を考え無しに使う奴が多いので、一回1万エリスの勝負にも平氣で乗つてくる。既に数十万エリスの儲けが出ており、流石に勝てないことに気付いたのか挑戦者が居なくなつてしまつた。

「チツ……何だよしけてんな」

「もう充分でしよう……全く、クリスさんがいないのを良い事に……」

「待ちなさい！」

そろそろ店じまいかと思つていた頃に、挑戦しようという者の声。

仕方ない、キリも良いし、こいつを最後に……

「ふふふ……真打登場！です！」

「…………」

クエストの報酬であろう札束を携えたクリスがいた。そこで、その後ろには俺たちの方を悟つたような目で見ているクレア。多分、クリスに止めるよう説得しても聞く耳を持たなかつたのだろう。

そんなクリスのドヤ顔を見るや否や、この先の展開を悟つた俺とゆんゆんは無表情でトランプと金を片付け始めた。

「あれ!? いやいや、待つてくださいカズマさん！ ゆんゆんさんもどうして!? 1万エリスならここに……」

「うわ、いくら稼いだんですか？ ザつと30万エリスはあるんですけど」

「あーそんなに？ しようがない、今日は冒険者連中に奢つて印象良くしておくか」

「何で無視するんですか!? 次こそは勝てるんです！ カズマさんの幸運値から逆算すると私に連続で勝てる回数はおよそ8回だからですね……」

「……いい加減に「いい加減にしなさいよ！」

「…………え？」

「ここのは冒険者ギルドよ！ギャンブルなら他所でやりなさい！」

声を上げたのは、見たことのない女の子だつた。

この街の冒険者ではないようだが……

「え、あ……いや、えっとですね……」

「別に、私も無理してクエストに行つて稼いでこいとは言わないわよ。ちょうどいい難易度のクエストが無いってこともあるでしょうけど……あなたは何なの!? クエストに行く実力があるのに、やることはギャンブルのタネ作り!?」

「うぐう……！」

いやその、別に四六時中ポーカーばかりやつてるわけでは……その、これでも一応アーケープリーストで……」

「尚更よ！世界の為にキヨウヤが頑張つてるつて時に！ご加護をくれるエリス様に申し訳無いとは思わないの!? 恥を知りなさい！」

「ごめんなさい……恥知らずでごめんなさい……」

うわあ意識高けえ……

最初はしどろもどろになりながらも反論をしていたクリスも、今や縮こまつて情けない姿を晒している。申し訳ないと言うか、本人だしな……何気にあの言葉が1番心にキテそうだ。

周りの冒険者たちも、心なしか気まずい雰囲気を醸し出している……急げてる自覚はあるんだな、お前ら。

そんな事を考えていると、戦士風の少女の怒りが俺の方へ飛び火し……「そこのアンタ！そもそもは……「その辺にしどけ、クレメア」

すると、青い鎧と巨大な剣を携えた茶髪のイケメンがその子を諫めた。

「キヨウヤ……！」

でも、こいつらが！」

「彼らに当たつてもしようがないだろ。別に犯罪を犯してる訳じゃないし」

「うつ……」

落ち込むクレメアと呼ばれた少女に対し、そのイケメンは笑顔を見せて自然に頭を撫でる。

「気にすることはない、その考えは正しいさ。彼らが間違ってるとは言わないけどね」「あ……」

頭を撫でられ、クレメアは顔を赤くした。周りに人がいるにもかかわらずキヨウヤは撫でるのを止めない。

「「…………」「」」

一応言つておくが、ここはギルドの酒場。さつきまでの賑わいもそのままに、ざつと

3、40人の人が周りで見ているのだ。

……何だこのテンプレ純感系主人公野郎は。

見ててとてもイライラする。

多分、ここにいる冒険者の殆どがそう思っているだろう。何だこれ？俺たちは一体何を見せられているのだろうか。

「そこの君、悪かつたな。

ただ、ゲームを主催するのはいいが、それを悪質なお金儲けに使うのは……特に女子からお金を巻き上げるのは絶対に辞めておけ」

「あ、ああ……」

……いや、反射的に頷いてしまったが、別に俺はクリスから金を巻き上げた覚えはないんだが。むしろ止めたぞ？

そのまま奴は、クレメアに言い負かされていたクリスに話しかけようとする。

「私……私悪くないもん……ちょっとやつてみたかっただけだし……」

「プリーストさんも、これに懲りたら賭け事は…………えつ」

奴はクリスを見て固まる。そして、今までの余裕も何処へやら……目を見開いて大声で叫んだ。

「め、女神様ああああああああああああああ！」

「はああああ!? 転生した時に女神様をこの世界に引きずり込んだ!? いつたい何を考えて
いるんだあなたは！」

ミツルギが当たり前のように女神女神と連呼するので、取り敢えずクレアと戦つたあ
の路地裏に来て説明をすると、ミツルギは俺の胸ぐらを掴んできた。

「こいつの名前は御剣響夜(ミツルギキョウヤ)」
と言い、転生者らしい。俺と同じように一度死んでから転生
の間へ送られ、転生特典として魔剣グラムという神器を賜り今まで冒険を続けてきたそ
うだ。今では王都で『魔剣の勇者』として有名なのだとか。

「ちょ、やめてください。私は別に不自由はしていませんし、結構楽しくやつてるるので気
にしてませんし……」

「だからって……！ 女神様、この扱いは不当ですよ？ 貴女は女神、もっと素晴らしい生活
をしてしかるべきでしよう！ それに女神様をカモ扱いしてお金を巻き上げるなんて
……！」

「いえ、それは誤解なんですが……」
ミツルギは更に腕の力を強める。ちょ、苦しい苦しい……

すると、クレアがミツルギの手を掴んだ。ミツルギは思わず手を離し、俺を解放する。

「おい、さつきから何なんだお前は。さつきから黙つて聞いていれば偉そうに。クリスさんの知り合いのようだが、サトウカズマとは初対面なのだろう？少しば礼節というものをわきまえろ、無礼者」

俺には恨みがあるため、基本的に冷たいクレアが今回ばかりは怒っていた。なんだかんだ言つてクレアは眞面目だ、いつまでも勘違いしたまま俺を悪者扱いするのは気に食わなかつたのだろう。

人を嫌うよりも自分の悪い所を先に考えるタイプのゆんゆんですら、ミツルギに對して嫌惡の目を向けている。

案外あつさり手を離したミツルギは、興味深そうにクレアとゆんゆんを見る。

「君は……クルセイダーか。そしてもう1人はアークワイザード。それに2人ともすごい美人さんだな。サトウカズマ、君は仲間だけには恵まれているんだね」

「……」

……失礼な物言いで、ミツルギは続ける。

「それなら尚更だよ。君はこんな優秀そうな人たちとパーティを組んでいるのに、こんなところでだらけきつた生活をして恥ずかしく無いのか？さつきの話だと、就いている職業も最弱職の冒険者らしいじゃないか」

……何だコイツ？ いつたい何の権限があつてここまで俺を、ボロクソに罵つているのか。温厚な俺でもさすがにカチンと来るぞ。

というか、そもそもそこまでだらけきつた生活を送つてなどいない。確かに今日は朝からトランプ三昧だったが、昨日はちゃんとクエストにも行つている。

「……おいクリス、何だこいつ。何でここまで俺を目の敵にしているんだ？ あと何でこんなに人の話を聞かないんだ」

「目の敵にされている理由はちょっとわかりませんが、人の話を聞かないのは生來の性格なのでは……まあ、仲間の女の子には慕われているようなので、普段は悪い人ではないと思いますけど……」

はつ、どうせ転生する時にクリスに一目惚れしたとかその辺だろ？ そんで俺が連れ回してるので見てイラついてるんだろうな。

そんな俺の考えを他所に、ミツルギは同情でもするかのように哀れみの混じつた表情で俺の仲間たちに話しかけた。

「君達、今まで苦労したみたいだね。これからは僕と一緒に来ると良い。君たちはこんなところで腐っているには勿体無いよ！ それに、ソードマスターの僕と戦士のクレメア、そしてクルセイダーのあなた。盗賊のフィオと女神様が支援をして、後衛はアークウェイザードのその黒髪の子だ。完璧なパーティ編成じゃないか！」

「断る」

「そのパーティに俺が入っていないぞと文句を言う前に、クレアがその提案をバツサリと断つた。

「あまり調子に乗るなよ。私は嫌々このパーティで活動しているんじゃないし、不満も特はない。自分の意思でこのパーティに属しているんだ。それに、貴様のようなナンパ紛いの引き抜き行為をする常識知らずに背中は任せられん」

「私も同意見です。私を誘ってくれたこの人たちと冒険がしたいんです。誰でも良いわけじやありません」

……不覚にもグッときてしまつた。こいつら、良いやつじやねえか……

「……そういう訳ですので、悪いですが貴方のパーティには入ることは出来ません。私はカズマさんたちと一緒に魔王討伐を目標に頑張りますので、貴方も頑張つてください」

クリスも俺のパーティに残つてくれるようだ。ミツルギには悪いが、コレは俺たちの絆を再確認するイベントだつたと思つておこう。

「じゃ、俺たちは戻るから。お前は優秀なんだろ？魔王討伐頑張つてくれ。応援してるので、魔剣の勇者様」

俺は適当なお世辞を、みんなと一緒に立ち去ろうと……

「あの、どいてくれます?」

.....

「悪いが、女神様をこんな境遇に置いておく訳にはいかない。君にはこの世界は救えないし、魔王を倒すのはこの僕だ。女神様は、僕のパーティに来た方が絶対に良い」

.....うわあ、此処までナルシスト入ってるのか。

此処まできたら、この先の展開は予想できる。クレアと同じパターンだ。

「僕と勝負しないか? 僕が勝つたら、女神様を僕のパーティに貰う。君が勝つたら……そうだな、君の言うことを何でも一つ聞いてあげようじゃないか」

ほら、やつぱりこうなる。

どうせこいつも異世界に良いイメージを持つて転生してきたんだろう? 僕は散々現実を叩きつけられたから分かつていてるが、こいつは違う。初めから魔剣を持ち、俺TUEEEEプレイをし続けてきたミツルギはまだ夢と現実の区別がついていない。つまりは、この勝負がクリスを仲間にするイベントにしか見えていないのだ。

ま、現実はそう甘くない。勝負とか言い出すあたり世間知らずっぽいから、本当に對人戦をした事はないはずだ。あつたとしてもせいぜい模擬戦レベルだろう。

「貴様、いい加減に」

「はあ、良いぞ。ただし、勝負が終わつた後に何を言われても恨みつこなしだからな?」

クレアが怒りに任せて怒鳴り付けようとするが、それを遮るように、俺はその勝負に応じた。

「はは、構わないさ。何でも好きに命令するが良い。もし僕に勝てたら、の話だけね」「おい、サトウカズマ！ 何も受けける事は……」

「まあ待て、こつちも勝算があつてやつてるんだ」

俺の言葉に、ミツルギは眉を顰める。ハツタリ半分本気半分だが、これが重要だ。ベルデイアさんから【魔眼】を教えてもらった時から考えていた作戦が、漸く使える。「まずはルールだ。先に負けを認めるか、武器を失つた方の負け。基本何でもあり。これで良いな？」

「……ああ、文句はない」

ミツルギは頷いた。これで仕込みは完了だ。

そして、俺はミツルギに話しかける。

「……なあ、お前は俺を随分と舐めてかかつてているようだが……」

「……？」

「宣言しよう。お前は自ら敗北を認める事になる」

「【魔眼】。さあ、俺の目を見ろ……！」

「【魔眼】。さあ、俺の目を見ろ……！」

そう叫んで目に魔力を込めると、咄嗟に俺の目から視線を外したミツルギは俺の前から飛び退いた。

《ミツルギ s i d e》

「魔眼 ツ！」

「クッ！」

女神様をこの世界に引きずり込んだ彼は、勝負開始の宣言を待たずして謎のスキルを発動させた。一瞬瞳の色が変わったように見えたが……

僕の推測では、アレは洗脳か幻術の能力。

女神様を連れてきたという話を聞いて、転生特典は女神様だと勝手に信じ込んでいたが、まだ隠し玉を持っていたとは。確かに、女神様を守護するために何かの能力を貰つていてもおかしくはない。

とにかく、相手の能力がわからない以上、迂闊に攻め入るのは危険だ。少なくとも、彼の言う通りにあの眼を直視したら何が起きるかわかつたもんじやない。

僕はさらに警戒を強めると共に、必殺の武器である魔剣グラムを握りしめ……

【ステイール】！

……閃光が放たれ、あつさりと僕の両手から魔剣が消え失せた。

《カズマ side》

「はい、武器を失ったお前の負けな」

「え、は、はあ?!ちょ、ちよつと待て！その魔眼とやらの力は……？」

「なんでお前に教えなきやいけねーんだよ。あ、もしかして信じちゃつた？自分が何かしらの能力で負けを認めさせられるとか本気で信じちゃつたあ？ふーくすくす！ウケるんですけど！調子こいて勝負とか言つちやつた拳句、格下のハツタリに騙されてご自

慢の武器盗まれるとかちよーウケるんですけど！」

「ああ……そうだ、コイツはこういうことする奴だつた……はは……うえつ」

「ああ！クレアさんがトラウマで吐きそうになつてる！」

「トラウマじやないぞ……トラウマじやないからな……」

やつぱり騙されたコイツ。

どうせ【魔眼】つて聞いて写〇眼連想したんだろう？なんでもありの勝負で敵の言うことを間に受けるとか、煽り抜きで超ウケるわ。何で目に関する力つてだけで強そうに聞こえるんだろうね。

実際にはただちよつと動体視力が良くなつて、魔力の動きが見えたりするだけなのに。それの仕様がちよつと便利すぎるが。

そう、この【魔眼】というスキル……ベルディアさんはただの近接戦闘補助のように言つていたが、本質は『魔力の流れを観る』というスキルであり……その性質を応用して、魔力があるのであれば『ロツクオン』することができる。

本来はロツクオンしたところで魔力の流れをより細かく見れるだけというただのオマケ効果。だが、他のスキルと併用することでロツクオンは真価を發揮する。

【狙撃】スキルであればロツクオンした部位へ必中となり、仮に魔力のある物質をロツクオンすれば……【窃盗^{スタイル}】で、何と確定で盗むことができるのだ。

本当に最高のスキルだ。ベルディアさんには感謝してもしきれない。

「んじゃ、この魔剣は貰っていくぞ。ああ、それと……」

「ひ、卑怯者卑怯者卑怯者——つ！あんた恥ずかしくないの!?」

「こんな勝ち方、私たちは認めないわ！さつさとその魔剣グラムを返しなさい！それはキヨウヤにしか使えないんだから！」

ミツルギの仲間が喚き散らしている。俺は負け犬の遠吠えを軽くあしらおうと……ちよつと待て今何つった。

「え、マジで？これ俺には使えないの？」

思わずクリスに尋ねる。

「……はい、その魔剣グラムはミツルギさん専用です。なので、カズマさんが持つていても少しよく切れる剣位の価値しか無いと思います。だから返してあげても……」「えー……」

チツ、何だよ……せっかくチート武器が手に入つたと思つたのに……

「まあ良いや、この安物のダガーよりは強いだろ。そんな訳で、これは貰っていくから」「カズマさん!？」

「まつ、待つてくれ！」

またもミツルギが俺の前に立ち塞がり、日本人らしく土下座を決めた。おい、仲間の

前で恥ずかしく無いのか？

「……何でも一つ言う事を聞くなどと言つておきながら、こんな事を頼むのは虫が良いのも理解している。お願ひだ、魔剣グラムを返してくれないか？代わりに、武器屋で一番高い剣を……いや！装備一式を買つてあげよう！」

「……はあ？ 何言つてんだお前？」

「確かに、こんな事を頼むのは恥晒しだと分かつてゐるが……」

「いやいや、そつちじやねえよ」

「……へ？」

俺の言葉に、素つ頓狂な声をあげて顔を上げるミツルギ。

「だから、何でも一つ言う事を聞くと言つておきながら、つて所の話だよ？俺はまだお前に何も命令してないぞ」

「……は？」

ミツルギは何を言われたか理解していないように、目を見開いて固まっている。

「だーかーらー、この魔剣は俺がステイールで手に入れた物だろ？つまりはただ実力で奪つただけ。命令とは別だろ」

「え、ちよ……はは、ちよつと何言つてるかわからないな……」

『何言われても恨みつこ無し』だろ？回数制限もしてないし、勝つた時とも言つてない。

何かおかしいこと言つたか？俺」

「「……うわあ……」「

ウチの3人組は、みんながみんなドン引きしたような目で俺を見ている。

「い、いや、それは……」

「まあ良いや、んじや命令な

うーんそうだな……

取り敢えずこの街で一番広くて高い屋敷と、そこに置く為のこの世界で最高級の家具

一式を全部屋分、よこせ」
俺以外の全員が、絶句した。

第十一話

ミツルギ事件（ゆんゆん命名）から数日。俺たちはとある場所に来ていた。

「ここか。なるほど、流石に町一番の豪邸と言うだけはあるな！」

「……私は罪悪感で今にも潰れてしまいそうなんんですけど……」

街の郊外にある、一軒の巨大な屋敷。

そう、ミツルギ事件で俺があいつに要求した『この街で一番広くて高い屋敷と、この世界で最高級の家具一式を全部屋分』の屋敷の方である。

「……それにしても大きいですね。屋敷にしては小さい方だと業者の方は言つていますが、庭まで合わせると紅魔の里の5分の1くらいあります」

「いまいち例えがわからんが、別荘ならこんなものじやないか？」

ちなみに、ゆんゆんとクレアは我関せずの姿勢を貫くことにしたらしい。要求についてはやり過ぎだと思うが、ミツルギにも非があるからとりあえず静観、ということだそ
うだ。

「……カズマさん」

「ん、なんだクリス」

「本当に、これで魔剣グラムを返してあげてくれるんですよね？」
それでは、話を少し前に戻そう。

魔剣グラムは、現在ベルディアさんの元で『預かって貰っている』状態である。これは別に、俺が魔剣を売つぱらつたからベルディアさんの店のショーケースに展示してあるという意味ではない。ただ預かって貰っているだけだ。

と言うか、元々俺に扱えないとわかつた魔剣に興味はない。持つてみたところ結構重いし、下級の戦士職にすら就く事が出来ない俺にあんなでかい剣を扱えるとは思わないし。

つまり、あの剣は交渉用に奪つたのである。屋敷はやり過ぎだというのは重々承知、その上でミツルギの中で屋敷と同程度の価値を持つであろう魔剣を奪つておき、片方を返すという条件で屋敷を手に入れようという算段だ。

『最初に無理難題を押し付け、少しづつ要求の度合いを下げる』というやり方の値引き方がある。そうだが、俺は『交換条件を出すことで無理難題に正当性を持たせる』方法を探つた。交換条件用の魔剣もミツルギから奪つたものだし、コスパ最高である。

「大丈夫大丈夫。勿論、約束は守る」

「本当ですよね!!」? 最後になつてやつぱやめたとか言いませんよね!!?」

……しつかしまあ本当に屋敷をくれるとは。あいつどんだけ金持つてたんだ？流石に冗談半分だつたんだけど。

「じゃーん！なんとなんと、キセルから出てきたのはネロイドでしたー！」

「うおおおおお!!? どうなつてんだコレ!!?」

「アクア様！もうあんたが女神でいいから、もう一度！もう一度お願ひします！」

「だーめ。やれと言われてやつたら本当に芸人になっちゃうじやないの。それに、一度ウケたからといってそれを何度もやる様な安い女神じやないわ。

一度

そんな事より、次のもすごいわよ！なんとなんと……じゃーん！屋敷の壁に起動要塞デストロイヤーツ！」

「「おおおおお!!?」」

「やめろ！俺の屋敷を汚すな……つて凄つ!!?」

俺が拠点を手に入れて初めての夜。

一体何処から漏れたのか、俺が屋敷を手に入れたことが冒険者連中にバレていた。何かにつけて呑んだくれてるこいつらがこんな絶好のイベントを見逃してくれるわけもなく、俺の新居は宴会に巻き込まれてしまつた。

それを聞きつけ、宴会芸の神こと駄女神アクアもやつて來た。宴会なら自分に任せろとばかりに駆けつけ、酒を呑んではしやぎ回り、今は本業の芸の方をやつてゐる。

正直な所、うるさいだけでとても迷惑だと思つていたのだが、アクアの芸の腕はまさしく神懸かっていた。壁に描かれたハ○ルの動く城っぽい兵器に至つてはもはや芸術品の域である。

「あれり？さつき酒を壁にぶつかけただけだつた様な……ちょ、ちょっとアクアさん？もう一度同じ事を……ああいや、同じじやなくともいいから似た様な事を……」

「だーかーらー、さつきも言つたでしょ？私は同じことは二度とやらないの」「そこをなんとか！一応この家主は俺なんだし、少しくらい……あいたつ」

「なにやつてるんですか。アクア先輩もあんまり屋敷を汚さないでくださいよ」

「なによー！せつかく盛り上がつてたのに！そんなこと言つてると、あんたのその胸
パツド取り上げ「わー！わかりました！芸はやつて良いですかからそれ以上は言わないで
ください！あと壁も汚さないで！」つたく、しようがないわねー」

やれやれとかぶりを振り、また芸を始めるアクア。赤くなっているクリスは恥ずかし
そうにしている。

2人は先輩後輩の間柄だと言うし、案外天界では仲が良かつたのかもしれない。少な
くとも相性は良いように感じる。

「ハハッ、女神様にも可愛い一面があるんだな。意外だよ」

「いつもあんな感じだつての」

今話しかけてきたのはミツルギだ。なんだかんだ宴会に参加しているあたり、ちやつ
かりしている。屋敷を買ったのはミツルギなので、どちらかと言えばいない方がおかし
いのだが。

一応は和解したが、色々酷い目に遭わせたはずなのに平然と話しかけてくるのは……
さすがに女をはべらす勇者候補なだけあつてリア充というか、図太いというか。
「……それにしても、アクアさんつて何者なんだ？昔から凄い芸をするとは思つていた
が、エリス様……もといクリスさんに先輩と呼ばれているようだが……」

「そつくりそのまま先輩の女神らしいぞ。もともとクリスが俺たちの世界の担当で、あのアクアがこの世界担当の女神なんだと」

「本当かい!? それは……意外だな。昔ウチのパーティに勧誘したら断られた挙句逆につこく宗教勧誘されて困つたものだが、改宗してもパーティに入つて貰うのもアリかもしれないな」

「お前……マジかよ」

どうやらミツルギはアクアに目をつけたらしい。確かにアクアの宗教は奇人変人の集まりだと聞いたが、こいつは知らないのだろうか。と言うかクリスに断られたから別の女神に目をつけただけのように見える。

「あんなの見てよく誘おうと思えるな。どう考えてもろくなことしないだろ」

「僕は、女神様をパーティメンバーに出来るのならどんな事でもするべきだと思う。それは君が一番良くわかってると思つていたんだが?」

そういうもののなのか?

「ま、わからんこともないけどな。クリスには色々助けられてるし。たまに暴走するけど」

「ははは、彼女は意外とお茶目なんだな。意外と言えば、君がみんなのお酒代を払つていのものも意外だったよ。かなりお金にはがめついイメージがあつたんだが……」

「はあ？ なに言つてんだ、冒険者仲間とは繋がりを作つておくに越したことはないだろ。少なくとも、何があつたら助けてくれる程度の間柄は必要なんだよ」

ミツルギの場合、チートを貰つて転生したのだから1人でも充分に活躍が出来て、のちに仲間が出来た、という流れだろう。だが俺は俺自身が強い訳じやないから、つーか俺自身は強くなれる気がしないから。

いざという時、自分は頼りにならない。なら仲間に頼るしかないのだ。丸投げとも言う。

「こここの男の冒険者は例の店があるからか、結構高レベルな人が多い。レベル30台のベテランもちらほらいる。」

「……そうか。君にとつては、仲間は屋敷にも匹敵する程の……いや、何よりも価値があるものなんだね」

「……」

「改めて、この前の件はすまなかつた。これで許してもらえるとは思つていないが、この屋敷を僕の気持ちだと思つて受け取つてくれ」

深々と頭をさげるミツルギに対し、俺はなにも言わなかつた。

「……印象つて大切だと思うんだ、うん。」

「……それはそうと、僕がここに来たのは宴会に参加するためじゃないんだ。ちよつと

君に話したい事があつてね」

穏やかだつたミツルギの表情が、急に深刻そうな面持ちに変わつた。

「話したいこと？」

「ああ、あの魔剣の話か？あれは信用できる場所に保管してあるから……」「いや違う……そつちの話も聞きたいが、今は違うんだ。

「……最近何か変わつたことないか？こう、クエスト中にモンスターに襲われたりだとか」

「いや、そんなことはないぞ。そもそも街から出てないからな、先週くらいに冬牛夏草の討伐に行つたのが最後だし」

「……そうか、ならいいんだ」

「……変な奴だな。

「まあいいや、飯でも食おうぜ」

そう言つてテーブルの方に目を向けると……

……そこにはもう俺たちの飯は残つていなかつた。

「もぐもぐ……ごっくん」

「……」

「……」

「ふいー、久しぶりにこんなにいっぱい食べましたよ……あ、私のことはお構いなく」料理の代わりと言わんばかりに、大量の皿が積まれた席に座った黒髪の少女が、満面の笑顔で俺たちを迎えたのだつた。

その頃、ベルデイア魔道具店。

「……どうしてこうなつた」

ベルデイアは目の前に置かれた神器魔剣グラムを見つめながら、なんとも言えない虚しさに襲われていた。

「そんな便利スキルじやないだろ魔眼は……どっちかというと上級者向けの戦闘補助スキルのはずが何故こんな反則スキルに……」

実際は反則級と言えるほどのスキルでもなく、色々と縛りはあるいのだが、使い手と

組み合わせによつて化けるスキルなのは間違いない。

「……どうしたものかな、クリスちゃんが居る以上あんまり強くも出られんし……で
きれば持ち主に返してやりたいところだが」

カズマが決闘で手に入れた魔剣グラム。使用者以外が使つても効果が薄い神器だが、
珍しい武具を収集しているコレクターは嬉々として飛び付くだろう、上物の武器だ。

そういつたコレクターの手に渡れば、未来永劫陽の目を見ることはなくなつてしまふ
だろう。

魔王軍幹部のベルディアとして考えるのなら売り捌くのが正解なのだろうが、武器防
具の類は戦場で輝くのが1番、と考えてしまふ騎士ベルディアとしての感情がそれを許
さなかつた。

ミツルギに要求したと言う屋敷を受け取つたら返すとカズマはベルディアに言つて
いたが、どう蠶貝目に見てもカズマはまともな神経をしていない。期待は薄いだろう。
実際、クリスをけしかけられたらまず勝ち目がないベルディアは、期待に身を委ねる
しかなかつた。

(しかし……クリスちゃんは一体何者なんだ? ただの上級アンデッドならまだしも、魔
王軍幹部であり魔王様の加護によつて神聖属性を遮断している俺にあそこまでのダ
メージを与えるなんて……)

事実、ターンアンデッドでベルディアにダメージを与えられる人間など、ゼスタか工リス教の大神官くらいであり、世界最強のプリーストとして名を馳せる者たちである。それを鑑みると、明らかにクリスの異常さが際立つ。ベルディアが知る由もないことだが、クリスのレベルは未だ一桁だ。

クリスは、もしかしたら神の加護を受けた本物の勇者か……本腰を入れた天界が遣わした天使の類か。ベルディアはそう予想していた。

「今の魔王もそろそろ歳だし、世代交代も近いかもな。流石に娘ちゃんが負けるなんてことはないだろうが……」

そんな独り言を語っていると、不意に扉がノックされ……鍵がかかっているはずの扉がゆつくりと開いた。

「ん?……ッ!?

そこには、長らく顔を合わせていない同僚の姿。

端整な顔立ち、ふわふわとしたウェーブのかかった栗色の髪に、雪のように白い肌。それに、えらく身体のラインがはつきりと出る、フードに悪魔のツノが付いたデザインの黒いローブを纏っている。

好きか嫌いかで言えば好きだが、過去に色々と確執があり少々苦手意識のある美女は……その実力に見合わずおどおどとした態度で、爆弾を投げかけてきた。

「あの……なんでもお手伝いしますので、暫くここに泊めてもらえないでしようか……」
ベルデイアは鼻血を吹きそうだつた。

第十二話

いつの間にやら宴会はお開きとなつており、この部屋にはたつた3人しか居なくなつていた。

因みにクリスは酔い潰れたアクアを介抱するために何処かへ行つてしまい、ゆんゆんとクレアはそもそも宴会に参加していない。この場にいるのは俺とミツルギと……「おいっ！この野郎俺の飯を……まだ食うかこいつ！」

「お構いなく！お構いなく！」

この、謎の少女である。

「まあまあ……お嬢ちゃんも、あんまり食べすぎるのは良くないと思うよ」

「あなたは黙つててください！食料費も出してない癖に偉そうに！」

「君も払つてないだろう!? 何で僕にだけこんなに辛辣なんだい!?」

黒髪に黒いローブ、大きなどんがり帽子を頭に被つた、どこかでみたような格好をした少女は、俺に羽交い締めにされながらも逞しく飯を貪つていた。

「そもそも誰なんだよお前は！」

「おつとよくぞ聞いてくれました！」

さつきまでの抵抗が嘘のようにするりと羽交い締めから抜け出すと、自信満々にかつこつけた。ポーズを決めて名乗りを挙げる。

「我が名はめぐみん！ アークウイザードを生業とする紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操る者！」

俺とミツルギは目が点になつた。ドヤ顔でポーズを決めるめぐみんは満足げだが。

「なんですかその目は」

「馬鹿にしてんのか……いや待て、なんかどこかで聞いたような……」

どさつ、と何かを落とすような音が、部屋の入り口の方から聞こえてきた。振り返るとそこには目を見開いたゆんゆんが。

「あ、ああああああ！！！」

「め、めぐみん!?」

「どうもお久しぶりですねえ、ゆんゆん」

めぐみんに指を向けぶるぶると震えるゆんゆん。そこで俺は漸く答えにたどり着いた。

「あ、そうか紅魔族つて言つたらゆんゆんと同じ……つまりこいつも惑星ベジータ出身のエリート戦士か……

ん？ めぐみん……あっ！」

思い出した。めぐみんと言えばあの駄女神アクアと一緒に墓を荒らしクレアやベルディアさんやらに迷惑をかけたという例のゆんゆんの友達じゃねーか。ヤバい奴じやん……

「あの紅魔族の出身か。それに爆裂魔法とは……この子、かなりすごい魔法使いなんじやないか？」

顔を引きつらせる俺を尻目に、ミツルギは感心したように呟いた。

やはり王都の辺りでは紅魔族出身の魔法使いが幅を利かせているのだろうか。
「……んで、そのエリートがなんでこんな所で飯を貪つてたんだ？」

「宴会の匂いを嗅ぎつけましてね。因みに大抵の宴会には紛れ込んでいて、お金の節約のためタダ飯を頂いています」

さらつと言い切りやがった。逞しいなこいつ……

そんな事を話していると、ゆんゆんが急に俺の前に出てめぐみんのことを指差して声高らかに宣言する。

「めぐみん！ここであつたがなんとやらよ！今日こそ決着をつけるんだから！」

いつもより声のトーンも高い。ここまでテンションが高いゆんゆんを見るのは初めてだ。

「おいおい、やけに元気じゃないかゆんゆん。いつもはあんまり喋らないで俺たちの後

ろに隠れてるくせに」

「よ、余計なこと言わないでください！」

さあめぐみん！勝負よ！怖気付いたつていうなら見逃してあげないこともないけどねっ！」

めちゃくちゃ上機嫌だな……久々に友達に会えて嬉しいのか？思えばゆんゆんがまともに話せるのなんて俺たちくらいしか居ないからな。
それに対してもめぐみんの方は……

「……食事の席でいきなり勝負とか頭大丈夫ですか？」

「ええっ!?」

……なんともまあ慣れただ様子。

昔からこんな関係だったのだろうか。

「それに先ほどそこのカズマさんとお話ををして居た最中だつたというのに、急に割り込んで勝負だ勝負だつて……そんなんだから友達の一人もできないんですよ」

「うう……で、でも私はもうパーテイも組んでる立派な冒険者で……！」

「パーテイメンバーがお友達ですか？つまりはお友達との遊び半分で仕事をしていると？」

「えっ!?いやそんな事は……」

「はああ……そんな責任感も常識もないような有様でよくパーティなんて組めましたねえ。大方自分からメンバーに入れてもう勇気もなく、酒場でうじうじして居たところを拾つてもらつたとかそんなんでしょうけど」

「い、いやそんな……そんな……こと……」

「わかりました、パーティ云々は置いておきましょう。流石にこれ以上踏み込むのも不躾ですしね。それで、なんでしたつけ？勝負？はあ、まだ学生氣分が抜けでないんですねえ……」

「……」

「はいはい、で、何が良いんですか？魔力でも比べます？それともチエスでも打ちましょうか？火力の勝負は爆裂魔法が使えないゆんゆんが不利になるので辞めといてあげますから。私の食事が終わるまでに何か考えといてくださいね」

「きよ……」

「きよ？」

「今日のところは見逃してあげるわああああああああん！！！」

「……」

半泣きになつてリビングから飛び出したゆんゆんを尻目に、めぐみんは取り出した手帳に○を付けた。

「今日も勝ち」

「お前……お前……」

なんだか、ゆんゆんに優しくしてあげたくなつてきた。

「ま、ゆんゆんの事はいいんですよ。話しかけるだけで機嫌が直るチョロQですし」「……友達のことをそんな風に言うのはどうかと思うけどな」

「事実なので。それに10年近い仲になる私たちの関係に、昨日今日会つただけの貴方が口を出すのもどうかと思いませんけどね」

「……」

難しい顔をするミツルギに対し、食事をしながらさらつと論破するめぐみん。さつきも思つたが、めぐみんはかなり口が達者だ。

魔法使い職にとつて、知力は魔力に並んで重要なステータスだ。見た目はちんちくりんだが、頭は俺なんかと比べ物にならないほど良いんだろう。

「……で、なんでそんなエリートのアークワイザード様がうちなんかで飯食つてんだ?」
さつきから疑問に思つていたことだ。

「だから食費の節約の為に……」

「破裂魔法だつたか? そんなすごい魔法を使えるアークワイザードなら普通金持つてる

だろ」

「それは確かに。紅魔族出身のアーヴィングなら、王都の高レベルパーティにも引く手数多じやないのかい？」

そう、なんでそんな奴が食費の節約なんてやつているのか。駆け出しのパーティなら財布事情が火の車なのは日常茶飯事だが、めぐみんにそれは当てはまらないだろう。

ソロ時代のゆんゆんも、あまり金に困った様子はなかつたはずだ。

「……その事も踏まえて、一つカズマさんにお願いがあるんですよ」

「お願い？」

「ええ。

その、冬の間だけでいいので……ここに泊めてください

「は？」

「お願ひします！皿洗いでもトイレ掃除でもなんでもします！泊めてください！泊めてください！」

「ちよ……離せ！離せこいつ！」

「もう嫌なのです！冬の寒さに凍えて、街のおばちゃんから憐れみの目で毛布を差し出されて泣いて喜ぶような冬を迎えるのは嫌なのです！馬小屋よりはマシかと思わざと軽犯罪を犯して入った独房で迎える新年はもう嫌なのです！」

「やめろ！聞きたくない！そんな地獄みたいな思い出話を聞きたくない！」

……さつきまでの飄々とした態度は何処へやら。めぐみんは必死の形相で俺にしがみついて懇願した。

「だいたいなんなんですか！不公平ですよ！ゆんゆんは族長の一人娘で、友達はいかつたですが生きるのには困らなかつたはずです！ずるいじやないですか！冒険者になつてもこんな豪邸に住んで！羨ましい！とても羨ましい！ぐうううううう！」

「めぐみんちゃん、涙が……」

「泣いてなんかいません！泣いてなんかいませんとも！」

目に涙を浮かべ、顔をぐしゃぐしゃにしながら恨みつらみをぶつけるめぐみん。それでも強がろうとするところを見ると、さつきまでは昔からの友人であるゆんゆんにこん

な姿を見られまいと必死だつたのだろうか……

なんだか、俺までもらい泣きしそうになつてきた。

そんな俺の様子を一目見ると、一瞬で泣き止んだめぐみんは俯き、先程までよりうんとトーンを下げて語り始めた。

「私は……家が貧乏で、満足に食事も食べられない生活を送つてきました。時には一切のパンを家族で分け合い、その辺の葉っぱを食べて飢えを凌ぎ、果ては学校でゆんゆんから奪い取つたおべんとうをこつそり持ち帰つて妹とはんぶんこに……」

「だからその心にくるエピソードをやめろ！ 紅魔族つてのは精神攻撃をしなきやいけない決まりでもあんのか！」

流石に強かだ……と言いたいところだが、エピソードが悲惨すぎてそもそも言つてられなくなつてくる。話の流れでさらつとお弁当を奪われるゆんゆんにも同情したくなるが。

「いいじゃないですか！ 部屋なんていっぱい余つてるでしよう！ 自分のことは自分でしますから！ 迷惑はかけませんから！」

「だから離せつて！ お前アレだろ！ なんか致命的に問題があるタイプだろ！ めんどくさい臭いがブンブンする！」

「なつ！？ た、確かにお金が足りずあんまりお風呂とか入れてないですが体臭は大丈夫の

はずです！紅魔族の汗はバラの香りなのです！」

「そういうことじゃ、」

ない、と言おうとしたところで、後ろの扉が開く音がした。

「おーい、宴会は終わつたか？全く、あいつらと来たら……おい、何やつてる」

宴会が終わつたことを嗅ぎつけ帰つてきたクレアは、こちらを見るや否や、目を細めてこちらを睨み付けた。

今の状況はといえば、俺とミツルギがめぐみんを見下ろし、めぐみんは半ベソかきながら片膝ついて俺にしがみついている。必然、腰の辺りにしがみつく形になつていて

.....

「お願ひします！その、2人分の相手だつて頑張りますから、ここに」

「……貴様ら」

「違うんです！誤解です！」

「改めて、我が名はめぐみん！紅魔族随一の魔法の使い手にして、爆裂魔法を操る者。そして今日からここに居候させていただくこととなつた者！よろしくお願ひする！」

「はい！宜しくお願ひします、めぐみんさん」

「しょ、しようがないわね！そんなに私と一緒に住みたいっていうのなら……」

「いえ別に。広い屋敷にタダで泊めてくれるっていうのでご相反に預かつただけで、ゆんゆんとはなんの関係もありませんが」

「ええっ！？」

そして、どうにかこうにか誤解は解けたが、めぐみんはクレアを味方に付けて居候の地位を勝ち取り、同居人が一人増えることとなつた。

そも、あの性格のクレアがめぐみんみたいな女の子を放つておくはずがなく。しかも最初は食費くらいは家に入れるという確約だつたはずなのだが、いつの間にか食費もタダで三食昼寝付き、家事は分担制に落ち着いてしまつている。クレアをうまいこと丸め込んだのだろう……。

その後、クレアがめぐみんをパーティに誘つていたようだが、それは断つていた。ゆんゆんと同じパーティでは、ゆんゆんに情けをかけられたようで嫌なんだ。

……さつきまで自分の悲惨なエピソードを語つて同情を誘つてた奴が言うことか？
変な意地張つてないで、使えるものは使えばいいのに。ゆんゆん共々まだまだ子供だ
な。

「むつ、なにやらカズマさんから邪な目線を感じた気がしたのですが」
「……」

俺はまず、ゆんゆんを見る。年齢に見合わない豊満な肢体。こう言つちやなんだが、
ぶつちやけとてもエロい。

対してめぐみんは……

「……………へつ」

「ほう、売られた喧嘩は買うのが紅魔族の習わしなのだが？」

「おうおう、こちとら上級職との決闘では百戦錬磨と謳われるカズマさんだぞ？ま、剥い
たところでのその貧相な身体じやあな……」

「ぶつころ」

そう呟いためぐみんは、魔法使いとは思えない力で俺に掴みかかつってきた。望むとこ
ろだ。力まで後衛職に負けてたまるかよつ！

「なんだか、相性良さそうですねあの2人。ふふふ、ああしてると兄妹かなにかみたい」

「カズマめ……あの子と取つ組み合いとは羨ましい……私もクリスさんとプロレスごっことかしてみたい……」

「ほう？ プロレスごっこですか。いいでしよう受けて立とうじやありませんか。後衛職と侮るなれ、この私の凹固めを喰らつたとき、貴女は私に戦いを挑んだことを後悔するでしよう……」

「ふあつ！？ い、良いんですか！？ で、ではその、私の部屋のベッドで……ぐへへ……」

「ふふふ、賢明な判断です。確かに床でやるには危ない技もありましよう。

……ちよつと、こういうの憧れてたんですよね。兄弟姉妹とか居ないですし

「いやあ憧れますよねプロレスごっこ！ わかりますわかります！ 私もクリスさんとそういうことするのすつごく憧れでして！」

「そ、そうなんですか……？」

……なんだか、クレアさんつて私の事妹か何かみたいに思つてる？ スキンシップ多いし、ひとりつ子なんですかね……？」

「めぐみん……まさか、このパーティの魔法使い枠を狙つて……！？

め、めぐみん！ 改めて私と勝負よ！ 絶対に負けないんだからーっ！」

「ふう……それにしても、騒がしくなつたもんだ」

めぐみんがゆんゆんを変なチエスでこてんぱんにして泣かしたり、クレアがクリスに
関節技を決められて光悦とした表情を浮かべて居たりと一悶着あつたが、俺たちは漸く
この屋敷に初めての就寝を迎えるようとしていた。

俺たち4人にめぐみんが加わり、総勢5名。この屋敷の規模からしたら相当に少ない
だろう。

密かに考えていた事がある。この屋敷を冬の間だけ冒険者連中に有料で貸し出せば、
働かなくとも収入が得られるのでは無いだろうかと。

ぶつちやけ、俺は冒険者には向いていない。あの受付嬢にも言われたしな。
不労所得を得られるのならそれに越したことはない。

「となると、まずは掃除とかしなきやな……長い事誰も住んでなかつたみたいだから埃
とかも溜まつてゐるだろうし、あの人の形とか不気味だし片付けないと……？」

最初に部屋を見て回った時、あんな西洋人形なんてあつただろうか。

……気のせいか。そんなにしつかりと見回したわけでは無いし、多分初めからそこに
あつたのだろう。

ま、後のことばは明日考えよう。他の誰かが廊下を歩く音が聞こえるが、俺は早めに寝るとしよう。

明日は冬の間の過ごし方を考えないとな……
そんなことを考えながら、俺は――

人形からの目線に気付く事無く、眠りに就いた。

ウイズという女の話をしよう。

ウイズとベルデイアは長い付き合いで、もう200年ほどにもなろうかという昔。ベルデイアは現役時代の彼女率いる冒險者パーティに襲撃を受けた事があった。

とは言え、人間の冒險者パーティに苦戦するベルデイアでは無い。難なく退けたのだが、問題はその後だ。

魔王軍の幹部狩りなどという物騒な事をしていたウイズは、特に名も知れていなかつたアンデッドに敗れた事で過剰なまでに力を求め……禁呪に手を出し、リツチーとして転生し復讐を果たさんと今度は単独でベルデイアに挑みかかつた。

それはもはや神話の戦いと言うべき死闘だつたそうだが、そもそもリツチーに物理攻撃は通用しない。武器に付与されている魔法効果程度のダメージソースしか無かつたベルデイアに勝ち目はなかつた。

その後、魔王城にベルデイアが逃げ込み、それを追つてウイズが結界を無理やり破壊し侵入、魔王本人も加わる程の戦いに発展した。

その後、一旦体勢を整えようと街に戻ると……そこには、ウイズが見知った顔はどこにもいなかつた。彼女がリツチーになる為の禁呪を発動した結果、副作用として100年ほど眠つていたのである。

人類側に居場所が無くなつたウイズは、スカウトという形で魔王に拾われ、その人柄に惹かれ……その恩義で、幹部として仕事をこなしているのだ。

所変わつて、ベルディア魔道具店。

「なるほど、アクセルの街に大いなる光が降り立つた……ね」

「はい。曰く未だ嘗て無いほどに強大な光を感じたと。女神アクアが頻繁に降臨しているこの街の事だから何があるか分かつたものでは無いので半端な戦力を差し向けるわけにもいかず、かと言つて大袈裟に調査して神に勘付かれても面倒ですので、人間に混じつても違和感の無い私が派遣されたわけです」

ベルディアは頭を抱えたくなつた。

それもそのはず。大いなる光とは、十中八九クリスの事だと言うことは明白であつた。

一応魔王軍に身を置くベルディアはカズマのパーティがどうなろうと不干涉を貫く所存だ。彼らは冒険者であり、賞金目当てとは言え頻繁に魔王軍とも戦う身。中立とい

う姿勢を保つてゐる故、片方に肩入れする気は無い。

問題はカズマ達ではなく、目の前の女魔導師、ウイズについてだ。

「本来こう言う任務はハンスさんあたりが適任なのですが、今の方は紅魔族相手に手一杯のようで……」

「ああうん、そうだな……」

「……あのな、ウイズ。その光というのは……」

「ああ、心配しないでください。もう日星はついていますので」

「ウイズとは相性が…………えつ？」

「その反応からして、あの銀髪の少女に対して何か手がかりがあるのでしよう？ですが心配なさらずとも、今の時点では危害を加える気はありませんよ。あくまで私がやるのは偵察程度ですので」

「…………ああ、うん。そうか……」

「ベルデイアが心配しているのは、この荒事に向かない性格をした彼女がクリスに滅ぼされやしないか、という点である。

特性上、ウイズは神聖属性に滅法弱い。

(明らかに相性は最悪……普通の勇者なら物理も魔法も弾けるウイズを差し向けるのは正道なんだが……)

相性が悪いのは属性だけでなく、性格面もだ。アンデッド相手だと異常に攻撃的なクリスに対し、魔王への恩義だけで魔王軍幹部の座に就いているウイズ。

もし2人が出会つてしまつたら、話し合いをしようとするウイズとそれを完全に無視したクリスが初手最大火力のターンアンドエッドをぶちかますという様子が容易に想像できる。

地面に倒れこんで、命乞いをするウイズとそれを罵倒しながら殺意を放つクリス。実に不自然で、現実的な予想図だ。

「あ、それはそうとベルディアさん！ 実は私、このお店のお手伝いをするにあたつて衣装を作つてきたんです！ それから売つているのは武具が中心だとお聞きしましたので、売れそうな武具以外の商品のアイデアも色々考えて……ど、どうしたんですか？ ベルディアさんその両手にある護符は……」

「いいから持つとけ。神聖魔法の効果を減らす護符だ。いつぱいあるぞ」

「い、いえ……魔王様から加護をもらつていますし、神聖魔法対策はもう……」

「いいから」

「えつと……じゃあ、お言葉に甘えて一つ貰つておきますね」

「遠慮すんなつて。10個くらい持つてたほうがいい」

「そんなに!?」

流石に、同僚を見殺しにするのは夢見が悪い。ベルデイアは、この何処か頼りない雰囲気を纏う同僚を守ろうと固く心に誓つた。恐らく敵意剥き出しで消滅させようと迫る魔の手から守ろうと。

——ウイズの真なる矛先が向いているのは、自分だという事に気付かずに。

第十四話

この屋敷に引っ越してから暫く。朝や夜はすっかり冷え込み、二度寝が恋しい季節……だが、我が屋敷にはそんな神の恵みとも呼べる二度寝を脅かす脅威が巢食つていた

「を」

「はい！」

「はい、クリスさん早かつた」

「死靈魔術ネクロマント」は悍ましきアンデッドあのカスどもの十八番であることから、この事件の黒幕はあの首無し腐肉生ゴミ野郎であると推察されます！ つきましては即刻消滅させる許可を頂きたく存じます！」

「今後クリスは発言を控えるように。他には？」

「何故!?」

そう、それはまだ多少寝苦しかった日の朝のこと――

その日は前日の夜に宴会があり、常識人の俺は飲兵衛たちの介抱を任せられ、疲れて昼まで泥のように眠っていた。

「ふああ……よく眠れた」

目を覚ました俺はまだあまり慣れない部屋を見渡し、クローゼットの中から着替えを取り出して……ふと、何かの視線を感じて振り向く。

すると、化粧箪笥の上に置いてある西洋人形と目が合つた。

（……あれ、確かにベッドの方を向いてなかつたか……？）

夜寝る前に人形を見たのは覚えている。その時に正面を向いていたような気がするのだが。

嫌な汗が流れる。心なしか人形にじろじろと観察されているような気がしてきて

「うん、気のせいいか」

自分に言い聞かせるように咳き、さつさと着替えを済ませる。普段よりも素早く着替えることができた。これも大きな屋敷に引っ越して来たことで余裕が出て来たんだな

！ うん！ そうに違いない！

早くギルドにでも行こうと部屋の扉に手をかけた途端、どさつ、と何かが落ちる音がした。ひいつ、と情けない声が出てしまった俺を、誰が責めることができようか。

恐る恐る振り向くと、やはりというか人形が床に転がっていた。偶然にもこちらを向いて倒れたようで、またもそのガラスの双眼と目が合った。

正直触れたくもないところだが、このままにしておくのも気味が悪い。できる限り人形を見ないようにして、元の場所にうつ伏せの状態になるようにして置いた。これで目を合わせなくて済む……と、思いたい。

「本当に……ほんっとうにやめろよ……そういうの誰も望んでないからな……もつと気持ちのいい冒険活劇が見たいんだよ……なんで異世界くんだりまで来てB級パニックホラー見たいつづうんだよマジで……」

念入りに人形へと言い聞かせ、俺は部屋を後にした。くそ、ミツルギに文句言つてやる！

「あつ！ 漸く起きてきましたか！」

すると、廊下で拭き掃除をしているめぐみんと会つた。なんだか何時もより語気が強い。

「ん？ めぐみんじやないか。こんなに早くから掃除とは精が出るな、じゃ俺は急いで

るから……」

「ちよつと待つてください！ 縛ら私に腕相撲で負けたからと言つて、こんな嫌がらせして恥ずかしくないんですか？！」

「はあ？ なんのことだよ。それと俺は断じて負けてない。お前が先に勝利宣言しただけで手の甲はまだ付いてなかつた」

「見苦しい……！ とにかく、この足跡の掃除は責任を持つてカズマさんがやるべきです！ 当番だからと言つて私に押し付けるとか最低ですよ!!」

「足跡……？」

床を見ると、なるほど確かに一面に足跡の汚れがびつしりと付いている。しかし俺は何もしていないので、他の誰かと言うことに……

.....

「なあ、めぐみん」

「何ですか？ 言い訳は後で聞きますからさつさと雑巾持つてきてください」

「この足跡、明らかに小さいんだけど……なんつーか、子供くらいの……」

「そんな……あれ、確かによく見たら私の足よりも小さいような……」

めぐみんは怪訝な表情で床とにらめっこしている。そう、明らかに子供のような足跡がそこら中にびつしりと……

「…………あつ、ああ～…………えつと、実は私今日用事があるのでギルドに出かける用事が……」

「きつ、奇遇だなめぐみん！ 実は俺もギルドに用事があつたんだ！ 一緒に行こうぜ！」

「そ、そうですね！ 一緒に行きましょう！ は、早くしなければ時間に間に合わなくなつてしまします！ あはははははは！」

「ははははは!! 早く行こうぜ！ ははははは!!」

早く、と気を紛らわせるように大きな声で笑い合う。

すると、背後から足音が。大声を出してしまったので誰か起こしてしまつたのだろうか？ だけど声もかけないなんて……

あれ、これまずいやつなのではと俺が言う前にめぐみんが振り向いて足音の主に話しかける。

「おや、ごめんなさい起こしてしまいましたか？ 良ければ一緒にギルドに」

振り向いた先には誰もいない。ただ、ひたひたと言う不気味な足音と砂利の混じつた荒い泥の足跡だけが少しづつこちらに近づいてきた。

「ひ……」

「し、喋るなよ……目も逸らしちゃダメだ……静かにやり過ごすんだ……静かに……」

生臭い風が俺とめぐみんの間を通り抜ける。足音が通り過ぎるまでの10数秒間は、まるで永遠の様に思え、そして足音が聞こえなくなつた瞬間に俺たち2人はへたり込んだ。

「な、なんだつたんですか今の？ 何だつたんですか今の!?」本当に怖かつたんですけど!?

「お、おちら、落ち着くんだめぐみん。もう早く行こう」
そうして立ち上がつた瞬間――

『オソウジシナクテイイノ?』

2人の耳元から、子供の無邪気な声が。
「ぎやああああああああああ!!!」

そして今に至る訳だが……

その後も幽霊は屋敷の至る所に出現し、その度にクリスやクレアが一体一体浄化するという日が続いた。

曰く、こう言う屋敷にゴーストの被害はよくあることで、その類のクエストも数は少ないが普通に存在するらしい。

それで事態は収束するかに思われたが、何故か全く被害は収まることを知らない。

最初は脅かす程度だったゴースト被害も、徐々に実害が酷くなつていく。夜になると子供の笑い声がこだまするなどの睡眠妨害に始まり、朝になると屋敷中の窓に手形、歩いていると急に足を掴まれ転ばされる、何故か食事が急に冷たくなる、皿が飛んでくる等のポルターガイスト etc……

この間はシャンデリアが急に鎧びて落ちてきてクリスが頭を打つて悶絶していた。

それどころか、理由は全く不明だが徐々に神聖魔法の効き目が悪くなり、今や高レベルであるはずのクレアの対不淨魔法^{ターンアンダット}ですら净化には至らなくなつた。

クリスならなんとか净化ができるが、彼女が屋敷に常時貼つている神聖結界^{サンクチュアリ}を嘲笑うかのようにゴースト被害は増え続けている。

そもそも女神であるクリスの神聖魔法が、結界系のものとはいえ効かないと言うのも相当おかしな話だ。かと言つて、皆に女神エリス本人である事をバラすわけにも行かな

いので、この異常さを共有することもできない。

耐えかねた俺は、一旦全員を集めて会議を開くことにした訳である。

「まさかこんなことになるとは……」

くそつ、自らのレベルに胡座をかいた結果がこれか。無力とは辛いものだな……」

普段より弱つた風のクレアが呟く。

聞けば初心者時代にゴースト関係のクエストを何度も受けたという。普段なら簡単に対処できるものに対しても無力だと言うのは情けない……と語っていた。

「……眞面目に引っ越しごとを考えてみませんか？ 居候の私が言うのも何ですが、ちよつと異常ですよ。この間カズマさんが本棚に潰されて死にかけてた時も、クリスさんが屋敷に居なかつたら今頃……」

「で、でも流石にそんなすぐに引っ越すのはちよつと……」

「いや、めぐみんの言う通りかも知れない。流石に冒険者になつて家具に潰されて死ぬのは嫌だぞ俺」

あの時は本気で死ぬかと思つた。ベッドの下から血塗れの女がこつちを見つめてて、思わず飛びのいたらその先にあつた本棚が急に倒れかかってきて……どこのピタゴラ〇イツチだよ。

「最悪私が屋敷を爆裂魔法で消しとばしてあげますよ。木つ端微塵にすれば流石のゴー

ストも出て行くでしよう」

「俺たちも住めなくなるじゃねーか！」

「……屋敷を爆破するのは流石にやめておくとして、実際引つ越しの事はちょっと考えた。確かこの前クレアが借りてた借家でも5人くらいは住めると思う、どうだ？」

そう提案すると、普段はあまり我を通さないゆんゆんがえらく饒舌に語り出す。

「えっと、本棚の件はカズマさんの不注意もありますし、結果的に無事だつた訳ですから。それにほら、流石に屋敷が勿体無いですでの……その、都合よく他の宿が空いているとも限りませんし……」

「「「……」」」

「このお屋敷も別に自分たちで買つたわけでも無いので罪悪感も……？　え、な、何ですか？」

「みなさん私の方をジロジロみて……何でも無いですよ？　本当に……」

明らかに挙動不審気味なゆんゆん。どう考へても怪しい。

全員で目を見つめていると……ゆんゆんがさつと目を逸らした。

「ダウトだな」

「ああ。間違いない」

「確定ですね。ゆんゆんさん、後で部屋を捜索させていただきます」

「ええつ!?」

ゆんゆんは驚いているが、こんな事態になつたというのにまだなんことをしていると言うのは理解に苦しむ。

「ま、待つてください！ 大丈夫ですから！ メアリーちゃんもジェニスちゃんもジニーくんもすごく良い子で！」

「ふざけんな！ 何が良い子だ！」

「これ以上やつたら友達辞めるって言つたの忘れたんですか？ ん？ どうなんです？ 紅魔の里に強制送還されたいんですかあなたは」

「びいっ！ お、お願ひだからそれだけは！ ちゃんと私が責任持つから！ 大丈夫だから！」

「うわまだ言つてる怖つ……もうこいつ手遅れだろ。いつそのこと修道院にでもぶち込もうぜ」

何とこの拗らせぼっち、あろうことが幾度となく部屋に幽霊を匿い、話し相手にしているのである。最初に発覚した時には『みんな私がお話ししてもちゃんと反応を返してくれる良い子達』とぬかしやがつた。

部屋の浄化が終わつた後、念の為にクリスがお祓いをしても何故か精神は正常だとう判定が出た。

正常とは一体なんなんだ……？

「後生ですから！　後生ですから！」

「ダメに決まつてゐるでしようが！　飼うなら犬が猫にしなさい！」

「犬も猫も吠えるし噛むからいやあ！　幽靈さんはみんな優しいの！　彼女たちは遊びのお誘いもしてくれるのでよ!?　夜になるとみんなかくれんぼに誘つてくれるの！　みんなすつごく良くしてくれるの！」

「連れて行かれかけてるじやないですか……そもそも被害が出てるのによくもまあ抜け抜けど……」

「よせ、かわいそうだがもう手遅れだ。俺たちの手の届かない遠くへ行つてしまつたんだよ……」

「なんで死んだみたいな扱いに!?」

もうゆんゆんのことは一旦放つておこう……こんなことならめぐみんを仲間に加えておけば……

いや、それはそれで何だか悪い予感がする。無い物ねだりはやめよう。

「ですから大元を叩くのが一番ですつて！　自らが天の法に逆らうだけに飽き足らず、無辜の魂を操り惑わすなど言語道断！」

クリスは終始ベルディアさん黒幕説を提唱している。ゴーストが出た当初から一貫

してこんな態度だ。

「ベルデイアさんがそんなことするわけないだろ。動機もないだろし……そもそも何で神聖魔法が効かないんだよ」

「そ、それは……でも確かにんです！ その……アレです！ 私の勘が言つてます！ 間違いありません！」

「………… ク里斯もゆんゆんと似たり寄つたりの重症だ。なんでこの連中、どいつもこいつも人の話を聞かないんだよ…………」

「………… 確か、魔王軍のアンデツドや悪魔には神聖魔法が効きづらいって聞いたことがあ
るな」

「は？ 魔王軍？」

「ぼそつとクレアが不穏なことを言う。

「何ですって？！ やつぱりそうですよカズマさん！ あのクソ蛆虫ヘタレ野郎は魔王軍に所属していて、正攻法で私を倒せないからって嫌がらせに走ったんですよ！ 間違いない！ 何と卑劣な！」

「そんな！ そんなはずはありません！ ジニーくんはイタズラ好きとは言え根は優しい良い子ですし、何よりあの引っ込み思案で大人しい性格のアイリーンちゃんが魔王軍に与しているなんてそんなこと……！」

「ええい埒があかん！ なんでお前ら人の話を全然聞かないんだ！」

流石にこれ以上話し合いをしても意味は無いだろう……唯一冷静そうなクレアも何か具体的な案は出せそうにはないし……

パリン……

……どうやら食器の一つが独りでに割れたようだ。退治なんて考えるな、という意思表示だろうか？ 反射的にクリスがターンアンデツドをぶちかましていたが。

「はあ……俺はちよつと情報収集に出てくる。めぐみんはゆんゆんを見張つてくれ。クリスとクレアはゆんゆんの部屋のお祓いを頼む」

「待つて！ お願ひだからやめて！ 私からみんなを奪わないで――――！」

悲痛なゆんゆんの叫びを背に、俺は屋敷を後にした。

そうして俺はベルディアさんの店に来た。

魔王軍がどうとか不穏な話もあつたことだし、そもそも最初にクリスが言つた通り死靈魔術ネクロマンシーはアンデツドの十八番。神聖魔法ではどうにもならなかつたことも死靈魔術

のことを調べれば解決への道が拓けるかもしれない。

そうしてベルディアさんの店のドアを開けると、

「い、いらっしゃいませ……！」

栗色の髪が美しい、エプロン調の衣装を身につけた美女が、何やらぎこちない様子で俺を迎えてくれた。

「あ、ど、どうも……」

ベルディアさんに失礼かもしねれないが、この無骨な店に似つかわしくないような女性。ベルディアさんの野太いイケボを想定していた俺は面食らつて、コミュ障よろしく威圧されてしまった。——ベ、別に俺は緊張なんてしてないからね？

「如何されました？」

「あ、いえ……その、ベルディアさんはどちらに……」

「——やあ、カズマくん……久しぶりだね……」

所在を尋ねようとした矢先、店の奥からベルディアさんが出てきたんだが……

「痛てて……今日は、どうしたんだい？」

「いやこっちのセリフつすよベルディアさん」

なんだか元気がない。若干寝れた風ですらある。椅子に座るだけでも痛くて、とか言つちやうし。歳なんだろうか……アンデッドに歳は関係ないはずだが。

「怪我でもしたんすか?」

「えっと……うん、まあそんな所だ。ちょっと火傷しちゃってな……ほら、アンデッドつて火に弱いから。

あー……カズマ君は大丈夫か。ちょっと待つてな、紅茶入れてくるから……」「いやほんとになにがあつたんですか!? あとお構いなく!」

そんなことを言いつつベルディアさんは店の奥へと引っ込んで行ってしまった。「火傷つて言つてたけど……いや火傷ごときであんなになるか? 普通」

心配だ……と、そんなことを考えていた時。

「あの、少々よろしいですか?」

「え!? あ、はい」

あの巨乳の店員さんが話しかけてきた。

「えつと……はじめまして、ですよね? 私はこの店で臨時のアルバイトをさせていた
だいているウイズと申します」

よろしくおねがいします、と鈴の鳴るような美しい声で握手を求められた。

よくよく考えたら不自然な行為であるが、美人に握手を求められて嫌な気分になるわけもなく、さつとその手を握り返し……

「あれ……」

「サトウカズマさん、でしたか？　ふふ……」

冷たい、という違和感を覚える暇もなく。咄嗟に手を離そうとするも、既に体は自分の意思では動かさなくなっていた。

愉快な気持ちを隠さない美しい声と、貼り付けた様な笑顔がとても似合う彼女は……優しく、俺の手を軽く握りしめる。

「ち…………から…………が…………」

体が重い。手足の感覚が薄くなる。そして何より、思考に霞がかかつたように何も考えられなくなっていく……

いし…………き、が…………し…………ぬ…………

【不死王の手】…………嗚呼、身体が痛い。指先がボロボロ……やはり何かしらの防御策は取られている様ですね。ダメージは大きいようですが……命までは吸い取りきれなかつた』

手を握られてからたつたの十数秒でカズマ自身の魔力は全て吸い尽くされた。

本来、カズマごときの魔力量ならば生命力を無理やり魔力に変換されて搾り涙となり死に至るまで一瞬すらかからない。

それなのにカズマが生きていられるのは、ウィズが手加減をしているからだけではな

く、クリスがこつそり仲間に付与していた神聖属性の防御魔法があつたからである。

「まあ良いでしよう、元々殺す気は無かつた訳ですね。ふふ……貴方の命は一滴残らず私が利用させてもらいますからね……」

——それを含めてさえ、カズマが耐えられるのは数秒が限界だったのだが。

ベルデイアが紅茶を注いで戻つてくると、土魔法で手足を拘束されたカズマが床に転がつていた。

「おまたせ……!?　おい、何を……!？」

「あ、ベルデイアさんありがとうございます。貴方があのクソ忌々しい女の一味を誘き寄せてくださつたおかげで有利に立ち回ることが出来そうです」

笑顔でベルデイアに語りかけるウイズ。なんだか昔のイケイケだつた頃の様な危な

い雰囲気を醸し出している。

「いやそんな事をした覚えは無い！」
「まつたろ？！」
「なんなら俺が

マジでやめとけって！
報告するだけの情報は集

「いーやそれだけじや足りませんねつ！」

「ええ……」

憤慨した様子のウイズは最早聞く耳を持たない。

「絶対に私があの一味を始末してやりますとも！ 神は信者と共に依存の関係にありますので、このカズマという冒険者は確実に切り札となり得ます！ 爆弾でも仕込んで家に帰せばそれだけで……！」

「やめろやめろつて！ 第一本當に彼女が女神エリス本人ならそんな爆弾程度効く訳ないし、復活の魔法も使えるだろ！」

そうして話をしていると、最早日課となつた極光がベルデイアの店を包み込んで――

そして、数分後。

「いたたた……？ ウイズ？ おいウイズ！？」

「……」

いつの間にか制服から紫のローブに着替えていたウイズは、無言で店の商品を幾つか物色する。

ベルデイア曰く、その顔は氷像のように美しく、また能面の様に何処か恐ろしさを秘めていたという。

そして数時間後のカズマ邸。

「それにしても遅いですね、カズマさん」

「ああ、そうだな……もう先に食べててもいいんじやないか？」

あいつの自業自得だろ」

仲間の彼女らは夜が深くなつても帰らないカズマを心配していた。

「うーん、確かに遅いですね。ベルデイアさん^{屋敷}の店に行くと行つてましたし不安ですが……まあ、カズマさんなら別に大丈夫でしようけど」

「そうですね。どうせ宴会にでも巻き込まれてるんですよ多分。そんな男より私のハンバーグを優先することは間違つているだろうか？　いや間違つていない」

「めぐみん……ちょっとは心配してあげようよ……」

「あつ、おいしい！　今日の当番はクリスさんでしたか！　いやー、流石クリスさんのご飯はいつも美味しいですね！　ゆんゆんと違つて」

「もう食べてるし……今なんて言つたの？」

「あつ、こら！　先にいただきますしてからだろう！　全く……では私もいただきます。うん、おいしい！　流石クリスさんの手料理、絶品だ！　仕方ないからカズマの分もみんなで分けて食べよう！　仕方ないからな！」

「あつ、私のハンバーグ！」

「カズマさんのでしょ!?」

心配していた。少なくともゆんゆんは。

「それにしても今日はやけに静かですね。普段はもつと家鳴りとかラップ音がそこら中から聞こえるのに」

仕方ないので先に夕飯を食べ始めた4人は、屋敷に住まう幽霊の話を始めた。

「確かに……クリスさん結界かけ直しました?」

「結界は毎日かけ直してますけど…………」

…………?」

「幽霊が大人しいと寝てる間が少し怖いよな」

もう完全に慣れてしまった幽霊について話していると、ふとクリスが何かに反応する。

「この感じ……」

「……? どうしましたクリスさん」

「急に上を見上げて……どうしたんですか?」

「フツ、ゆんゆんには理解わからないか。このレベルの話は……この魔力の渦巻き、とんでもない驚異がこの街に迫っているようですね……」

「めぐみんには聞いてないよ!」

「ツ!? 拙い!」

「ひやあつ!」

珍しく大声を上げ、急に立ち上がるクリス。 そして空に向かつて手を伸ばし——
「魔法防御ツ!!!!」
「マジックガードツ!!!!」

かなりの魔力を込め、防御魔法を放った。

瞬間、屋敷全体を揺らすほどの轟音が響き渡る。

「えつ!? えつ!? な、なにこれめぐみん！」

「わ、私に聞かないでくださいよ！」

……あれ、もしかしてこれ……爆裂魔法?」

「え?」

爆裂魔法。魔法の頂点と呼ぶ者もいる程の、最大にして最強の魔法。恐らくはこの街で使用できる人間は一人しかおらず、その一人でさえ一撃放てばその消費魔力から確実に立つことすらままならなくなる

そんな究極の威力をもつた爆裂魔法がクリスの魔法防御に阻まれ、そして2発目が魔法防御を打ち破り――

その日、アクセル郊外の屋敷は瓦礫の山となつた。

「うひやああああ!? えつ!? 何!」

凄まじい爆音で、今まで呑気に意識を失っていたカズマは目を覚ました。
「あれ、確か俺、ベルデイアさんの店で……
いや寒つ。は? なんで外?」

「……起きたか、カズマくん」

「うおつ、ベルデイアさん?」

起きるとそこはベルデイアの店ではなく、何処かの茂みの影だつた。空はすっかり暗くなり、夜の風が身体を容赦なくカズマの体を冷やす。
そして、周りを見渡すと……

「あつはははははははは!! ザマア見ろクソ女ア! 何が偵察よ、もう任務も何も知ら
ないわ! 全力でぶつ殺してやる! あはははははははははははは!!!!」

「……」

狂つた様に笑う、ベルデイアさんの店にいた店員さんが…………ん?

「え、あれもしかして…………」

「俺の家…………?」